

# 地域連携推進機構年報

第1号

2014年3月

園田学園女子大学  
園田学園女子大学短期大学部



2014年3月16日 大学COC事業キックオフシンポジウム

園田学園女子大学 地(知)の拠点整備事業  
**〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム** 文部科学省 地(知)の拠点

建学の精神「捨我精進」にもとづき、多面的に地域課題に向き合うことができる社会に有用な人材の育成

尼崎市の地域課題



健康づくり



学校教育



生涯学習



子ども・子育て支援

**研究**

まちづくり解剖学  
教職員・学生・自治体  
 職員・地域住民等が  
 集まり、地域社会の  
 課題を共有し、意見  
 交換する定期的な  
 研究会



**教育**

人間健康学部	人間教育学部	短期大学部
総合健康 学科	人間看護 学科	生活文化 学科
保健実習 学科	言語教育 学科	幼児教育 学科

22年度 通年  
**つながりプロジェクト**  
 課題解決型科目  
大学基礎科目  
 生命尊厳ある・大学の社会貢献・女性と社会  
 地域理解導入科目

**全学を横断する経験値教育**  
 「知識」を「知恵」に変える循環型の「経験値教育」  
 大学と地域による新しい評価システムを導入

**社会貢献**

まちの相談室  
学生主体の運営  
 大学と地域の交流

まちの支援員  
まちづくりに携わる  
 地域・市民の育成





「尼いも」の農作業体験 2013年8月20日  
(尼崎商工会議所との連携)



庄下川での親水プロジェクト 2013年10月16日  
(尼崎市立立花北小学校との連携)



防災カフェ 2013年12月22日  
(尼崎市立大庄公民館との連携)



杭瀬交流フェスティバル 2014年2月22日  
(杭瀬小学校区学習センター運営会議との連携)

## 〈巻頭言〉

「地（知）の拠点整備事業」は、大学での学びを通して地域の課題などに対する学生の認識を深め、その解決に向けて主体的に行動できる人間を育成するとともに、大学のガバナンス改革や大学の強みを生かした大学の機能分化を推進し、地域再生・活性化の拠点となる「地域のための大学」の形成を支援するため、平成 25 年度から文部科学省によってはじめられた事業であります。

本学も、これまでに「地域に開かれた地域とともに歩む大学」を目指し、多くの分野で連携し各種の事業を進めてまいりました尼崎市ならびに尼崎商工会議所を主なパートナーとして「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」をテーマに本事業に応募し、採択されました。

本学は設立時の「捨我精進」という建学の精神を受け継ぎ、人や社会など他者と支え合える自立した人間の育成を実践し、現代社会を力強く生きる女性として社会に送り出すことを教育理念としており、この理念を具体的な教育の場では「学んだ知識」を経験を通して「生きた知恵に変える」という「経験値教育」を教育のバックボーンとして実践しております。

本学はこの様な教育理念と本学の設立当初の経緯を踏まえ、所在地である尼崎市を中核として地域を対象に、これまで尼崎に所縁のある近松門左衛門の業績を中心とした近世芸能関連分野の研究を対象とする近松研究所を設立し、その研究成果の普及に努めたり、あるいは社会人を対象として生涯学習事業を 30 年以上にわたって実施するなど、地域に開かれた大学づくりを同時に進めてまいりました。

今回の「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」事業の実施を通して、これまでに培ってきた地域貢献活動や事業における経験を基盤に、さらに本学が持つ各種の知的資源を活用し、地域の活性化や地域の知の拠点としての役割を果たし、大学の大きな使命の一つである社会貢献を実行してまいりたいと考えております。同時に、本学の教育の基本的なコンセプトであります「経験値教育」を実践する「場」として活用し、この事業の中で、各種の課題を解決し目標を達成することにより、学生の社会参画への動機づけやその育成などを実現し、さらに、この事業を一つのステップボードとして、これからの本学の教育の主要な柱の一つとして本事業の主旨を発展充実させてまいりたいと考えております。

本報告書は、平成 25 年度に実施しました本事業の成果をまとめたものです。ご高覧を頂き、これからの事業の推進に対し、ご理解とご支援、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

平成 26 年 3 月

園 田 学 園 女 子 大 学

園田学園女子大学短期大学部

学長 富永 嘉男

## 目次

巻頭言	1
目次	2
<b>地域研究報告</b>	3
尼崎伝説データベース（稿）	4
健康意識の高い町・尼崎の土台作りと食育の定着について	18
<b>活動報告</b>	23
平成 25 年度<まちづくり解剖 尼崎>	24
1 人一台タブレット端末実現に向けた ICT 活用尼崎市モデルの作成	26
地域に向けた手洗い指導の拠点の構築～手洗い教室の効果の検証～	27
地域資源を活用したまちづくりモデル構築のために基礎的研究 ―歴史文化遺産としての民俗文化財の発掘―	28
地域と大学の連携・協働による子ども・子育て支援者課題解決 ―尼崎市における子ども・子育て支援の実態を踏まえて―	29
「高齢者がその人らしく安心して暮らせる尼崎づくり」 ―高齢者がこれまでの経験と生涯学習の成果を地域で生かすための検討―	30
地域と取り組む防災教育	31
健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について	32
庄下川の河川環境を利用した児童生徒のための親水プログラムの構築実施	33
尼崎市に住む高齢者のための運動交流プロジェクト開発と実践	34
学生活動報告	35
<b>キックオフシンポジウム</b>	41
大学 COC 事業で大学に望むこと・期待すること（松坂浩史）	42
経験値教育―経験値評価システム―（大江篤）	46
<b>怪異学フォーラム「芸能と怪異学」</b>	57
報告要旨	58
パネルディスカッション記録	62
<b>彙報</b>	65
会議記録	66
-----	
<b>地域研究報告</b>	
早稲田大学所蔵『銀の筭』翻刻・解題	86（一）

## 地域研究報告



歴史の旅 in 尼崎 (2013年11月10日)



第3回 まちづくり解剖学 (2013年12月12日)

## 地域研究報告

### 尼崎伝説データベース（稿）

研究代表：大江 篤

共同研究員：久禮旦雄・久留島元

本データベースは尼崎六地区に伝わる伝説・民話といった「フシギな話」を一覧としたもので、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学 COC 事業）に採択された園田学園女子大学の「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」地域志向研究の一環として作成したものである。

このような「フシギな話」は、本来地域に根差したコミュニティによって伝承されていくものであり、それ自体がひとつの文化遺産と言える（大江篤「尼に伝わる不思議な話」『南部再生』vol.47、2014年4月）。兵庫県出身の民俗学者・柳田國男はここに、当たり前の日常を送る日本人の心性を読み取ろうとした。

柳田の試みは、次の世代にも継承され、全国的な民俗調査の結果、様々な「フシギな話」が収集された。また柳田以前にも江戸時代の地誌や怪談集に同様の記事が書き留められている。兵庫県に限っても播磨地域の『西播怪談実記』や丹波地域の『多紀郡郷土史考』、但馬地域では兵庫県教育委員会編『但馬海岸』（1974）などが確認できる（大江篤「兵庫の怪談」『幽』vol.17、2012）

しかし、これらのデータは基本的に研究者が活用するもので、一般の市民によるアクセスは困難な状況であった。そのため、近年の妖怪・怪談などへの関心の高まりとともに、これらの情報を地図や書籍などにまとめ、町おこしと連動して活用する試みが広まっている。

たとえば姫路商工会議所青年部伝説・『MACHIOKOSHI』委員会作成、播磨学研究所研究員埴岡真弓監修「播州姫路 伝説巡覧図絵」、愛知県豊橋市の株式会社うちら

（代表取締役社長 内浦有美氏）による「豊橋妖怪 MAP」・『豊橋妖怪百物語』、愛知県田原市における電子書籍『お散歩 e 本 ふしぎ編』などが代表的なものである。

尼崎地域では、すでに尼崎郷土史研究会会報『みちしるべ』33号・34号に、先行する史料・地誌・伝説集や聞き取りなどをもとにした「特集 尼崎の伝説」が掲載されている。本データベースはこれに基づき、そのほか『近畿民俗』55号、坂江渉『神戸・阪神間の古代史』などを参照し、大江篤本学教授の指導のもと、共同研究員の久禮旦雄・久留島元が入力作業を行い、作成した。

将来的にはこの中からおおよそ 100 話を「尼崎百物語(仮)」として選定し、地図化や、典拠史料の検討、現地調査の結果などを加えた書籍化などによって活用することを予定している。

ここでは、「尼崎伝説データベース（稿）」を紹介するとともに、大江篤が、阪神南地域ビジョン委員会コミュニティ部会セミナー（園田学園女子大学、2013年12月7日）、大庄地域振興連携推進会議生涯学習部会研修会（尼崎市立大庄公民館、2014年2月25日）、園田小学校みまもりネット交流会（食満県民交流広場、2014年3月15日）、尼崎倶楽部（都ホテルニューアルカイク、2014年3月19日）に講演した際の資料から関係する箇所を抜粋したものを紹介したい。

大江 篤（人間教育学部児童教育学科教授）

久禮旦雄（三重大学非常勤講師）

久留島元（同志社大学非常勤講師）

## 凡例

一、データベースの内容については、尼崎郷土史研究会会報『みちしるべ』33号(2005年3月)、34号(2006年3月)に基づき、辰井隆『武庫川六甲山附近口碑伝説集』(民俗学研究所、1941年)、『近畿民俗』55号(1977年11月)、『南部再生』28(2008年3月)、坂江渉『神戸・阪神間の古代史』(神戸新聞総合出版センター、2011年)などの情報を加えた。

二、伝説の収載順序は、『みちしるべ』に基づき、中央・小田・園田・立花・武庫・大庄とした。

三、地名は『みちしるべ』に基づき、適宜、現在通行する呼称で補訂した。

四、各伝説には出典を記した。略号として『みちしるべ』に準じたものは以下のとおり。

- ・ 尼郷土 『尼崎郷土誌』
- ・ 尼今昔 畠田繁太郎『尼崎今昔物語』
- ・ 尼散歩 『尼の散歩道』
- ・ 尼志 『尼崎志』
- ・ 尼事典 『尼崎地域史事典』
- ・ 尼神社 『尼神社あんない』
- ・ 尼伝説 『尼崎の伝説』
- ・ 尼文学 『尼崎の文学』
- ・ 尼みを 『尼崎みをつくし』
- ・ 戌井 『戌井の伝承』
- ・ 浅井 『浅井の伝承』
- ・ 絵太閤 『絵本太閤記』
- ・ 大庄誌 『大庄村誌』
- ・ 小田し 『小田のしるべ』
- ・ 小田要 『川辺郡小田村村

## 勢要覧』

- ・ 落穂 『摂陽落穂集』
- ・ 解放史 『尼崎部落解放史』
- ・ 川筋 『兵庫の川筋』
- ・ 川角 『川角太閤記』
- ・ 川千鳥 『武庫の川千鳥』
- ・ 川辺郡 『川辺郡誌』
- ・ 神崎今 『神崎・今は昔』
- ・ 神崎川 『ふるさと一神崎川と小田』
- ・ 奇観 『攝陽奇観』
- ・ 笈埃 『笈埃隨筆』
- ・ 京童跡 『京童跡追』
- ・ 源盛衰 『源平盛衰記』
- ・ 考察 『尼崎史の考察』
- ・ 口碑 『武庫川六甲山口碑伝説集』
- ・ 三才 『和漢三才図会』
- ・ 参盛衰 『参考源平盛衰記』
- ・ 市現勢 『尼崎市現勢一覧』
- ・ 市史 『尼崎市史』
- ・ 春秋 『大阪春秋』
- ・ 書紀 『日本書紀』
- ・ しるべ 『みちしるべ』
- ・ 神代記 『住吉大社神代記』
- ・ 信長記 『信長公記』
- ・ 新阪神 『新阪神史話』
- ・ 撰群談 『摂陽群談』
- ・ 撰風土 『撰津風土記』
- ・ 撰名所 『撰津名所図会』
- ・ 千本桜 『義経千本桜』
- ・ 園 『わたしたちのふるさと一園田』
- ・ 園田 『あなたは園田を知っていますか』
- ・ 太功記 『絵本太功記』
- ・ 立花志 『立花志稿』
- ・ 地域史 『地域史研究』
- ・ 藤簍 『藤簍冊子』
- ・ つる 『武庫のつる』
- ・ 富松記 『富松風土記』
- ・ 中山道 『わたしたちの歩

## いた中山みち』

- ・ ニュース 『郷土史ニュース』
- ・ 稗史 『伝説と稗史』
- ・ 春雨 『春雨物語』
- ・ 阪史話 『阪神史話』
- ・ 播名所 『播州名所巡覧図絵』
- ・ 東今北 『東今北の歳時記』
- ・ ひょうご 『ニューひょうご』327(1994年)
- ・ ひ盛衰 『ひらがな盛衰記』
- ・ 筆拍子 『攝陽見聞筆拍子』
- ・ 平家 『平家物語』
- ・ 法然伝 『法然上人伝』
- ・ 細川記 『細川両家記』
- ・ 丸綱目 『難波丸綱目』
- ・ 水輪 『小田の水輪』
- ・ 昔と今 『むかしと今と』
- ・ 武庫郡 『武庫郡誌』
- ・ 武散歩 『武庫の散歩みち』
- ・ ものがたり 『尼崎の歴史ものがたり』
- ・ 礼賛 『故郷礼賛』
- ・ 老翁 『老翁夜話』
- ・ TOM 『TOMROW』32(1994年)

## その他、参照した図書

- ・ 尼民話 三好美佐子『尼崎の民話』(甲南出版社、1997)
- ・ 上方 『上方』59(1935年11月)、71(1936)、72(1936)
- ・ 義空伝 「京兆大報恩寺沙門義空伝」『大日本仏教全書本朝高僧伝』(仏書刊行会、1989年復刻版)

# 「怪異・怪談とコミュニティ」

園田学園女子大学 教授 大江 篤

# I.怪異・怪談は〈民俗文化〉

## 「私の家は日本一小さい家だ」 (柳田國男『故郷七十年』) …幼少時の体験…

長兄は二十歳で近村から嫁をもらった。しかし私の家は二夫婦は住めない小さい家だったし、母がきつい人だったから、まして同じ家に二夫婦住んでうまくゆくわけがない。「天に二日なし」の語があるように、当時の嫁姑の争いは姑の勝ちだ。僅か一年ばかりの生活で、兄嫁は実家へ逃げて帰ってしまった。…私は、こうした兄の悲劇を思うとき、「私の家は日本一小さい家だ」ということを、しばしば人に説いてみようとするが、じつは、この小ささ、という運命から、私の民俗学への志も源を發したといつてよいのである。

## ガタロ (河童) (『故郷七十年』)

辻川あたりでは河童はガタロというが、随分いたずらをするものであった。子供のころに、市川で泳いでいるとお尻をぬかれるという話がよくあった。それが河童の特徴なわけで、私らの子供仲間でもその犠牲になったものが多かった。毎夏一人ぐらいは、尻を抜かれて水死した話を耳にしたものである。市川の川つぶちに駒ヶ岩というのがある。今は小さくなって頭だけしか見えていないが、昔はずいぶん大きかった。高さ一丈もあったであろう。それから石の根方が水面から下へまた一丈ぐらいあって、蒼々とした淵になっていた。そこで子供がよく死ぬのである。私ももう少しで死にかかった経験がある。

## 『遠野物語』川童 (カッパ)

五八

小鳥瀬川(こがらせがわ)の姥子淵(おばこふち)の辺に、新屋(しんや)の家(うち)という家(いえ)あり。ある日淵(ふち)へ馬を冷(ひや)しに行き、馬曳(うまひき)の子は外(ほか)へ遊びに行きし間に、川童出でてその馬を引き込まんとし、かえりて馬に引きずられて厩(うまや)の前に来たり、馬槽(うまふね)に覆(おおわ)れてありき。家のもの馬槽の伏せてあるを怪しみて少しあけて見れば川童の手出でたり。村中のもの集まりて殺さんが宥(ゆる)さんかと評議せしが、結局今(こんご)は村中の馬に悪戯(いたずら)をせぬという堅き約束をさせてこれを放したり。その川童今は村を去りて相沢(あいざわ)の滝の淵に住めりという。  
○この話などは類型全国に充滿せり。いやしくも川童のおるといふ国には必ずこの話あり。何の故にか。

五九

外(ほか)の地にては川童の顔は青しというようなれど、遠野の川童は面(つら)の色(いろ)藤(あか)きなり。佐々木氏の曾祖母(そうそぼ)、禊(おさな)かりしころ友だちと庭にて遊びてありしに、三本ばかりある胡桃(くるみ)の木の間より、真赤(まっか)なる顔したる男の子の顔見えたり。これは川童なりしとなり。今もその胡桃大木にてあり。この家の屋敷のめぐりはすべて胡桃の樹なり。

## かっぱ淵



## 常堅寺 かつば狛犬



7

## 遠野遺産

### 『遠野物語』刊行100年を迎えての新たな取り組み

遠野のたからものを、市民と行政とが協力して保護・活用し、次世代の子供たちに伝えていく仕組み

- ① かたちのあるもの（有形遺産）  
…古民家、シンボルになっている建造物、いわれのある場所、歴史  
的な出来事があった場所、記念碑など
- ② かたちのないもの（無形遺産）  
…古くから伝わる風習、民俗芸能、伝承、伝統技術、食文化など
- ③ 自然のもの（自然遺産）  
…地域のシンボルになっている木や滝、洞窟などの珍しい地形、自然現象など
- ④ 組み合わせさせたもの（複合遺産）

8

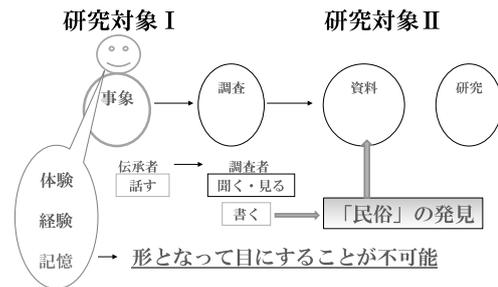
## 宮本常一の気付き

『遠野物語』を読みまして私自身がいちばんびっくりしたことは、じつはそこに出てくる話は、内容は違いますけれども、われわれ子供のようにしょっちゅう聞いておった話なんです。それが書かれている。しかもそれがわれわれからしますと、ひじょうに簡潔な美文なんです。われわれは、そういう話はごくありふれた話なので、つまらないものと思っておった。それがそうではなかった。そして、こういうふうに表示すればそういうものになるのかという、そういう驚きの一つあったんですね。…そうしてこういうものが学問の素材になるのかということ、ひじょうに強く考えさせられたんですね。…これならばおれのところにもあるぞ—

伊藤幹治・米山俊直編『柳田國男の世界』

9

## 日本民俗学の研究構造



10

## II.地域文化と文化財

11

## 文化財の価値

文化財の学術的・芸術的価値の発見

- より古層を示すものを探求
- より傑出したものを探求
- より稀なものを探求
- 類型における代表事例を保全

1万数千件で、日本を表現できるか？歴史文化を身近に感じる生活を得るには

古いモノ 優れたモノ 珍しいモノ

12

## 「文化財」の活用

- ◆「文化財」の文化資源化  
公開→観光資源化
- ◆地域の外部からの付加価値
  - ・文化財指定
  - ・〇〇100選
  - ・世界文化遺産

→みんな（国民や観光客）の「文化財」

37

## Ⅲ.コミュニケーション・ツールとしての怪異・怪談

14

## 怪異・怪談とコミュニティ

東雅夫「怪談愛好のススメ」（『SQUARE』Vol.161、2011）

### 怪異・怪談

…子供たちに社会の一員としてイロハを教える、社会勉強のための身近なツールとして機能

【夏の夕涼み時、町内の古老が子供たちを集め、話して聞かせる怪談話の教々】

○町外れの山中にある古塚にまつわる怪談は、地域の知られざる歴史を教える  
○近くの川辺に河童が出没する話は、うっかり立ち入ってはいけない危険な場所の存在を示す

○猫の怨念に祟られた話は、動物虐待や弱いものいじめを戒める

○旅の僧侶を殺した物盗りがおぞましい死に方をした話は、因果応報の厳粛さと、人として犯してはならない所業があることを教える

※少子高齢化が進み、地域の連帯が喪われつつある現代

怪異・怪談というコミュニケーション・ツールを活用して、世代間の絆を回復させてゆく必要があるのではないか？

ひいてはそれが、地域社会を活性化させ、さらには地域と地域を結びつけて活性化させることに繋がるのではないかな？

エンターテインメントからコミュニケーション・ツールへ

15

## 世間話と昔話

谷川健一と宮本常一の対談（『フオークロア』第2号、1997）

【宮本】昔話じゃないか昔話じゃないかと追っている、さきほどもふれた大事な問題が落ちてしまうのではないかと、ということですが…。ところが、『今昔』や『宇治拾遺』や『古今著聞集』などを見ても、あの時代には、世間話として語られていたんだと思いますよ。文字にされれば当然、人名も地名もはつきり入る。しかし、話される場合は、自分に縁もゆかりもない地名やむずかしい名前はまず落ちるでしょう。そうして落ちたものが目から口へ伝えられて、ああいう形ができてきたのではないのでしょうか。文字化されたものとそうでないものの違いですね。今まで伝説として取り上げられてきたものを、子供の話として扱ったらどうだろうか。今、私は多くの人びとに年寄のライフストーリーを採るようになっているのですが、これをやると必ず、自分の体験として《不思議》というのが出てくるのですよ。この不思議に支えられたものが、ずいぶん多いのですよ。論理に合わないことに出会っているのです。大体七十歳位以上のお年寄は、これらは、昔は、世間話として捉えられていたのですが、今はそうではないですね。昔話が今は固定化せられて、あるタイプが問題にされるのですが、それをそのようなものとして温存させたもう一つ外側の枠のほうは、実はもっと大切じゃないかと思えます。典型的な話を集めた昔話集も大切なのです。そしてそれがずいぶんたくさん出ています。しかし話の語られた状況や環境について書かれたものは少ないのです。

16

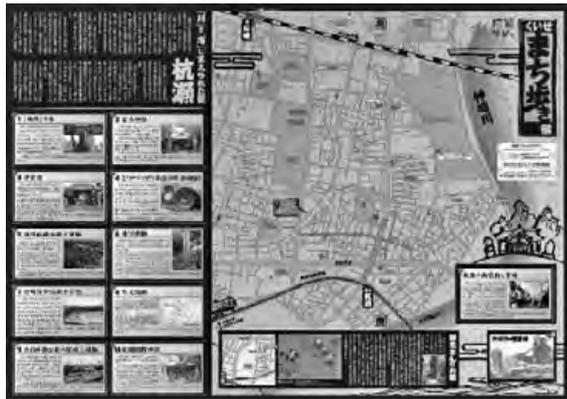
## 怪談専門誌『幽』



17

## 地域資源を守り・活かす 尼崎市杭瀬での取り組み





19

## 「残念さん」



20



『南部再生』 vol.47

〈記憶〉を〈記録〉に！

〈記憶〉は〈記録〉しないと消滅する

〈記録〉することにより、〈記憶〉される

→「あたりまえ」の暮らしをいかに地域資源として伝承していくことができるのか？

22

## 「民俗文化」はあたりまえの生活

- ※「あたりまえ」が伝承されない現代社会
- ※幸せな暮らしの原風景を伝承してきた原感覚（楽しさ、怖れ、味、匂い、色彩等）が重要
- ※地域の方々（生活者）にとっての民俗文化（財）

「活用」にむけての模索が必要

23

宮本常一

「生活の伝統」（1978年5月、青森県での講演）

普通伝統と申しますと、古いことになじんで、そうして古いことを大事にしていくのが伝統だとお考えになっておられる方が多いのではないかと思います。伝統というのはそういうものではなく、自分の生活をどのように守り、それを発展させていくか、いったか、その人間的なエネルギーを指しているものであるだろうと思うのです。

（『炉辺夜話』、河出書房新社）

24

# 尼崎伝説データベース (稿)

タイトル	伝承地	関連人物	寺社、墓碑	タブー	概要	文献
1 義経・弁慶の隠れ家	大物町	源義経、弁慶	大物主神社		嵐が吹くまで義経一行が滞在している間、弁慶が大豆12石を借りた。	撰群、上方、尼伝、TOM
2 菅弦町の由来	大物町一丁目 (旧小字名「菅弦町」)	義経、静			大物滞在中、義経のつれづれを慰めようと静御前が音楽を催した。	撰群
3 静 化粧の井	東本町一丁目 (旧小字名「静の井」)	静			静御前が化粧に使った水。静餅屋の前、国道43号線のため破壊。	
4 静なごりの橋	東本町	義経、静	辰巳八幡神社		義経と静が名残を惜しんだ橋。昭和3年の碑が移建。	撰群、尼志、上方、尼伝、TOM
5 飢餓ヶ浦		義経、弁慶			大物滞在中、弁慶が米を借り飢餓をしのいだ。	撰群
6 鐵籠洲	辰巳の浜	義経一行			義経一行が大物から船出すると辰巳の州で嵐となったが、供の者が鼎を置いて神に祈った。	
7 宮内氏	尼崎	義経一行、宮内氏			義経は船人のいたわりに感じて「宮内」の名を与え、大豆5俵、鎌刀を与えた。	撰群、筆拍子
8 船弁慶 (謡曲)	大物の浦	義経一行、知盛壺			義経一行が大物の浦から船出すると知盛ら平家一門の壺が現れたが、弁慶が祈り退けた。	船弁慶、義経記、尼伝、尼文、TOM
9 大物崩れ	大物町	細川晴元、細川高国、三好元長	広徳寺		享祿四年、敗走した高国は大物あたりで大瓶に隠れた。晴元は子どもに瓜を与えて探させた。	細川記、尼志1・2、上方59、市史1、阪史、新阪神尼伝、しるべ29、尼文、TOM
10 島村蟹	大物の浦 (野里川)	島村貴則			高国勢の武士、島村貴則は敵兵二人を両脇に手挟み身を投げた。人面の蟹は島村の生まれ変わり。	三才、尼志1、尼今昔、尼伝、しるべ29、TOM
11 沖の火	大物の浦	泰武文	善通寺・武文の墓		尊良親王に仕えた泰武文がの亡魂が火の玉として浮き出る。	撰群、撰名、川千、尼志、尼今昔、尼伝、TOM
12 武文蟹	大物の浦	泰武文			尼崎から兵庫の浦にかけてとれる甲羅が人の顔をした蟹は、武文の壺が化した。	三才、尼志1、尼今昔、尼伝、TOM
13 歌枕浦の初島	大物の浦南部		初島稲荷神社		大物の裏の南は大小の洲が点在し、歌枕「浦の初島」として知られる。	撰群、撰名、川辺、川千、尼志2、上方59、尼伝、しるべ22、尼文
14 芦刈島	松島あるいは初島				「芦刈」。貧しい夫婦の妻が官仕えし、貴族と結婚。物語での途中で故郷を通り、芦を刈る夫に気づき涙する。	大和、宝物、撰群、撰名、筆拍子、尼今昔、尼神社、昔今、尼伝、尼文、TOM
15 海水が真水になる話	初嶋大神宮		初嶋大神宮		初嶋大神宮を信仰していた人が念仏を唱えて潮を汲めば真水になった。	撰名、尼志2
16 初嶋大神宮の雷	初嶋大神宮				境内に雷 (雷獣) が落ちた。ある人が捕らえてその上に石を置いた。氏子の家には雷が落ちない。	尼志、ひょうご327
17 辰巳の仇討ち	辰巳の渡	高畑寿教、妻植女、佐和新九郎	辰巳八幡神社「仇討址」		伊予藤堂家の小姓頭、高畑寿教が佐和新九郎に殺され、妻植女は尼崎辰巳の渡で仇を討った。	奇観、尼志2、上方59、尼伝、TOM
18 辰巳八幡神社の雷	東本町一丁目		辰巳八幡神社		井戸に雷が落ち、とじこめられた。頼んで出してもらったので雷が落ちなくなった。	三浦邦雄氏
19 妖怪の棲む樹	別府町ミツカン酢の倉庫			走って通りぬける	松島町へ抜ける川沿いの道に、ミツカン酢の倉庫があった。その大きな樹に妖怪がいるという。	三浦邦雄氏
20 醤油蔵の狸囃子	大物町	醤油醸造元大塚萬次郎			醤油倉から、空樽を狸がたく音がする。	細川 (小林) キヌ氏
21 難波の葦	尼崎周辺の島 (一説に東難波八幡神社)				尼崎、あるいは大阪西成郡の島に生えていた葦は片葉の葦。	撰群、尼志2
22 大物川の淀	東本町、大物川の堤				法事の掃り東大手橋へ向かって歩いていたが、いつまでも着かず、ご馳走の折がなくなっていた。	難波あや子
23 正光寺の砂かけ狸	東町北浜2丁目 (正光寺は東大物町に移転)			切り倒した職人が獲込んだ	正光寺に枯れた大楠があり、砂が降ってきた。国道工事で楠を切ると狸が死んでいった。	
24 大物橋のみいさん	大物町		宮本氏自宅の庭、祠		大物橋の北東部の浜地のざくろの木の下に白い蛇がおり、歯痛を治してくれる。	
25 円平寺	大物町三丁目	円平寺の百姓	円平寺		百姓が勲で観音像を振り当て、浄土宗寿仙が創建。	撰群、尼志1
26 若宮さん (大物主神社) の由来	大物主神社 (大物町2丁目)	平清盛	大物主神社		平清盛が大物浦で嵐にあり、巖島明神に祈って風雨を鎮めた。巖島明神を勧請して若宮弁財天社としたが、明治七年に大物主神社と改めた。	京童、撰群、撰名、尼志2、尼事典
27 皿屋敷 (お米虫)		悪い家老 (木田玄蕃)、お米	(深正院)		尼崎藩の悪い家老が侍女お米に懸想し、殿様の皿を割ったと言って責め殺し、井戸に沈めた。	現勢、尼志1、上方59、尼今昔、尼伝、TOM
28 山崎宗鑑隠棲の地	大物町	山崎宗鑑	(山崎宗鑑居住之所碑)		山崎宗鑑が出家後、大物付近で数年を過ごした。碑は太平洋戦争後、不明。	尼志2、上方59、しるべ5、TOM、尼伝、尼事
29 秀吉と栖賢寺	大物	豊臣秀吉	栖賢寺 (京都に移転)		秀吉が髪を切り、信長の帯い合戦をする決意を固めた。	川角、尼文、尼事
30 秀吉と味噌すり坊主	広徳寺	豊臣秀吉	広徳寺		明智の伏兵に追われた秀吉が味噌をすり坊主にまぎれて難を逃れた。	絵太間、尼志1、上方59、尼今昔、市史2、尼文、尼伝、尼事、尼歩、TOM
31 絵本太功記十段目	尼崎	真柴久吉、武智光秀、母さつき			浄瑠璃。真柴久吉を追ってきた光秀が物音のする一間に竹槍を刺すと光秀の母。	浄瑠璃「太功記」、尼伝、TOM
32 砂かけばばあ	築地町				築地町の西端の戎橋のたもと石屋を通ると、石のかげから砂かけばばあが砂をかける	ひょうご321 尼子
33 庄下橋	庄下橋				庄の下にある。一説に、聖徳太子が中山寺を建立したとき橋の下に妖怪が降化した。	撰群
34 油かえしの火の玉	八軒町庄下川				庄下川に火の玉が出る。前世に中山寺の油を盗んだ咎を返しに行く。	尼今昔
35 茶巾屋の狸	戎橋付近				「尼の名物一丁目の茶巾」といってはやされた餅屋・茶巾屋に狸がいて、人をよく化かした。	上方59
36 お化け屋敷	開明町	生田伝八郎、遠城治左衛門、安藤喜八郎			「崇禎寺馬場の返り討ち」で生田伝八郎に加勢した尼崎藩士の屋敷に怪しいことがおこり、「化物屋敷」と呼ばれるようになった。	しるべ2
37 本興寺の開基	本興寺 (開明町3丁目)	日隆上人、細川満元 (あるいはその子持之)	本興寺		尼崎領主細川満元 (あるいは持之) の子が占い師が女の子としたのを、日隆上人の法力で男の子としてもらうように頼み、実現。帰依して寺院を建立。	三才、尼志1、新阪神、尼伝説、TOM
38 大覚寺の縁起	大覚寺 (旧大覚寺町、現在寺町9)	日羅上人	大覚寺		聖徳太子の命により霊地を探していた日羅上人が、光を放つ高山を求めて能勢に行くも木の木が光を放ち、妙香を放っていた。不動の真言を唱えると不動の剣が振ってきたので剣尾山と名づけ、木の木で千手観音を彫り本尊として「月峰寺」を創建した。長洲の浦の人々は月峰寺を拝むために浜に燈塔を建てた。これが大覚寺の始まりとなった。	大覚寺縁起 (尼志1、市史4・10)、撰群説、三才、尼伝説、尼事典、TOM

39	十王堂（返す堂）の由来	大覚寺（寺町9）		十王堂（現存せず）		海賊が盲僧を殺し、奪った金で養えるが生まれた子は目が見えない（一説には「殺されたのはこんな晩」と告げる）。浜で横笛を吹いている時に海に落ち、行方不明になり、両親は諸国巡礼に行く。出羽の湯殿山でわが子と出会うが、盲人に妨害され、恨み言を言われる。親は行いを反省し、大覚寺に十王堂（反省したので「返す堂」とも）を建立した。	撰群談、現勢史、尼志1、尼伝説、TOM	
40	大納言行忠と源義則の歌	大覚寺（寺町9）	大納言行忠、源義則	大覚寺		大納言行忠が詠んだ歌が大覚寺の寺記にある。源義則も西国に行く途上、大覚寺に滞在して歌を詠んだ。	撰群談、市史4に「行忠源義則差三通」あり	
41	佐々成政	法園寺（寺町5）	佐々成政	法園寺、墓碑、時世歌碑		佐々成政は秀吉を尼崎の法園寺に幽閉し、切腹させた。	川角、尼志1、尼今昔、市史2、新阪神、しるべ23、尼伝説、尼事典、TOM	
42	三合橋と五合橋	五合橋（中在家村-東向島東・西町、五合橋線）、三合橋（西本町6丁目、現存せず）				尼崎藩主が橋をかける際に、人夫一人に一日3合の米を支給したので三合橋、五合の米を支給したので五合橋と名づけられた。	現勢史 尼伝説、TOM	
43	愛敬三社の由来	貴布祢神社（西本町6丁目）		貴布祢神社境内 愛敬三社	社を建立し、祭る	尼崎城主（あるいはその側近）が墓の際に殺した山伏の霊、あるいは武士が殺した伊勢御師の霊を鎮めるために祭った。	現勢史、尼志2、尼伝説、TOM	
44	浜恵比須神社の御神体	元浜恵比須神社（旧町名中在家、現西本町2丁目）		恵比須神社（現在は貴布祢神社に合祀、手水石のみ残る）	石に軽くなれ、重くなれと折るとそうなる、社をつくり折る	中在家の浜で網にかかった戎の形をした石はとても重かったが、老人が祭ると約束すると軽くなった。以後も祈りによって軽重が変化した。戎様が霊験を示したのたとして神社が建立された。	尼志2	
45	戎神社	戎神社（別所村、東山町一西本町4丁目と改称、現在は神田中通3丁目に遷座）		戎神社	狛犬の顔が紅くなると大漁の予兆	木彫りの狛犬の顔が紅くなると大漁とされていたので、娘が紅を塗ると狂い死にし、家も没落、その後紅になることはなくなった。社殿が縮小したから、あるいは神職の髪が縮れていたからなどの理由で「ちちみさん」と呼ばれる。	尼志2	
46	蓬川の堤	蓬川の堤				堤を通る魚屋を女に化けた狐がいたずらをするので、ある人が隔物石をもっていき現れた狐の急所に突き入れて掃った。以後狐はでなくなったが「石〇〇」とつぶやく声が聞こえたという。	上方59	
47	難波の梅	難波（東・西難波町）	仁徳天皇			（難波熊野神社（西難波町5丁目）に「なにはの梅」碑、難波八幡神社（東難波町3丁目）に「亀文公句碑」、加島家（西難波町5丁目）に「なにはの梅」碑）	塩尻、撰群談、撰名所、筆拍子、尼志2、上方59、市史10、ニュース8-9、昔と今、尼伝説、尼散歩、TOM、（『慶長十年撰津国絵図』には梅の絵）	
48	地名「梅の木」の由来	東難波村	（仁徳天皇）		9月17日に例祭	難波高津宮から梅が戻された場所を「梅の木」、その隣を「神楽田」として宮を祭る、9月17日を例祭の日としていた。梅にゆかりのある姓が村に七氏ある。	上方59	
49	地名「梅の本」の由来	西難波村	武蔵坊弁慶			武蔵坊弁慶がこの地の梅に「一枝を切れば、一指を切る」という制札を立てたので地名を「梅の本」という。	上方59	
50	鶯宿水	東難波村・西難波村				難波の梅の傍らに井戸があった。仁徳天皇の時代、梅の花が散って井戸に浮かぶと妙香と軽い味の水となり、枯れることがなかった。落花の頃は鶯が井戸の側を去らないので「鶯宿水」、また「梅の水」とも呼ばれた。	筆拍子	
51	梶ヶ島住吉神社の御神体	梶ヶ島住吉神社（梶ヶ島15-2）	神功皇后	梶ヶ島住吉神社		神功皇后の朝鮮出兵の際、村長に授けた船の楫を彫って作った神像が梶ヶ島住吉神社の御神体である。第二次大戦の戦災で焼失した。	神崎川	
52	子安池	杭瀬熊野神社（杭瀬本町1丁目）		杭瀬熊野神社		杭瀬熊野神社の境内で池を掘ったところ、石の地蔵が出てきたので池のほとりに祭った。妊婦がこの池の水を飲むと安産。	小田し、小田村勢、尼伝説、尼散歩、TOM	
53	白と黒の鮎	杭瀬				村人が家の前でカンテキを出して鮎を煮付けていたところを僧に論され、川に逃がした。杭瀬あたりの片方が白く、片方が黒い鮎はその鮎の生まれ変わり。	神崎川	
54	残念さん	尼崎東墓地（明徳寺子院墓地、杭瀬南新町4丁目）	山本文之助鑑光	尼崎東墓地（明徳寺子院墓地）	願をかける	蛤御門の変から敗走した山本文之助鑑光は尼崎藩で捕らえられ、便所で「残念」といって自決した。文之助の墓に参ると残念なことを引き受けてくれるので願いが叶うとされ、「残念さん」として信仰を集めた。	小田村勢、上方59、市史2、地域史4、昔と今、尼伝説、新阪神、尼事典、尼散歩、TOM	
55	寺江亭	杭瀬寺島のあたり	五条大納言藤原邦綱	史跡 寺江亭址伝説地の碑・「聖址不滅」碑（神崎川堤防上）		平清盛の側近、五条大納言邦綱は神崎河原に別荘として寺江亭（寺江山荘）を持っており、天皇・上皇・貴族が福原・西国に向かう際に立ち寄った。	玉葉、勲節記、小田し、小田村勢、尼今昔、市史1・4、しるべ2・9、尼伝説、尼事典、尼散歩、TOM	
56	石のたたり	今福	（藤原邦綱）			石を持って帰るとたたりがある	今福の神崎川と左門殿川が分流するあたりの川底にこぶし石が多く敷き詰められてあり、移したり家に持って帰るとたたりがある。寺江亭の遺跡とも言われる。	神崎川
57	今福興法寺	今福	（法然、織田信長）	今福興法寺		今福村の興法寺は法然上人の開基。石山合戦の際、信長の焼き討ちに遭い、住職は石蓮寺村（現豊中市若竹村）に逃れて寺を再興した。今福の旧家は今でも興法寺の檀家で、寺の門前だった家は「寺前」という屋号を伝えている。	小田村勢、しるべ2、興法寺住職談話	
58	今福の大工	今福				神崎川に接した今福には船大工が多く、江戸時代の中ごろには宮大工になるものも出た。京都御所・四天王寺の工事も携わった。船大工の道具を家宝にしている家もあるという。	しるべ、小田村勢、興法寺住職談話	
59	万丈堤防（バンジョ堤）	常光寺・今福・梶ヶ島・杭瀬・長洲	戸田氏鉄			神崎川の洪水を防ぐため、藩主戸田氏鉄の指導で「万丈堤防」、俗に「バンジョ堤」を築いた。	しるべ、小田村勢、市史2、神崎川、尼事典	



82	矢文石	久々知須佐男神社 (久々知一丁目)	源満仲	矢文石	須佐男神社の拝殿前にある大石に、源満仲がふんばって多田城へ矢文を射た。	小田村勢、尼伝説	
83	春日さんの神鹿	伊居神社(下坂部四丁目)			奈良春日大社から神鹿が下坂部春日社へ使いくる途中殺された。下坂部の村人が哀れに思い参道の第二灯籠下に埋葬した。のち骨片が出土した。	老翁	
84	潮江の由来	潮江	源融		源融が塩竈を模した庭園を作ったとき、潮を汲んだことから「潮江」の地名がついた。	撰群談	
85	力持ちの石	下坂部	澤田猪平		澤田猪平は、村の青年のすすめによって、村の力持ちの石を家に持ち帰り、風呂場の段石にした。	老翁	
86	常願寺の縁起	常願寺	真雅僧正		真雅僧正が諸国行脚で下坂部に立ち寄ったとき、夢に吉祥天女が現れ、僧正はそこに安住山常願寺を建立した。	小田村勢、老翁、尼伝説	
87	三本松	下坂部小学校	供の御前		明治17、8年ごろまで供の御前の墓と呼ばれた三本松があったが、いまは小学校敷地で松はない。	小田し、神崎川	
88	落名の篠原	神崎と伊丹の間			篠を折ると狂気になる 神崎と伊丹の間に「落名野篠原」があり、水が湧いていた。通る人が篠を折るとたちまち狂気になる。	筆拍子、奇観	
89	左門殿川と左門殿橋	左門殿川、左門殿橋 杭瀬・寺島	戸田左門氏鉄		元和三年、尾崎城主となった戸田左門氏鉄が開削した川を左門殿川、橋を左門殿橋という。大阪では左門橋と呼ぶ。	尼志三、市史、阪史話	
90	錦楽寺の由来	吉備彦神社	吉備真備		吉備真備に野馬台詩の読み方を教えたクモは穴に入って行方がわからなくなった。真備はその土を籠の袋に入れて帰朝し、その土をおいた上に籠の袋にちなんで錦楽寺を建てた。寺がなくなったあと一品神社が祀られた。参詣すると田舎が上達する。社殿下には唐土を埋めた空井戸がある。村には雷が落ちない。	撰群談、尼志2、しるべ5	
91	治田寺の開基	治田寺(戸之内町2丁目4)	行基	治田寺	童子が木を「尊像である」と指したのを聞いた行基の報告により、天皇が寺院造営の宣下を行った。行基は薬師如来像を彫り、寺院を作り、東西の川(猪名川・藻川)に橋を架けた。	治田寺縁起(兵庫県史料編中世4)	
92	頼朝・二位尼・実朝の遺骨	治田寺(戸之内町2丁目4)	二位尼(北条政子)・源実朝	治田寺	北条政子が政務をとっていた時、北庄園は源実朝の領地であった。治田寺旧記が上聞に達し、田地を寄付され、伽藍を建てて聖林寺と呼ばれた。その後、頼朝・政子・実朝の遺骨が將軍九条頼経より贈られ、治田寺本尊の手の上の瑠璃蓋に収められている。	治田寺縁起(兵庫県史料編中世4)	
93	治田寺の本尊	治田寺(戸之内町2丁目4)	行基僧正・鎌倉二位 禪尼(北条政子)	医王山治田寺	本尊の薬師仏は鎌倉二位禪尼が安置したのもとも、行基が治田寺を建立する際に池の中から得たものともいう。	撰群談	
94	桜橋古城	治田寺(戸之内町2丁目4)	池田勝入(恒興)	治田寺・桜橋古城	治田寺境内に桜橋古城の旧跡がある。池田勝入(恒興)の古城であった。	撰群談	
95	桜橋城	戸ノ内		桜橋城	桜橋城は旧小字「殿ノ内」にあったという説があり、それが転じて「戸ノ内」になったとも。細川氏の抗争の際に廃したといわれている。	地域史6、松田佑氏	
96	桜橋の名の由来	桜橋			林と堤に生えている木が高くそびえ、太陽をさえぎり橋の上も暗くなったので暗橋=桜橋と呼ばれた。	治田寺縁起(兵庫県史料編中世4)	
97	魚の橋	戸ノ内	行基		行基が桜橋を訪ねて来た際、洪水で橋が落ちていた。鯉が水面に並び、行基はそれを渡った。人々はそれを「魚の橋」と呼び、河の上下十八町の人たちは殺生禁断を定めた。	治田寺縁起(兵庫県史料編中世4)	
98	鯉を捕えない・食べない1	戸ノ内・庄本桜橋神社(豊中市庄本町1丁目)	行基	桜橋神社	鯉を捕らず、食べない	行基が戸ノ内と庄中の間の(旧)猪名川に橋を架けようとしたが大水で工事が困難であった。その時、鯉が集まって堰を作り水流を防いだので、橋を架けることができた。それ以来戸ノ内・庄本では鯉を捕らず、食べない。江戸時代にはこの橋は廃されて渡しになり、今も庄本側に渡しの灯籠が残っています。戸ノ内の対岸にある庄本の桜橋神社には、鯉伝説の説明板と鯉池が残る。	桜橋神社伝承
99	鯉を捕えない・食べない2	戸ノ内素戔鳴神社(戸ノ内町2丁目6)	行基	戸ノ内素戔鳴神社	鯉を捕らず、食べない	行基が桜橋荘に来られ、猪名川に橋を架けようとしたが、流れが激しくて工事ができなかった。行基は素戔鳴神社に参籠して工事ができるよう祈願した。すると鯉が集まり魚橋をつくり工事を助け、橋が完成した。行基は氏神が神魚を遣わしたのだとして、桜橋荘の住民に鯉の漁をしたり食べたりすることを禁じた。	戸ノ内素戔鳴神社縁起『みちしるべ』33巻38頁71番参照
100	戸ノ内素戔鳴神社の縁起	戸ノ内素戔鳴神社(戸ノ内町2丁目6)	素戔鳴尊・伊香我色 乎命	戸ノ内素戔鳴神社	祭祀	神代に素戔鳴尊が神魚に乗って神崎の水門を経て桜橋荘に来た。桜橋部連の祖・伊香我色乎命が祭って氏神とした。	戸ノ内素戔鳴神社縁起
101	小中島の雷	小中島素戔鳴神社(小中島1丁目16)			雷が落ちない	素戔鳴神社の井戸に雷が落ち、氏神が怒ってふたをして閉じ込めた。雷は今後小中島には落ちないと約束して出してもらった。以後雷は小中島には落ちなくなった。小中島素戔鳴神社は昭和46年、山陽新幹線敷設に伴い社地を移転し、その際井戸もなくなった。	園田 尼伝説
102	おぼただの宮	上坂部・七松	孝徳天皇	小墾田神社	祭り	上坂部の村では、孝徳天皇が都を飛鳥から難波長柄豊碕宮に遷される際に仮宮の「おぼただの宮」(江戸時代から小墾田宮とされる、歌枕)を営んだと伝え、小墾田神社を祭り毎年10月2日に祭りに行っている。『撰群談』には七松村にも同様の言い伝えがあるとす。明治の初期には板田小学校・小墾田小学校があった。	撰群談・丸網目・小田村勢・しるべ4
103	板田の橋	上坂部・七松・尼崎 城下・伊佐具神社	二条院讃岐・善信法師・源実連(伝未詳)	伊佐具神社 歌碑		歌枕である「板田の橋」は大和にあったともされるが、『撰群談』では川辺野上坂部村にありとする(『夫木集』は尾張国説、『歌枕名寄』は七松村・尼崎城下との言い伝えがあるとす)。伊佐具神社境内に『玉葉和歌集』にある「板田の橋」の歌碑があるが、その建立の経緯は不明。	撰群談・しるべ4・伊佐具神社略記
104	赤松円心と伊佐具神社	伊佐具神社(上坂部3丁目)	赤松則村(円心)・並川誠所・山口屋伊兵衛(菅廣房)	伊佐具神社		赤松円心が必勝を祈願して伊佐具神社に甲冑・太刀を奉納し、散逸しないように船形の巨石で覆った。境内には赤松円心の墓といわれる石造五輪塔がある。また社号標石は並川誠所が山口屋伊兵衛(菅廣房)から援助を受けて建てたものである。	太平記・伊佐具神社略記・しるべ20・市史1・20・園田/撰群談・撰名所・市史4・伊佐具神社略記・園田/しるべ18・大阪市立博物館紀要32

105	西明寺井の由来	瓦宮・善法寺・額田・高田・神崎・戸ノ内	北条時頼	「不朽西明寺遷記念碑」善法寺白井神社(善法寺町14)	瀧川筋最下流の西明寺井は、最明寺入道北条時頼が西国行脚の途上、この地の農民が用水に困窮しているのをみて、井堰を作らせたことによるとする。また法然上人ゆかりの西明寺(現食満6丁目)がもと神崎にあり、この井の下端が神崎であることから「西明寺井」となったとの説もある。	小田し・小田村勢・しるべ8・11	
106	富田の七ツ石	富田			七ツ石と呼ばれる石があり、1個か2個ずつ四か所に分かれていたが、1個は猪名川の堤切れる時に川に落ちてなくなり、6個が3か所に集まって「妻夫石」「強盗石」などと名付けられた。「強盗石」は金石(宋詳)で、神代に盗人がこれを切り取り「明神強盗」と名乗ったことから名付けられたと伝えられた。この石に座ると盗人になるとされる。	市史6(川辺郡富田村附込指図帳)・ニュース13	
107	富田村の牛の菖蒲	富田		塚	富田村の旧小字門廻りに、長さ四間・市二間ほどの塚があり、5月5日に牛の角に菖蒲の花を飾り、この塚の周りを引きまわしたという。	塚・市史(川辺郡富田村附込指図帳)・伝承者松田佑	
108	武田勝頼の墓	富田	武田勝頼	「武田勝頼之墓」善念寺(東園田1丁目105)	武田勝頼の子・勝親は武田氏滅亡の後、家臣の栗原左衛門尉に護られて醍醐の密教寺院に逃れた。そこで齋藤氏の養子となり、尼崎藩主戸田氏鉄に仕えた後、辞して富田村に住み、寺を創建して善悦と号して103歳で入寂した。孫の知元が寺号を善念寺とつけ、後、代々その子孫が寺を守っている。善念寺は戦災で焼失したが、墓碑が残っている。	墓誌・撰名所・尼事典・しるべ17・尼伝説・園田・尼散歩・TOM	
109	富田の村びと	富田			富田の村人は太古池田から移住してきたという。	伝承者藤田寛治・探訪松田清香	
110	船詰神社	船詰神社(旧所在地富田村神上、現所在地東園田町1丁目359)		船詰神社、船詰神社旧跡・礎石(東園田町2丁目、船詰公園)	船詰神社は旧富田村の鎮守で、土地区画整理で昭和50年に移転するまで小字「神上」にあった。神社には高瀬があり土器が出土することから古墳ではないかともされる。祭神は鳥之尊船船命(記紀では天鳥船)で、猪名川・瀬戸内海水運の守護神としてまつられたとされる。船詰は船溜まりに由来するという説もある。	伝承者船詰神社司宮柳光一	
111	シャリ田	富田村			村人は近寄らなかつた	旧船詰神社のあった富田村字神上の東に「シャリ田」という小字があった。旧猪名川の堤ききで、昔多くの人が漂着し、葬る人もないまま骨になった。田はななく、南北に長い溝形の池があつて村人は近寄らないように言われていた。今は住宅地になっている。	伝承者松田佑
112	だらん所	富田 椎堂			昭和40年から44年の改修工事以前、船詰神社の東側の猪名川に「だらん所」「どらん所」と呼ばれる淵があつた。猪名川が水運に利用されていたころの船着き場であり、商人が綱渡(腰につける四角い巾着)から金銭を出して取引をしたことによる名とされる。	園田・伝承者松田佑	
113	田能村大和守	田能 田能春日神社(田能5丁目7)	田能村大和守	田能村大和守碑(農業公園)	田能村荘の領主田能村大和守が、寛正2年(1461)、隣接する興福寺・春日社領の原田荘(豊中市)との間に久米井(灌漑用水路)の領有権をめぐる水論を起す寺社側の領界杭を抜き取った。興福寺・春日社は幕府に訴えたが、大和守はすでに逃亡しており、田能村荘は欠所として管領の支配下に置かれた。寺社は再び訴えを起し、代官に橋御園荘内の久留地が与えられた。寺社側の村民は大和守の屋敷を焼き、神木を立てて勝利を宣言したという。これが田能の春日神社の発祥である。	阪市話1・市史1・尼事典	
114	天狗さんの涙	南清水			土を持って帰ると雨が降る、悪いことが起こる	南清水にあった天狗塚(大塚山古墳)は土を持ち去ると大粒の雨が降り、「天狗さんが泣いてはる」といい祟りを恐れて家に帰ったという。土を家に持って帰ると悪いことが起きるとい、その家の塙が倒れ、病人が出るという。天狗塚は前方後円の中期古墳であったが、現在は全く失われて小祠を残すのみである。	市史1・10・園田・尼伝説・尼事典・TOM
115	安養寺の縁起	安養寺(東園田町5-125)	織田信長、准如上人		旧小字法界寺には行基の開いた天台宗普光山法界教寺があつたが、石山合戦のとき織田信長に焼かれた。その後、准如上人が安養寺を再建した。	安養寺縁起(同寺に掲示)	
116	猪名寺鹿寺	猪名寺、法園寺(猪名寺1-31)	法道仙人、荒木村重	猪名寺鹿寺心礎、鹿寺址碑(猪名寺1-41)	猪名寺は、大化年間に法道仙人が開き、行基が薬師仏を刻んで安置したという伽藍を備えていた。荒木村重の乱で焼失した。(現在は法園寺と鹿寺址公園)	撰群談、市史1、尼辞典、尼散歩	
117	三平伝説	御園	三平	三平供養塔、三平井組由来碑、三平記念碑	ある年(一説に天正三年)五月の干ばつとき、庄屋の息子(一説に浪人)三平は、禁を犯して堤防を破り、水路に水を引いた。三平は責任を取って自害し、水路は義孝をしのいで「三平井」と呼ばれるようになった。	市史2、六圃、昔と今、地域史2酒井1、尼伝説、尼事典、尼散歩、園田、TOM	
118	一本松のお地藏さん	園田食満1-1			歯が痛いとき、一本松のお地藏さんをお願いすれば治る。	山下忠治氏	
119	雷神さんと鯉	白井神社(東園田町4-53-1)	手力男命	道標	江戸時代には「雷神さん」と呼ばれ、灰谷靈験があるとされた。祭神は手力男神。鯉は手力男神の死者で、鯉をとらえたり食べたりすると歯痛になり、鯉を食べると折ると歯痛が治るといふ。	撰津志、撰名所、市史10、しるべ別冊「道標」・「神社」・「絵馬」、尼伝説、尼散歩、尼事典	
120	食満の地名の由来	食満			食満の地名の由来は、①牧草が多く牛が満腹していた。②土地が豊かで食が満つる。③仁徳天皇の時代、七色の野菜を献納していたことから食満の名をつけてもらった。の3説がある。	山下忠治氏(③は宇保登氏からの聞き書き)	
121	ダイジョーゴさん	上食満大將軍公園			境内に手を加えるとき雷を落とす	明治45年に稲荷社に合祀されるまで大將軍社があり、ダイジョーゴさんと呼んでいた。雷が祭っていたともいい、慶大にてをくわたりすると雷を落とす祟り神として恐れ、近寄らなかつた。祭らなくなつてから雷が落ちるようになったともいふ。	市史10、ニュース18・しるべ9・10・34田中敦、尼伝説
122	天神さんの屋敷あと	中食満(食満7-6)		天満宮址碑	「天神さんの屋敷あと」といわれる小高いところに梅の古木があり、天まで届いているといわれる。牛をつないだり、不浄なことをすると祟りがある。屋敷は菅原道真ではなく、天つ神を祀っていた。	市史10、しるべ13・19・34田中敦、ニュース12田中、しるべ別冊「尼崎の伝説」、尼伝説	
123	ギョーギさんは逃がす	中食満、富田、戸ノ内			ギョーギさんというフナは食べない	下食満にいるギョーギさんというフナは、ふつうのフナより細長くて白っぽく、内臓部分が青紫色に透けて見える。このフナは水死者の生まれ変わりだといひ、誰も取らず食べないで逃がす。	市史10、松田佑氏(昭和2年生)
124	西明寺	西明寺(食満6-12)		西名寺山門前標石	文治年間、法然上人が開いた。法然が流されるとき船中で本尊の阿弥陀仏を刻んだ。	撰群談、市史10、山下忠治氏	
125	橋御園と難波江館	橋御園			平安時代から鎌倉時代にかけて、立花御そのという撰園家荘園があり、特産品としてかんきつ類をしば倍していた。鎌倉時代、橋御園の海近くに「難波江館」という鷹司家の別荘があつた。	勘仲記、市史1・4、しるべ9生沢英太郎、尼事典	

126	名月姫	尾浜	刑部国春、名月姫、能勢家包、松王丸、平清盛	伝名月姫の墓宝篋印塔、尾浜八幡神社		尾浜の豪族、刑部国春の娘名月姫は14歳のとき能勢家包にさらわれて妻になる(家包に嫁したともいう)。父国春は悲しみのあまり出家し諸国行脚していたが、平清盛による大輪田泊改修のための人柱にされることになる。家包夫妻は父国春の助命を嘆願し、その姿を見た清盛の健児・松王丸が人柱にたつたので国春は救われた。	幸若舞「築島」、撰群談、撰名所、尼今昔、立花志、昔と今、尼文学、尼伝説、尼散歩、TOM
127	国春の山荘の古跡	三反田浜	三松刑部左衛門尉国春			三反田字浜に、神崎の住人三松刑部左衛門尉国春の山荘のあとと伝えられる場所があった。国春居宅は神崎と三反田浜の両方にあったともいう。	撰群談、三才、立花志
128	恋やヶ淵	七松(東七松歩道橋)	名月姫			現在の市立昭和中学校の南西あたりは昔、七松村の水路の合流点で、「恋やヶ淵」(ノヤグチともなまった)と呼ばれ、名月姫が投身自殺したところという。	ニュース2西村勇作
129	七ツ松村の由来	七松	源頼信			昔、七ツ松村は葦原村という寒村だった。寛仁3年、源頼信が通るかかったとき松の傍にいた小さな童子が村の窮状を訴えて消えた。頼信はこのことを察し、水田を寄付して八幡宮を勧請した。頼信は一本の松のところに六本の松を植え、八幡宮を七ツ松八幡宮と称した。	立花志、しるべ14西村伊作
130	荒木村重一族の処刑	七松	荒木村重	慰霊碑 七松八幡神社(七松町3-10)		天正七年十二月十三日、有岡城で信長軍に捕らえられた村重の一族は七松に連行され上臈122人は磔、下級武士の妻子388人、若党124人は農家に押し込まれて焼き殺された。	信長記、川千鳥、立花志、市史2、ニュース6・7西村伊作、尼事典
131	板田沼	七松	孝徳天皇			七松村に「板田沼」一名「おぼただの沼」(小瀬田沼とも)がある。孝徳天皇が宮んだ「おぼただの宮」があったともいう。	撰群談
132	さかさ川の小笹と葦	水堂	武士			川の一部で流れが逆になる「さかさ川」と呼ばれる部分がある。天正十年、山崎の合戦で追われた武士が、川に飛び込み身を隠した。さかさ川に生える小笹は片葉で、葦のはさかさ巻になる。	園、解放史、戊井、尼伝説、TOM
133	目のふちの黒い魚	水堂	武士		目のふちの黒い魚は行儀菩薩のお使いだから、取ったら罰が当たる。	戦いで目を負傷した武士が「さかさ川」の水で顔を洗ったら痛みがとれ傷が治った。この武士は行基を信仰していたので、行基の使いの魚が目目の毒を吸い取ったが、代わりに魚の目のふちが黒くなった。「さかさ川」の目のふち黒い魚は行基のお使いの魚なので、取ったら罰が当たる。	園、解放史、戊井、尼伝説、TOM
134	円光地蔵	水堂				水堂の畦道の端に「円光地蔵」があった。「如来坊」と呼ばれる一石五輪塔を中心に、「善導坊」といわれる丸い石が左右に並んでおり、その前を「地蔵前」といった。開発がすすむ「円光地蔵の如来坊」は水堂総合センターの横に祭られ、「善導坊」はどこかへ合祀された。	園、戊井
135	赤エビ(1)	水堂	武士		赤エビは捕らえない。	円光地蔵の横の小川に、体長三センチほどの赤いエビがいた。このエビは切腹した武士の血が川に入り、恨みでずっと赤いという。村人は気味悪がりながらも大切に、捕らえたりしなかった。	園、解放史、戊井、尼伝説
136	赤エビ(2)	水堂	大井戸長者墓殿、戊井貧乏宮殿			大井戸長者墓殿の倉庫から小豆が一俵なくなり、戊井貧乏宮殿が赤いものを食べていたといわれ疑われるが、腹を裂いて出てきたのは赤エビだった。	戊井
137	金衆寺の豆狸	水堂				身の丈ほどの真蕨の茂ったさかさ川の川辺を歩くと、頭の上から砂が降ってきた。これは金衆寺の豆狸のいたずらだという。	戊井
138	馬の足形石	水堂	天武天皇	足形石(水堂北公園)		天武天皇が皇太子だったころ、水堂を通りかか(一説に有馬へ行く途中)、皇太子の乗った馬(一説に車を引く馬)の足形が石に残った。石は水堂来た公園にあるが、足形面を下にしているため見えない。	園、尼伝説、TOM
139	昆陽川の行基さん	塚口昆陽川	行基		行基さんは食べないで逃がす	行基菩薩が通るかかったとき、農民がフナを焼いていた。行基が魚を買い上げで逃がしたところ生き返って泳ぎだした。以来、昆陽川には揚げたような茶色の上まだら模様のある魚がいて「行基さん」と呼ばれており、土地の人は食べずに逃がす。	塚口神社縁起
140	如来塚	塚口昆陽寺	行基			行基が昆陽寺にいたとき、はるかに光明を見て、仏像を得た。	撰群談、立花志
141	笠の池	塚口東富松	行基			塚口村と東富松村の境に「笠の池」という池があった。行基が皮膚病(かさ)にかかっている人に池の水を浴びせると皮膚病が治った。	立花志、尼伝説、TOM
142	塚口の藤	塚口				元禄時代、塚口村本願寺御堂(正玄寺)の藤は、蔓が四方に茂り、花は地につくほど垂れていた。	撰群談
143	富松の夜泣き石	東富松富松橋東詰; 円受寺				東富松川にかかる富松橋東詰、東富松の円受寺にある大きな石は「夜泣き石」と呼ばれる。理由は①もと川にあったので「川に戻りたい」、②もと昆陽川にあったので「昆陽に戻りたい」、③二つの石は夫婦だったので「一緒にになりたい」と泣く	富松記、円受寺住職橋本一哉氏、TOM
144	朝川から現れた阿弥陀仏	東富松	塩田半兵衛			天保6年、塩田半兵衛は朝川のほとりから「半兵衛、半兵衛」と呼ぶ声を聴き、阿弥陀仏を見つけた。塩田家に祀られている。	立花志
145	梅の木塚	東富松(塚口町5-25)	用明天皇			用明天皇の墓。梅の名所。一説に、武庫川あたりで討たれた高師直の部将の首塚。	立花志、口碑、尼伝説、TOM
146	茨木童子	東富松須佐男神社	茨木童子			東富松で生まれながら牙が生えた眼光鋭い子どもが生まれ、茨木に捨てられて茨木童子となった。のちに父母が危篤であることを知った茨木童子は見舞いに戻ったので、父母は国子でもなした。童子は、「自分は東寺の門に住んでいるが、二度とは来ないだろう」と告げて去った。あとを追った両親が行方を見失ったところ「安東寺」で、童子が戻るとされる日に「鯛祭」が行われる。須佐男神社の「八朔祭」に伝承されている。	撰群談、立花志、市史10、昔と今、尼伝説、TOM
147	武庫川と猪名川のけんか	武庫川・猪名川	住吉大神、猪名川女神、武庫川女神			住吉大神の妻になりたいと、猪名川女神と武庫川女神が対立し、猪名川女神が自分の川の犬石を投げつけ、武庫川女神は權えていた岸を引き抜いて投げつけた。	神代記、市史4、川筋、尼伝説、TOM
148	ゴゼン上り	西昆陽				大雨で武庫川の堤が切れて村が水につかった。それ以来、正月七日に池尻の稲荷社に参詣し「炒豆が生えるまで、大雨が降らんように」と祈る。これをゴゼン上りといひ、現在は七月に行う。	口碑 伝承者故・氏田良一氏、尼伝説、TOM
149	行基さんの忘れ杖	西昆陽 稲荷神社	行基			行基が西昆陽の田を見回っていて、忘れ杖の杖が根付いた桜が西昆陽の稲荷の西側にある。	石井松男氏(S20生)、尼崎の歴史ものがたり
150	髭の渡し	西昆陽常松	髭安兵衛			髭の老人が茶店をひらいていたので「髭の渡し」といわれ「髭茶屋」という地名になっていた。同一人物かわからないが、西昆陽墓地に寛政11年没の「髭安兵衛」の墓があり、茶店を開いていた。	市史2・6、尼事典、尼散歩、しるべ30
151	ギョーギンさん	常吉	行基			流れている川を行基が逃がしたので、常吉の用水路のギョーギンさん(鮒)は捕らえても逃がす。うろこが少なく、内蔵は黒く透けて見える。	谷口寛二氏(S11生)

152	源太郎さん	常吉	源太郎			正徳2年の武庫川の氾濫で常吉村が土砂に埋まったとき、一人で土砂を運ぶ源太郎に村人は勇気付けられた。	中村伊三郎氏 (M23生)	
153	常吉村の狸	常吉須佐男神社			田の藪ぼうとが燃える	正徳2年の氾濫のあと、狸が夢に出てきて「須佐男神社の稲荷社は復旧したが、わしは祀ってもらってない」と言ったので、狸も祀った。現在は忘れられている。	中村伊三郎氏 (M23生)	
154	破風のない家	常吉 (武庫庄)	渡辺綱、茨木童子		破風のない東屋造り	渡辺綱が羅生門の茨木童子の腕を切り落とした。常吉の渡辺綱の家に伯母が訪ねてきて鬼の腕を見せてくれと言う。腕を見せると伯母は鬼の姿になり、破風を破って逃げた。	源盛資、平家、摂群、拱名、市史10、昔と今、尼文学、尼伝説、尼事典、ものがたり、TOM	
155	伍左右衛門家の豆狸	常吉	伍左右衛門			昭和のはじめ、常吉の伍左右衛門さんの屋敷に榎か木こくの大木があり、豆狸が出入りしていたが、うろにふたをしたらいなくなった。	谷口寛二氏 (S11生)	
156	二人塚	武庫庄、阪急武庫之荘駅北側				「二人塚」あるいは「ミヨト塚」と呼ばれる塚があり、「アサホリの塚」ともいわれ、井堀・朝堀の塚と伝えられていた。武庫之荘5丁目には「浅堀」の古字があり、その古字の家もあった。現在、塚は消滅している。	摂群談、口碑、尼伝説、TOM、尼崎市埋蔵文化財遺跡分布地図	
157	義民五兵衛さん	武庫庄	五兵衛		墓碑 (武庫之荘5丁目48)	寛文十年頃、武庫庄のフケ田 (湿地・泥質地の質の悪い田) を池にするという殿様の命令に反対した五兵衛は死罪となったが、早馬で中止が命ぜられたのを聞き違って打ち首となった。人々は悲しみ池になるはずの田に五兵衛さんの墓を建て、命日に仕事を休み村中で供養した。	市史10、昔と今、尼伝説、尼事典、春秋94	
158	武庫山籠	武庫庄				武庫庄の名産に「武庫山籠 (やまかご)」という名産があり、秣や落葉を入れるために山村の人が買収された。	摂群談	
159	八橋	武庫之荘、阪急武庫之荘駅北側				石橋を八つ渡した八橋という名所があったが現存しない。	摂群談、尼伝説、TOM	
160	武庫の島	西武庫	神功皇后			西武庫は大昔は島で、神功皇后の朝鮮出兵の際、暴風雨に会い、雨宿りをしたという。堤防にはその際濡れた母衣をかけたという「ホーロー松」があった。	口碑、尼伝説、TOM	
161	徳木上人名号碑	守部	徳木上人		名号碑 (南武庫之荘6丁目 中の池公園)	「今法然」と呼ばれた浄土宗の名僧・徳木上人が寛政年間に守部村に来た時、武庫川の堤が切れそうになっていたのを村人を励まし、決壊を防ぐ方法を指示した。人々はその徳をたたえて守部の渡し場の近くに名号碑をたてた。碑の横から堤防に上がる道を「上人坂」といったという。碑は現在中の池公園に移されている。	福田倅一氏・高田銀蔵氏、つる32、尼事典	
162	種なし蜜柑	守部				江戸時代、守部村の藤右衛門の庭に種なし蜜柑の樹があった。当時は蜜柑には種があったが、これはそれがなく味がよかったのもてはやされた。	落穂	
163	緋宮作の観音像	観音堂 (南武庫之荘8丁目15)	緋宮光子内親王		観音堂	上守部表臺鳴神社本殿の右にある観音堂は江戸時代まであった神宮寺 松村山寿福寺の跡とされる。寿福寺は泉涌寺の塔頭戒光院の末寺であった。本尊の聖観音は後水尾院の皇女緋宮光子内親王御製の張子の観音で、戒光院より贈られたものという。緋宮が描いたという十一面観音像の掛け軸とともに秘仏で、毎年8月の観音踊りの日のみの開帳である。また神社蔵の「おかげ踊り図絵馬」は市文化財である。	市史5、礼賛	
164	泥つき地藏	泥つき地藏堂 (南武庫之荘8丁目25)			泥つき地藏堂	毎年8月24日には地藏祭	田植えの時期にふせてしまった老婆の代わりに、日頃から信仰していた地藏が代わりに夜のうちに田植えをしてくれた。地藏の足には泥がついていた。以後「泥つき地藏」と呼ばれるようになった。	つる32、尼伝説、TOM
165	生りものの木が実らない	今北				旅人がたくさんなっていた柿や桃を求めたが村人が断ったため、以後実らなくなった。	解放史、尼伝説	
166	珍しい燕子花 (かきつばた)	今北				今北村の八左衛門の庭に、白と紫の紋りの花が咲くかきつばたがあった。大変珍しい花だと城主が「村雲」という名を考えた。	落穂、奇観	
167	島中初三衛門のあやめ池	濱田・今北				濱田と今北との中間に、昔島中三衛門の池があり、あやめの名所として知られていた。	大庄誌	
168	稲葉千軒	東大島・西大島 (今の稲葉荘のあたり) 今北				現在の稲葉荘のあたりは、昔稲葉寺という寺を中心に千軒もの人家があったが、荒木村重の乱で焼失した。区画整理をした際、地中から仏像を刻んだ墓石・五輪塔が、今北の雷池を掘った際には土器が出たという。	大庄誌	
169	後醍醐天皇御車止の松	濱田村	後醍醐天皇			濱田の村から尼崎西墓地 (西難波町3丁目) に行く途中、濱田川にかかる石橋付近にあった古い松は、隠岐に流される後醍醐天皇が車を止めたところだという。	大庄誌、尼伝説、TOM	
170	濱田の天皇宿	濱田	後醍醐天皇			後醍醐天皇が隠岐に流される途中、濱田村の寺井家に宿られ、御製を残されたが火災で焼失し、「天皇宿」の名だけが残った。書き残された文に「津国菜切の里に宿りて」とあり、濱田村のことだという。	落穂、奇観、大庄誌、尼伝説	
171	武内宿禰の墓	濱田 (菜切山 菜切山町1)	武内宿禰			濱田に菜切山という塚状のところがあり、武内宿禰の墓だとう。子孫という家もある。	武庫郡、川千鳥、大庄誌、尼伝説、尼散歩	
172	崇徳上皇と献膳	浜田 松原神社 (浜田町1丁目6)	崇徳上皇		松原神社	松原神社のあるあたりは浜田荘と呼ばれ、崇徳上皇の所領があったとされる。隠岐に流される途中、大風にあった崇徳院は浜田の武内家に泊まれ、鮎・蛤・牡蠣・まで貝・湯葉・椀菜・牛蒡・焼栗・粽などの料理を差し上げたところ、非常に喜ばれ「おすれぬの御製」「すくねづかの御製」を賜った。今日でも松原神社の春祭には献膳が行われている。(浜田荘の北、大北備前荘は藤原頼長の所領であった)	武庫郡、しるべ3、尼伝説、尼散歩、尼神社、TOM	
173	後鳥羽院の仮御所	浜田 大島	後鳥羽上皇			後鳥羽上皇が隠岐に流される際の仮御所が浜田と大島の間にあったという。	摂群談、尼伝説	
174	宝樹院	宝樹院 (大島3丁目17)	桑山重晴		宝樹院	戦ヶ岳の戦いで功をあげ、豊臣秀吉の信任があつた桑山重晴は、茶人としても名高く、晩年は仏門に入った。重晴が天正年間に秀吉の念持仏である不動明王・弁財天を安置し再建したのが宝樹院である。古くは真言宗で宝集院と称したが、寛永6年、浄土宗となり宝樹院と改めた。秀吉・重晴の木造を蔵し、ともに市文化財である。	摂群談	
175	琴の浦の由来	尼崎の海岸一帯、一説には東新田のあたり	菅原道真			菅原道真が大宰府に左遷される途中、尼崎の浦のあたりを他とは違う良い眺め (真の浦) と称し、歌を詠んだ。それを風雅に「琴の浦」と称したのである。	尼崎志2、尼事典に関連項目	

176	琴浦神社の言い伝え	東新田 琴浦神社		琴浦神社 (琴浦町21)	社前を通る船は帆を降ろし、大名行列は迂回した。琴浦社の境内の砂は毒蛇を防ぐ効果があるとして、竹藪に竹を切りに行く際には布袋に入れて持って行った。	在大臣源融は琴浦神社のあたりに海水を引き込み「琴の浦」と名付け、風景をめでたさという。現在も琴浦神社の境内、鳥居の東北側に溝のような「潮汲み場」と呼ばれるところがあるほか、その故事を描いた絵馬もある。『大庄村誌』によれば、琴浦社の神額は源融のものとして、社前を通る船は帆を降ろし、大名行列は神社の後ろを迂回した。額を外して通ったところ、支障がなかった。また境内の砂は毒蛇を避ける効果があるという。	三才、撰津志、丸網目、撰群談、撰名所、笈埃、尼崎志2、尼今昔、大庄誌、しるべ3、しるべ4、尼伝説、尼散歩、TOM
177	雉ヶ坂と礼田	雉ヶ坂 (大庄西町2丁目12・35)	豊臣秀吉・明智光秀	西素菱嶋神社	西素菱嶋神社の氏子は雉を捕らず、食べない	明智光秀の伏兵を武庫川の堤の坂にいた雉が飛び立つことで知らせ、豊臣秀吉は勝利した。そこからこの坂を「雉ヶ坂」という(伏兵がいた町を「待討町＝松内町」とも)。それに先立ち伏兵を教えた百姓に雉ヶ坂の下に「礼田(いいでん)」「礼田地(いいでんいけ)」と呼ばれる田と池を作らせた。また雉は神の使いであるとも言ったため、西素菱嶋神社の氏子は雉を捕らず、食べない。	大庄誌、市史10、しるべ2、しるべ3、昔と今、尼伝説、尼散歩、TOM
178	御祭神のくじ決め	道意新田、道意神社 (道意町5丁目北)	中野道意・牛頭天皇・住吉大明神	道意神社		承応2年、大阪海老江の中野道意が尼崎藩の許可を得て道意新田を開発した。その際、神社を勧請することとなり、入植者の出身地である海老江村の牛頭天皇か野里村の住吉大明神かをくじきで決めたところ牛頭天皇となった。	市史5、ニュース2
179	楠霊神社の由来	楠霊神社 (武庫川町4丁目)		楠霊神社	切ろうとすると害がある	阪神武庫川駅の南にある大きな楠は、もと墓地に生えており、武庫川改修工事に伴う移転の際に切ろうとすると人夫が急死したり災難にあたりした。そこで楠霊祠としてお祭りしたという。また洪水の際にこの木に登り難を逃れたとも、ある人が楠のそばを通ったところ重威に打たれたからともいう。祭神は白龍だという。	大庄誌、ニュース12、尼伝説、尼散歩、TOM
180	座頭谷					有馬へ行く座頭が道に迷って行き倒れて死んだ。座頭谷を通るとひだるぼうが付く。また、昔有馬へ湯治へ行って死ぬと戸板に掛けて帰らずに背に負って帰らねばならなかった。六甲山の鬼は死人だと「置いていけ」と言うので、生きているように話しかけながら山を越した。	近畿民俗
181	石まら狐	長洲				魚屋が天秤棒を担いで通ると、きれいな女が出てくる。気が付けば魚を全部とられて、はじめて狐とわかる。ある魚屋が石の宝を持っていったところ、案の定狐が出てきたが、その後悪さをしなくなった。その魚屋が商いに出ると土手の物陰から「石まら、石まら」と狐が呼んだ。	近畿民俗
182	赤ん坊とアメ (子育て幽霊)	寺町、日よ辻				日よ辻の胎屋に、夜なると女が胎を買いに来た。それから銭函に石ころや木の葉が入っている。不思議に思った胎屋のおじさんが女の後をつけると、寺町の墓前で産を産した。しらべると墓の中で赤ん坊が生まれていた。	近畿民俗、尼崎の民話
183	野施行	寺町、長遠寺				六商人とかはでな商売をしている人は薬に入ると野施行をした。水たんに赤飯と油揚げを竹の皮包みにしたものを入れてかつぎ、「せんぎよ、せんぎよ、のせんぎよ」とはやしながら狐の居そうな穴に置く。稲荷下げが付いてきて、いろいろ託宣する。野施行は狐狸だけでなく人間にもよい行事だった。野施行によく行った長遠寺の狐穴はふたをさされている。	近畿民俗
184	成金		成金 (浄金)			尼崎の材木問屋、浄金は、1223年に夢で老僧のお告げを受け、京都の千本釈迦堂へ材木を納めた。	南部再生、義空伝
185	享保の象行列					8代将軍吉宗への献上品としてベトナムから来た二頭の象が江戸へ向かう途中、尼崎を通過し、人々は固唾をのんで見物した。	南部再生、図説
186	田能の力石			観音堂		観音堂に力石が残されており、「崇雲石 小三郎」と刻印がある。誰も持ち上げられなかった石を小三郎という人が持ち上げた記念とされる。石は180kg以上あるという。	高島慎助「兵庫の力石」

## 地域研究報告

### 健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について

研究代表：餅 美知子

共同研究員：松葉 真、片山麻衣、竹本尚未、中谷 梢、宮本恵里

#### 【はじめに】

「食の健康」の実現には、各家庭での取り組みだけでなく、外食・中食産業も含めた食の環境整備が重要である。

兵庫県ではその一環として、「食の健康」に取り組んでいる店舗を対象に“食の健康協力店”としての参加登録を募っており、平成23年3月末現在、県内では約6,400店舗、尼崎市内では約240店舗の登録を得ている。

しかし現状では、“食の健康協力店”の活用度は十分ではなく、一般市民への認知度も低いため、今後一層の普及を検討するにあたり、まずは尼崎市内の協力店舗を対象に、“食の健康協力店”の現状の取組内容を把握することを目的として、本調査を行うものである。

食の健康協力店としての取り組み内容の一例としては、①「ひょうご“食の健康”運動」のPR（チラシの設置等） ②店内禁煙の実施 ③野菜たっぷり料理、塩分控えめ料理、カロリー控えめ料理等の提供 ④ごはんを中心とした主食主菜、副菜のそろった定食の提供 ⑤オーダー時に主食の量、ドレッシングやソースの量を控えめにしよう注文できる ⑥栄養成分の表示 ⑦その他、お店独自の取り組みなどを実践している。



兵庫県のホームページ（食の健康協力店）より引用

#### 【対象・期間・方法】

対象店舗およびアンケート回収率は表1のとおり、240店舗、回収率は50%であった。

回収率の高かったのは「個人店舗」であり、低かったのは「チェーン店」であった。

期間は、平成25年11月～平成26年1月に実施した。

方法は、食の健康協力店に対してアンケートを作成し郵送し後日回収した。

アンケート項目として、

- ①営業形態
  - ②取り組み内容
  - ③取り組み内容を増やすか
  - ④取り組み内容を増やす項目
  - ⑤取り組み内容を増やさない理由
  - ⑥ステッカー・タペストリーの貼っているか
  - ⑦ステッカー・タペストリーの貼らない理由
- について調査を行った。

表-1 調査対象店舗数・有効回答店舗数

営業形態	調査対象店舗数	有効回答店舗数	有効回答率
飲食店店舗(個人)	40	24	60.0%
飲食店店舗(チェーン)	47	12	25.5%
スーパー	12	12	100.0%
コンビニエンスストア	129	66	51.2%
雑店型	3	1	33.3%
その他	9	5	41.7%
合計	240	120	50.0%

**【結果】**

アンケートから考えられること

現状調査から“食の健康協力店”の取り組みとしてどの施策が浸透しているのかが明確になった。

図1をみると、食の健康協力店における取り組み内容をカテゴリー分類すると、

健康施策では、健康増進の大目標である終日禁煙を実施している店の割合が54%であり、メニューの栄養成分表示は25.8%、ひょうご食の健康運動のPRは17.5%に止まっていた。

勧める食へのアプローチでは、野菜や大豆製品等の日本食由来のメニューを勧めていた。

控える食へのアプローチでは、エネルギーや塩分等と回答した割合が上位を占めた。

表-2 “食の健康協力店” 取組内容別の実施率 (取組実施店として n=120) (%)

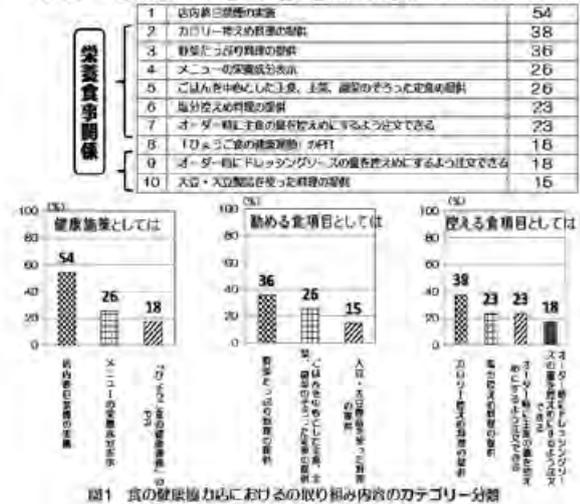


図2・表3をみると、営業形態別に“食の健康協力店”の取り組み内容別実施率では、スーパーやコンビニエンスストア（以下コンビニと表す）等は、店内終日禁煙、カロリーを控えた料理の提供やメニューの栄養価成分表示の割合が高い傾向にあった。

個人やチェーン飲食店では、オーダー時に主食の量や野菜たっぷり、塩分控えめなどのきめ細かいサービスがなされていた。但し、チェーン飲食店では、スーパーやコンビニと同じく店内終日禁煙の実施率が高値を示した。

表-3 営業形態別の“食の健康協力店”取組内容別の実施率

営業形態別	取組内容	実施率 (%)
スーパー	1 店内終日禁煙の実施	84
	2 カロリー控えめ料理の提供	75
	3 メニューの栄養成分表示	58
コンビニエンスストア	1 店内終日禁煙の実施	84
	2 カロリー控えめ料理の提供	42
	3 メニューの栄養成分表示	33
飲食店 (チェーン)	1 店内終日禁煙の実施	75
	2 野菜たっぷり料理の提供	67
	3 ドレッシングの量を控えめにするよう注文できる	50
	4 野菜たっぷり料理の提供	42
飲食店 (個人)	1 店内終日禁煙の実施	58
	2 野菜たっぷり料理の提供	54
	3 塩分控えめ料理の提供	46
	3 ドレッシングの量を控えめにするよう注文できる	46

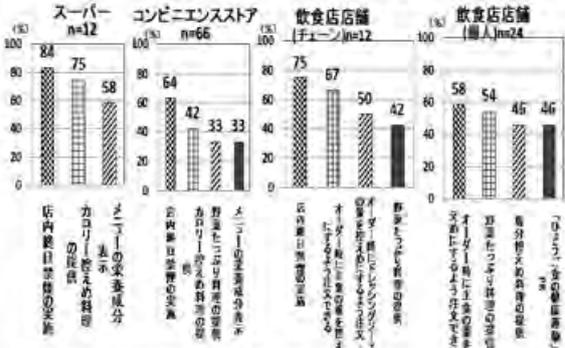


図2 営業形態別の“食の健康協力店”取組内容別の実施率

図3をみてみると、食の健康協力店に登録している営業形態別店舗の現状について次元マップ（ポジショニング・マップ）を用いて描くと、営業形態による利点と欠点が明確になってきた。

一例として、①チェーン飲食店では、味付けや食材の分量が決まっている。②個人の飲食店では、主食やドレッシングの量、塩分などの味付けの加減についてオーダーが出来る。③スーパーやコンビニでは、食品や料理の栄養価表示がされている。

図-3 “食の健康協力店”取組内容と「営業形態」によるポジショニング・マップ (コレスポネンス分析\*)

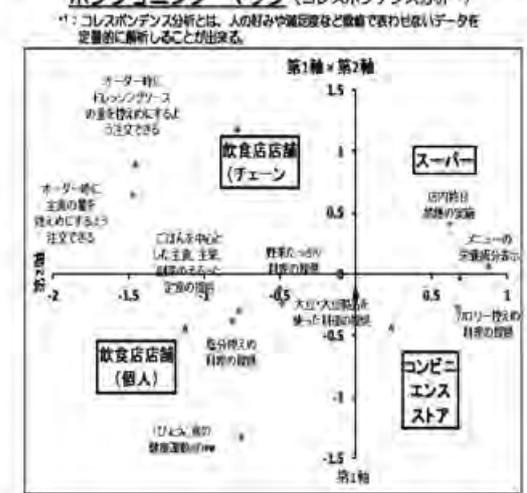


図4をみると、“食の健康協力店”の現状の取り組み以外に、今後の取り組みたい項目についての調査と比較を行ったが、これまで取り組みがな

かった「ひょうご“食の健康”運動」のPRの項目に、スーパーで36.4%、コンビニで29.4%の回答があった。それに加えてスーパーで塩分を控えた料理の提供に18.2%の回答を得た。

コンビニでは野菜たっぷり料理の提供の項目が次年度以降にも取り組みたいものとして掲げているが、いずれも現状の割合よりも低値を示した。

今後“食の健康協力店”の取組内容を増やそうとは考えていない店舗は、本調査に対する回答店舗全体の3割強存在し、特にチェーン飲食店やコンビニでその割合が高く、チェーン飲食店で実に60%弱、コンビニでも約40%が、取組内容を増やそうとは考えていないと回答している。

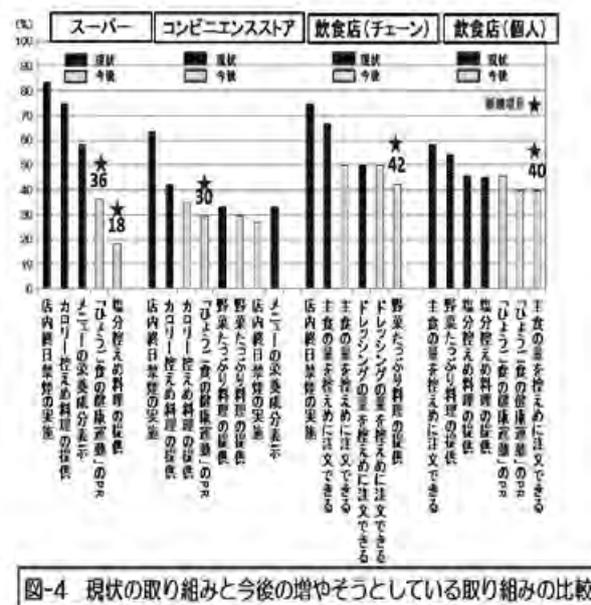


図5をみると、回答件数120店舗中の営業形態別ステッカー・タペストリーの貼っている割合は、23.3%であり低値を示している。

図6をみると、営業形態別のステッカー・タペストリーの貼っている割合は、個人飲食店が58.3%、チェーン飲食店とスーパーが共に25%であり、コンビニは7.6%であった。

また、貼っている割合を左右する要因として、個人の裁量によることが判明した。

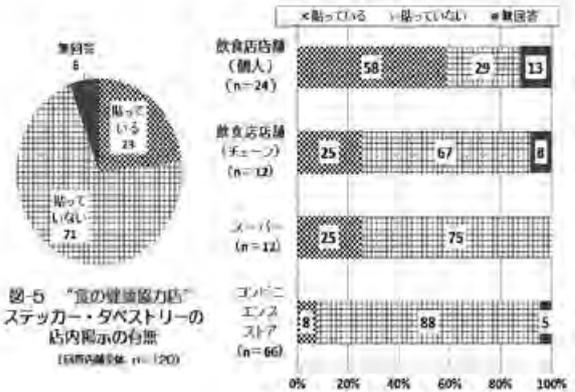


図5 “食の健康協力店”ステッカー・タペストリーの店内掲示の有無 (回答店舗数: n=120)

図6 営業形態別の“食の健康協力店”ステッカー・タペストリーの店内掲示の有無

図7をみると、営業形態別ステッカー・タペストリーの貼っていない店舗の理由としては、コンビニで77.6%、チェーン飲食店で50%、個人飲食店で85.7%と高値を示した。スーパーの原因は、紛失したが66.7%であった。

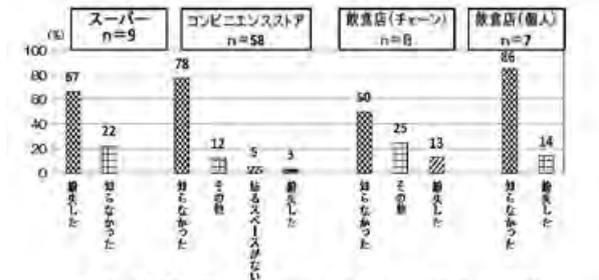


表5 ステッカー・タペストリーを貼らない理由と「営業形態(店)」との相関に関する検定結果

理由	営業形態との相関 (Cramer's V)	検定結果 (p値)	スーパー	コンビニエンスストア
貼らなかつた	0.41	**	低*	高*
貼るスペースが足りない	0.12	n.s.	-	-
紛失した	0.59	**	高*	低*

\*\* p<0.01 \* p<0.05 n.s. 有意差なし

【考察】

I. アンケートの結果をカテゴリーで分類すると、

- ①健康増進施策からは禁煙、商品の栄養成分メニュー表示が、
- ②勧める食項目からは野菜料理、主菜・副菜などのバランス、大豆製品の摂取を、
- ③控える食項目からは過剰なエネルギー摂取(過食)や塩分の摂り過ぎに注意が必要であり、正しく食の健康協力店の設置目的でもある生活習慣

病の予防が前提になっている。

## II.食の健康協力店の取り組み

多岐にわたり、営業形態は違うものの、スーパー・コンビニ・チェーン飲食店や個人の店では、各々、出来ることから対応しているのが現状である。

この情報を利用者側が上手に活用すれば、自らの健康増進につながる。

## III.今後の増やそうとしている取り組み

今回、ひょうご食の健康運動の一環である食の健康協力店に対して、現状調査のアンケートを送付したこともあり、ひょうご食の健康運動のPR活動の促進の意見が目立ったことは、働きかけとしては良いタイミングであったのではないだろうか。

さらに、意見の割合は決して高値ではないが、すべての営業形態（スーパー・コンビニ 飲食店のチェーン店や個人の店）で新たな取り組みを考えており、そのような店舗に対しての栄養・食事アドバイスが本学の食物栄養科の使命である。

## IV.今後、取組内容を増やそうと思わない理由

チェーン店・フランチャイズ店なので自店独自の判断による取り組みが出来ない為であり、その対応として本社への働きかけやその店を利用する者へのポスターやリーフレットなどをつながりプロジェクトの授業などで作成して活用する。

## VI.ステッカー・タペストリーを貼らない理由

コンビニ等のチェーン店については、本社からステッカー・タペストリーの存在を知られていなかったりするので社内での情報伝達の徹底が望まれる。

飲食の個人店も、ステッカー・タペストリーの存在を知らない割合も高くあり、これからのPR活動が重要である。

最後に、今回の調査で、食の健康協力店の取り組みは多岐にわたっており、営業形態は違うものの、スーパー・コンビニ・チェーン飲食店や個人

の店等、各々の店が対応出来ることが明確になれば、店の利用者がこの情報を受け取り上手に活用することによって自らの健康増進につながる。

今回、ひょうご食の健康運動の一環である食の健康協力店に対して、現状調査のアンケートを送付したこともあり、ひょうご食の健康運動のPR活動の促進の意見が目立ったことは、働きかけとしては良いタイミングであったのではないだろうか。

さらに、意見の割合は決して高値ではなかったが、すべての営業形態（スーパー・コンビニ・飲食店のチェーン店や個人店）で新たな取り組みを考えていることがわかったことが大きな成果でもある。これらの店舗に対しての栄養・食事アドバイスを行うことが、本学の食物栄養科の地域連携における大きな役割である。

今回の調査を機会に、①現在、新たな健康・栄養啓蒙活動を展開しようと考えていない店舗に対しての意識づけ、②取組内容を増やしたいが、実践に結びつかない チェーン店・フランチャイズ店に対するサポートがあげられる。具体的には店舗を利用する者へのポスターやリーフレットの作成を今後開催するつながりプロジェクトの授業で行なうことが望ましい。最後に次年度は“食の健康協力店”を活用している方と活用出来ていない方との意識・知識・行動レベルからの認識の差を検討していき、利用者ニーズに即した“食の健康協力店”のあり方を追求していきたい。

餅美知子（人間健康学部食物栄養学科准教授）

松葉 真（同准教授）

片山麻衣（同助手）

竹本尚未（同助手）

中谷 梢（同助手）

宮本恵里（同助手）



## 活動報告



第2回 まちづくり解剖学 (2013年10月10日)



第4回 まちづくり解剖学 (2014年2月13日)

## 地域連携推進機構活動報告

平成 25 年度〈まちづくり解剖学 尼崎〉

平成 22 年から本学では、自分たちが立地している地域のことわからなければ何もわからないし、行動を起こすことはできないという思いから大学をプラットフォームにした勉強会を発足した。地域学習やまちづくりについて地域の方々、行政の方々からお話を拝聴する〈まちづくり解剖学 尼崎〉である。

さらに平成 25 年、学長を機構長とする「地域連携推進機構」を発足した。これを核に、学内の教職員、市役所の職員、地域の方々と一緒に改めて地域の勉強会を開くこととなった。これが、〈まちづくり解剖学 尼崎〉である。この年、平成 25 年からは、主催を地域連携推進機構とし、共催を尼崎市、尼崎商工会議所とで運営を行っている。

目的として、

- 地域社会、大学、行政それぞれが抱える課題を共有する。
  - これまでの取り組み、問題点・改善点を明確にしていくことで今後に向けての構想、行政の役割を理解、自分自身が何をできるのか考える。
  - 実施方法は、一つの地域の課題に対して異なる立場の方々からそれぞれのお話を聞くことで理解を深め、発言することで参加者みんなの意見を聴き自分の考えをまとめる。
- を掲げ、運営を行っている。

この一年間実施してきた結果としては、

- 尼崎市とのこれまでの取り組み、問題点改善点が明確になり今後に向けての構想、行政の役割が少し理解でき、自分自身が何をできるのか考えることが出来る機会であったが学科として教員、学生のかかわりについてまで具体的に思い浮かぶところまで考えつくことができなかった。しかし、方向性が明らかに

なったことで今後の取り組みについて具体化していきたいと考えます。

- もっと学校が（先生方が）抱える課題を共有できたらと思いましたが。保護者も教師も地域の資源を理解してつないでいく役割をもっていることが求められると思います。その力を、大学で地域と連動させていただいて養成できたらとも感じました。
- 老朽化した集合住宅の再建の話が出ていましたが、残された生命の量を考え、再建をあきらめるという点で限界集落の抱える課題との共通点を感じました。今回の話の中で、まちづくりが多様な人々が参加する中で確実に前に向いている、そのパワーを感じることができました。
- 若い人を地域へ引き入れようとすれば学校がキーワードになる、これをどのようにするかが課題と認識した。
- 地域に根ざした大学として、地域住民が元気になるまちづくりにつながるようにすることが重要だ。
- コーディネーターという役割が福祉分野だけでなく教育分野にも必要とされていることが分かった。
- 大学で一体何をやっているのかということを知ってもらう手段として、外に出ていく必要を多に感じた。その時は、地域のニーズにこたえたものでなければ、効果が少ないので、何を求めているのかの調査が必要である。
- 大学の各学科の取り組みを整理しながら連携する方法を話し合う。などの意見が出された。

それぞれのテーマでは、

- 町会と小学校区2つのコミュニティがあることで地域住民が混乱することはないのだろうかと疑問であった。町会→小学校区にコミュニティが交わっていけば、有効的に使えて

行くのだろうと感じた。学生ではない若い世代（20代前半から30代前半）をどのように巻き込んでいくのが課題だと感じた。

- とてもよくわかりました。特に「地域によって高齢者問題も内容がちがう」というところまで分析されているのはびっくりしました。今後の地域の課題にしたいと思います。※（まちの保健室）は3年ほど前に出前講座としてきていただきました。とても好評でした。（園田南地域包括センターの紹介でした）
- 2006-2008年まで武庫荘総合高に通学していたが、食育活動で連携していることを知りませんでした。実際に授業を経験してみたかったです。また、同じ市内でも、地域ごとに栄養に差があるということなので、学力と比例しているのかが気になりました。
- 児童教育学科のとりくみの全体がよくわかった。今後、特に幼保コースのとりくみが幼教や看護とも連携してとりくんでいけたらいいなと思いました。また、地域活性化のために大学の果たす役割について改めて考えさせられた。
- その地域がもともとかかえていた問題が、より明確になったり、復興を難しくしているのかと感じました。とくに高齢者が住み慣れた土地・家に住み続けることは、日常であっても簡単でないケースもあり、本当に難しいと感じます。  
などの意見が出されている。

平成25年実施概要は以下の通りである。

### **第1回**

日時：8月8日(木) 18:15~20:00

場所：園田学園女子大学 大会議室

発表者：大江篤教授

テーマ：尼崎市立杭瀬小学校と本学の連携事業  
～杭瀬小学校区センター構想～

参加者：23名

### **第2回**

日時：10月10日(木) 18:15~20:00

場所：園田学園女子大学 チャティ

発表者：野呂千鶴子教授

テーマ：尼崎市を通して学ぶ本学地域看護学(公衆衛生看護学)教育の特色

出席者：14名

### **第3回**

日時：12月12日(木) 18:15~20:00

場所：園田学園女子大学 チャティ

発表者：餅美知子准教授

テーマ：食物栄養学科の地域活動

参加者：19名

### **第4回**

日時：2月13日(木) 18:15~20:00

場所：園田学園女子大学 チャティ

発表者：影浦紀子講師

テーマ：児童教育学科の地域連携について

出席者：16名

### **特別回**

日時：3月24日(月) 13:30~15:00

場所：222教室

発表者：野呂千鶴子教授

テーマ：住み慣れた地域で安心安全に暮らすための生活環境を考える

～東日本大震災・豪雨災害被災地における研究活動～

出席者：18名

※ 文中の意見は当日の議論と研究会あとに提出されたアンケートより析出したものである。

(文責：地域連携推進機構 榎本匡晃)

## 活動報告 No. 1

### 1人一台タブレット端末実現に向けた ICT 活用尼崎市モデルの作成

研究代表：堀田博史

研究協力：広岡正昭

#### 【はじめに】

2013年3月に総務省の「フューチャースクール推進事業」が、2014年3月には文部科学省の「学びのイノベーション事業」が終了します。その成果より、全国の小・中・特別支援学校のモデル校を中心とした、1人一台のタブレット端末導入の効果が、明らかになってきました。大阪市などの各自治体もモデル校を選定して、「わかりやすい授業」「学力向上」を目指した検証をはじめています。しかし、尼崎市はまだこの分野に着手していません。

このような背景の中、本研究の目的は、尼崎市の公立小学校において、将来の1人一台のタブレット端末導入に向けた足がかりとなるように、タブレット端末を効果的に活用できる授業場면을抽出することです。

#### 【研究計画】

以下の手順で、研究を計画・実施しました。

(1) 2013年11月に、授業での協働学習場면을想定して、タブレット端末を購入(教師用1台、児童用8台)しました。低・中・高学年での活用場면을思考して、研究授業計画を練りました。

(2) 2013年12月～2014年2月の間に、実際に研究授業でタブレット端末を活用(表1)して、その後

の研究協議で振り返り(計3回実施)を実施しました。

(3) 2014年2月、尼崎市内の小・中学校に案内して、タブレット端末の効果的な活用事例の成果報告会を名和小学校で開催しました。

#### 【研究成果】

- 以下の授業場面で効果を得ることができました。
- ・インターネット接続で音声確認でき、英語の聞き取りに便利
  - ・興味関心を抱くことができ、意欲的に課題に取り組めた
  - ・グループの活用では、教え合いができた
  - ・思考過程を共有することができた
  - ・視覚的に内容理解することができた
  - ・奥行きのある展開図は、タブレットで立体的に確認することで、イメージが具体化できた

#### 【今後の課題】

学年や教科、単元を広げて授業実践を重ね、効果と課題の抽出を継続していきたい。

表1 タブレット端末活用の授業一覧

月	日	曜日	学年	クラス	教科	単元
12	6	金	4	1	体育	大なわとび
12	3/20	火・金	1/2	6	体育/外国語	サッカー/we are good friends!!
1	23	木	5	5	社会	くらしをささえる情報
1	31	金	2	2	算数	かけ算
2	12	水	3	4	社会	尼崎市のしょうかいパンフレットを作ろう
2	19	水	5	3	総合	情報モラル

## 地域に向けた手洗い指導の拠点の構築 ～手洗い教室の効果の検証～

研究代表 : 山本恭子

共同研究員: 木村保司、田中響、  
垂水公男、中西衣宮

### 【はじめに】

市井において頻発するインフルエンザやノロウイルス感染症では、ほとんどの患者が家庭において療養することから、地域における感染対策が重要であり、手洗いやうがいが推奨されている。そこで本研究では地域に向けた手洗い指導の拠点の構築のための準備として、中高年層を対象とした手洗い指導方法の検証を行い、有効な手洗い指導の方法を構築したい。

### 【研究方法】

1) 研究の趣旨等を説明し、同意が得られた本学生涯学習センターの受講生を対象に「手洗い教室」を行い、手洗いの手技の上達、除菌効果の改善を調べ、手洗いに関する意識や「手洗い教室」についてのアンケート調査を行った。

#### 2) 「手洗い教室」の概要

インフルエンザやノロウイルス感染症について簡単な説明をした後、感染予防の為に手洗いが重要であることを伝えた。その後、蛍光ローションを用いて洗い残しやすい部分を見つける実験を行い、正しい手洗いを身につけることが必要であることを実感していただいた。手順を示したポスターを使用して下記の要点に沿って手洗い方法を指導した。

- 1、石けんをつけてよく泡立てる
- 2、手の平を洗う

- 3、手の甲をこする
- 4、指と指の間をこする
- 5、爪の先を洗う
- 6、親指をねじり洗いする
- 7、手首を握り洗いする
- 8、泡やぬるぬるがなくなるまですすぐ
- 10、きれいなタオルで拭く

#### 3) 手洗いの除菌効果

手洗いの前後にパームスタンプ S C D 寒天培地に手のひらを押し当てて細菌を採取し、37℃で 48 時間培養した。

#### 4) 手洗い手技の観察

手洗いの様子をチェックシートを用いて、観察して記録する。平・甲・指間・指先・母指・手首のこすり合わせ、すすぎ、乾燥に分けてそれぞれ 3 段階で評価した。

#### 5) 手洗い教室に関するアンケート調査

研究協力者に手洗い教室終了後に手洗いに対する意識の変化や、手洗い教室についての感想をアンケートにより調査した。

### 【現在の進捗状況】

指導用パワーポイント「感染予防のための手洗い」とポスター「効果的な手洗い方法」を作成し、12 月から生涯学習センター受講生へ研究協力の依頼をはじめ、1 月に 8 名、2 月に 11 名を対象に手洗い教室を開催した。3 月現在、収集したデータを整理、分析中である。

## 活動報告 No. 3

### 地域資源を活用したまちづくりモデル構築のために基礎的研究 —歴史文化遺産としての民俗文化財の発掘—

研究代表 : 大江 篤

共同研究員 : 久禮旦雄、久留島元

#### 【研究目的】

尼崎市のシティプロモーション指針に、尼崎市は「①実態と違うイメージを持たれている。②まちの魅力が十分に伝わっていない。③地域の個性（エリアごとの特徴）が魅力に結びついていない。④子育てファミリー世帯の転出超過の原因と考えられる治安や教育の問題。」の4つの課題があげられている。

この課題を解決し、魅力あるまちづくりを推進していくために、地域の資源としての歴史文化遺産を発掘し、地域住民の手で活用できるように基礎的なデータを収集するとともに、まち歩きやボランティアの人材育成等の企画を行う。

#### 【研究計画】

今年度は、研究期間が限られていたため、これまで「杭瀬なび」「杭瀬なび・街あるき編」を作成した実績をふまえて、小田地区（杭瀬小学校区）における「残念さん」と全国的に有名な怪談「播州皿屋敷」の類話であるお菊伝承の史料調査を実施した。

また、尼崎市域の伝説に関するこれまでの文献資料を収集したうえで、活用できる地域資源のデータベースを目的とした資料収集の基礎的な研究をすすめた。

#### 【研究成果】

##### ① 崎市の伝説データベース

尼崎市域に伝わる伝説・民話など「フシギな話」が一覧できるデータベースの草稿を作成した（本書P.4）。尼崎市では、従来から伝説をまとめた資料が作成されてきた。なかでも、尼崎郷土史研究会会報『みちしるべ』33号・34号「特集 尼崎の伝説」や尼崎市立北

図書館編『尼崎の伝説』などがまとまったものがある。これらの資料を基礎に、他の文献を渉猟し、一覧できるよう整理した。

##### ② 浄光寺縁起（尼崎市常光寺3丁目）

この縁起に関して、かつて調査を実施した尼崎市文化財収蔵庫において資料確認を行った。次年度の年報で史料紹介ができるよう再調査を検討することとなった。

##### ③ 残念さん（尼崎市杭瀬南町）

残念さんと呼ばれる長州藩士山本文之助の文献を山口県公文書館で調査するとともに、現地踏査を実施した。

##### ④ 松原神社（尼崎市浜田町）

松原神社のダンゴノボーという神事について、氏子がまとめた冊子と関連文書の調査を実施した。行事の参与観察は大学行事と重なり、実施できなかった。

##### ⑤ 深正院（尼崎市大物町）

皿屋敷伝承の研究動向を調査するとともに、深正院での井戸の現地調査、尼崎のお菊伝承のなかでも古い文献である「銀の筭」（早稲田大学図書館）を検討した。同史料については、尼崎郷土史研究会による翻刻があり、本年報で紹介し、解題を付することができた。

#### 【今後の課題】

地域資源として活用できる伝説100話を「尼崎百物語（仮）」として選び、典拠史料の検討、現地調査の結果など研究成果をふまえて、刊行することを目指す。また、杭瀬小学校区をモデルに活用事例の企画を計画する予定である。

## 活動報告 No. 4

### 地域と大学の連携・協働による子ども・子育て支援者の課題解決 — 尼崎市における子ども・子育て支援の実態を踏まえて —

研究代表 : 竹元恵子

共同研究員 : 新井香奈子、藤澤政美、根本順子、  
影浦紀子、黒岩志紀

#### 【取り組みの背景と動機】

日本で出生数の低下がクローズアップされた平成元年（1989年）以降、国は少子化を食い止めるための様々な施策を提示してきた。国の「子ども・子育てビジョン」では、社会全体で子育てを支えることを実現するために、目指すべき社会への政策4本柱と12の主要施策が、数値目標とともに明らかにされた。その中に、「地域の子育て力の向上」も含まれ、保育所等での地域子育て支援センター事業やつどいの広場での子育て支援活動の場の増加が望まれている。

尼崎市ではひとり親世帯が増加傾向にあり、親となる人々もそのような家庭で育ち、自らが親となるまでに多世代との交流経験を多く持つ人が減少している。そして、そのことが1つの要因となり、子育てに対する不安や親役割に迷う状況も目立っている。そのような親を支え、子どもが地域で健やかに育っていくためには、子育て支援は欠くことのできない取り組みといえる。しかし、親自身の背景や生活の多様化に伴い、子育て支援に対する要望も多様となってきた。そのような多様な要望を踏まえた支援の実現のために、支援する側のスキルアップのための学びは欠かすことができない。そこで、今回の取り組みでは、子どもの育ちや健康に関する専門性を有する大学教員が、尼崎市内の子育て支援にかかわる方々と連携・協働することで、支援する側の学びに何らかの寄与ができないかと考えた。

なぜなら、子育てに悩む親にとって、身近で相談できる子育て支援スタッフが、親の様々な要望を踏まえた質の高いアドバイスや取り組みを実践できることは、親世代（あるいは育児を担う祖父母世代）にとっては、地域の中で安心して子育てをすることにつながり、子どもにとっても良好な親子関係、家族関係の中で、健やかに生き生きと成長していく（次世代親としての成長も含め）ことを可能にする。またこれらの実践を行う施設で実習やボランティア活動を行う学生にとっても、次世代の親としての学びとともに、支援する専門職者としてのロールモデルを学ぶ機会になるのではないかと考える。

#### 【今年度の成果と今後の取り組み】

子育ての当事者、市内の支援者、大学教員、学生が双方向的に子育てに関する情報や課題を共有し、解決に向けての連携・協働実践を行っていくために、大学HP上に「園女☆子育てナビ」というサイトを立ち上げた。今後はこのサイトを活用して、大学内での子育て支援情報、研修情報、教員や学生のボランティア情報などを発信していく。研修では各教科教員の協力を得て学内あるいは要望のある場所での開催を実現していく。また、学外の専門家による研修情報も発信していく。そして、参加者にその効果を調査し取り組みの成果を検証する。

## 「高齢者がその人らしく安心して暮らせる尼崎づくり」

### 一高齢者がこれまでの経験と生涯学習の成果を地域で生かすための検討一

研究代表 : 中村陽子

共同研究員 : 林谷啓美、福井恭子、  
升田寿賀子、柴田りさ

#### 【はじめに】

高齢化に伴い、日本の人口の年齢構成や世帯類型の構成は大きく変化し、高齢者の生活様式や考え方、価値観は多様化している。新たな価値観を持った高齢者が尊厳を持ちながら、安心して多様な暮らし方ができる地域社会のあり方が問われている。

尼崎市総合計画には「高齢者が地域で安心して暮らせるまち」づくりがあげられ、「高齢者の豊かな知識・経験・能力が地域福祉の向上に大きな役割を担えるよう、社会参加の機会を提供し、ふれあいと生きがいのある地域社会の形成に努める。」ことが施策として取り組まれている。

園田学園女子大学は30年以上にわたりシニア層向けに大学を開放し、生涯教育を推進してきた歴史がある。

本研究の目的は園田学園女子大学生涯教育センターにおけるシニア専修コースで学ぶ高齢者を対象に、高齢者がこれまでの経験と生涯学習の成果を地域で生かす具体的な活動について検討することである。

#### 【園田学園女子大学生涯学習シニア専修コースについて】

シニア専修コースは、①生涯学習の機会の提供②学習が個人の成長になる③社会に貢献する人材の育成を目的としている。

平成25年度シニア専修コース受講者は328名で年々増加傾向にある。女性161名(49%)、男性167名(51%)で男女の割合はほぼ同じである。高齢者は286名(87%)である。受講者で最も多い年代は65歳から74歳の前期高齢

者162名(57%)である。後期高齢者が92名(32%)で、80歳以上が44名(13%)である。居住地は尼崎市が80名(24%)それ以外が248名(76%)であり、市外からの受講者が多い。

#### 【生涯学習の現状と課題】

##### ①学生との交流のありかた

シニア専修コースで学ぶ高齢者は学生との交流を希望している。大学内での高齢者の存在意義について可視化する。

##### ②自己実現型が多い

ボランティア、地域活動に熱心な層とはやや異なる。「福祉」というコースは人気がない。

#### 【経験と生涯学習成果を地域で生かす方策】

##### ①学生との相互交流

シニア専修コース高齢者の社会経験は学生にとっても有効な資源となる。相互交流を通して、高齢者の学び続けようとする姿勢や人生観、これまで生きてきた時代を認識し地域、尼崎の現状を考える機会にするため教育現場に今までの経験を伝えるプログラムとして、人間看護学科高齢者看護関係の授業への参加、協力等交流の機会を持つ。

##### ②生涯学習の成果を地域で生かす

ボランティア、まちの支援員(尼崎市学校地域支援本部事業の一環)として地域のニーズを受け止め、社会に貢献する人材として地域福祉の向上に貢献するためには、シニア専修コース高齢者に今後どのような学習や援助が必要であるかの調査の継続が必要である。

#### 【参考文献】

堀 薫夫(2012)「教育老年学と高齢者学習」学文社

## 地域と取り組む防災教育

研究代表 : 野呂千鶴子

共同研究員 : 及川裕子、大江 篤、山本起世子  
宮田さおり、中世古恵美、升田寿賀子

### 【はじめに】

東日本大震災以降、頻発する地震から、南海トラフ大地震の懸念に発展し、防災システムの構築は必須であるといえる。防災システムの構築にあたり、東日本大震災から得た教訓のひとつは、防波堤など人間の作るものには限界があり、瞬時の人の判断や避難行動が大切であるということである。片田(2011)は、行政による防災対策などが充実すると人々の災害に対する意識が減退することを指摘し、防災教育による社会対応力の強化が必要であると述べている。

尼崎市は人口約45万人の中核都市の指定を受けた都市であり、平成24年の高齢化率は23.4%とほぼ全国平均と同様であり高齢化が進展している。1995年の阪神淡路大震災時の被害は、死者50名弱、負傷者約1000名、家屋の損壊は全壊11000戸、半壊約5万戸であった。近い将来の発生が予測される南海トラフ地震時には、尼崎市の津波予想は3.8mであり、津波よりも家屋倒壊による被害のほうが大きいことが推測される。

今後起こり得る巨大地震等への備えとして、個人、地域の防災力を強化することは必須である。超高齢社会の現代において、大学生は災害時避難誘導等活動できる資源である。矢守ら(2007)は、防災力を高めるには「人間力」「生活力」「市民力」の3つの力の養成が必要であると述べており、大学における防災教育はこれら3つの力を高めることを目的とし、学生を含めた地域の防災力を高めていくこと必要がある。

### 【目的】

地域における防災活動の実際と課題および本学学生の防災意識の実態を把握し、地域と大学が連携した防災活動の試みを通じて、地域防災力を高めていくことを目的とする。さらに大学と地域が連携し地域防災力を高めるための教育プログラム・体制づくりを行う。

### 【平成25年度活動】

以下の活動を通じて、尼崎の地域の特性を生か

し、地域の防災力を高めるためには学生とともに何ができるかを模索した。

#### 1. 尼崎市の地域特性の把握

既存の資料から市の概要を捉えたうえで、杭瀬・大庄地区のフィールドワークを行った。

#### 2. 行政・民間の防災の取り組みの把握

市および社会福祉協議会の取り組みについて、関係者から情報を得た。

#### 3. 地域防災活動の把握

杭瀬小学校を中心とした地区防災の取り組みおよび大庄地区の「防災カフェ」の取り組みについて、関係者からヒアリングし、意見交換を行った。また、市主催の「地域防災力向上講座」では3地区の活動に参加し、まち歩きと防災マップ作成といった地区防災教育の実際を体験した。

### 【考察・今後の課題】

25年度はフィールドワークを中心に地域における防災力を高めるための活動把握を行った。その結果、地域住民の防災力を高める活動は、定期的に行うことにより、住民の防災意識を高め、自助、共助の力を高めていると考える。

26~27年度は、災害時の資源となり得る本学学生・教職員が防災力を高めるために必要な教育・体制は何かについて、以下のように具体的な検討を行っていく予定である。

1. 各地域での防災活動に参加し、NPO・各地区防災組織キーパーソンとの交流を深める中で、本学学生および教職員の防災活動のあり方を模索する。

2. 他大学の防災教育について情報収集する。

3. 本学防災教育・学生の防災および災害時ボランティア活動のあり方を提言する。

### 【文献】

片田敏孝：WEDGE REPORT「小中学生の生存率 99.8%は奇跡じゃない「想定外」を生き抜く力」、2011年04月22日(Fri)

矢守克也、諏訪清二、船木伸江：夢みる防災教育、3-24、晃洋書房、2007

矢守克也：防災人間科学、213-229、東京大学出版会、2009

## 活動報告 No. 7

### 健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について

研究代表：餅美知子

共同研究者：松葉真、片山麻衣、竹本尚未  
中谷梢、宮本恵里

#### 【はじめに】

「食の健康」の実現には、各家庭での取り組みだけでなく、外食・中食産業も含めた食の環境整備が重要である。兵庫県ではその一環として、「食の健康」に取り組んでいる店舗を対象に“食の健康協力店”としての参加登録を募っており、平成23年3月末現在、県内では約6,400店舗尼崎市内では約240店舗の登録を得ている。しかし現状では、“食の健康協力店”の活用度は十分ではなく、一般市民への認知度も低いいため、今後一層の普及を検討するにあたり、まずは尼崎市内の協力店舗を対象に、“食の健康協力店”の現状の取組内容を把握することを目的として、本調査を行うものである。

#### 【対象・期間・方法】

対象店舗およびアンケート回収率は240店舗中、120店舗で回収率の高いのは「個人店舗」で、低いのは「チェーン店」であった。

期間は、平成25年11月～平成26年1月に実施した。方法は、食の健康協力店に対して取組内容についてのアンケートを作成し、郵送し後日回収した。

#### 【結果】アンケートから考えられること

現状調査から“食の健康協力店”の取組みとしてどの施策が浸透しているのかが明確になった。健康施策の大目標である禁煙は、54%の店で終日禁煙の実施をしており、メニューの栄養成分表示は25.8%であった。

勧める食へのアプローチでは、野菜や大豆製品等の日本食由来のメニューを勧めており、逆に控える食へのアプローチでは、エネルギーや塩分等と回答した割合が上位を占めた。

営業形態別に“食の健康協力店”の取組みをみると、スーパーやコンビニは、店内終日禁煙、カロリーを控えた料理の提供やメニュー

の栄養成分表示の割合が高く、個人やチェーン飲食店では、オーダー時に主食の量や野菜を多く、塩分控えめのサービスがなされていた。

“食の健康協力店”の今後の取り組みたい項目についての調査の比較を行ったが、今までの取組みに低値を示したスーパーやコンビニが「ひょうご“食の健康”運動」のPRに興味を示しはじめた。営業形態別ステッカー・タペストリーの貼っている割合は、個人やチェーンの飲食店、スーパー、コンビニの順であり、個人の裁量で対応できることが高値に繋がった。営業形態別ステッカー・タペストリーの貼っていない割合が、コンビニ、スーパー、チェーンの飲食店の順に高くなり、その理由としては、店側の認知不足であった。

#### 【考察】

今回の調査で、食の健康協力店の取組みは多岐にわたっており、営業形態は違うものの、スーパー・コンビニ・飲食店のチェーン店や個人の店等、各々の店が、対応出来ることが明確になれば、利用者がこの情報を受け取り上手に活用すれば、自らの健康増進につながる。

今回、ひょうご食の健康運動の一環である食の健康協力店に対して、現状調査のアンケートを送付したこともあり、ひょうご食の健康運動のPR活動の促進の意見が目立ったことは、働きかけとしては良いタイミングであったのではないだろうか。

新たな取組みを考えている店舗にはつながりプロジェクトの授業などで作成したポスターなどの媒体を用いて栄養・食事アドバイスをを行うことが本学の食物栄養科の使命だと考える。次年度は、“食の健康協力店”を活用している方へのアプローチを行いたい。

## 活動報告 No. 8

### 庄下川の河川環境を利用した児童生徒のための親水プログラムの構築実施

研究代表 : 衣笠治子

共同研究員 : 山本起世子、近藤照敏、足立学、  
中井豊、小林裕子、赤井クリ子

#### 【はじめに】

我々は、2008年から尼崎市庄下川の中流域で、水質検査や清掃活動、ニューズレターを配布するなどの活動を通じて親水性向上に取り組んできた。また、河川環境での健康増進プログラム（中高年対象）や、季節を見つけるプログラム（幼児対象）を企画し、ボランティアで参加してくれる大学生リーダーを募り実施してきた。

学校における河川学習プログラムは、環境教育や水難事故防止などさまざまなニーズがあると思われるが、実際の教育現場では科目の学習目標に沿ったプログラムが望まれ、一方的なプログラムの提供では、利用が困難であることが多い。本研究では、庄下川近隣の小学校と連携し、2年生の生活科のカリキュラム、町たんけんの一部として、河川教育プログラムを考案実施した。

#### 【プログラム実施要領】

尼崎市庄下川近隣の小学校2年生3クラス75名を対象に、学生が50分間のプログラムを考案した。準備実施にあたっては、小学校側の授業目的にあうように担任グループと綿密に連絡をとりあった。

準備：プログラム中に持ち歩く生き物ファイル、児童用のワークシート、参加賞の「しょうげがわはかせ」メダル、名札シールを作成した。当日にプログラムを実行してもらう大学生ボランティアリーダーを募り22名が参加してくれた。リーダーたちの勉強会は3回実施し、プログラムの目的、実際のコースやタイムテーブルの確認、植物遊びの練習などを行うと共に、意見を求めながら準備や計画の調整も行った。

実施：それぞれの児童グループに大学生リーダーを配置し、進行係、補助係、小学校担任、大学教職員が参加し2013年10月に実施した。遊歩道を歩きながら、生き物を探し、ワークシートに発見シールを貼った。グループごとに植物遊びも取

り入れた。プログラム終了後、児童には、感想の作文を、大学生リーダーにはアンケートを課した。

#### 【実施後の大学生リーダーアンケートと児童の作文】

大学生リーダーにプログラム中に感じた児童の様子をたずねたところ、「表情が豊かであった」、「興奮していた」、「児童たちが楽しいという言葉が発していた」、「積極的に見つけようとして取り組んでいた」などを挙げていた。リーダー自身もとても楽しんだという回答が多かった。また児童たちの質問に答えられず、自分自身の勉強不足との反省の回答もあった。「子どもたちの気づきの力がすごいと感じた」、「小学校の先生方と一緒に活動し、児童たちへの声かけの手法が勉強になった」という意見も得られた。

参加児童は、庄下川周辺に住んでおり、家族や友だちと川を訪れたことはあった様子だが、作文には、「〇〇は知らなかった」、「〇〇にびっくりした」、という記述が多くみられた。植物遊びは、「ツユクサの花を潰して青色が出てきてびっくりした」、「アカマンマは赤いお米みたいな粒がついていてバラバラになる」、「オシロイバナの種を潰すと白い粉がでてくる」などが記述されていた。また、作文とともに描いてある絵もよく観察されていた。ゴミに関する記述も多くみられた。

#### 【まとめと展望】

学生自身が教育機関で求められるニーズに向き合い、プログラム企画や実施をしていく過程で多くを学び、それを学業にフィードバックしようとしている姿勢がみられた。実習等、学外で学ぶ機会はあるが、学校教育の現場で責任をもって関わられることは、学生にとって大きな教育効果があると考えられる。今後はこの内容をモデルケースとし、季節ごとのプログラムや、理科教育、環境教育のプログラム考案に発展させていきたい。

## 尼崎市に住む高齢者のための運動交流プロジェクト開発と実践

研究代表：林谷啓美

共同研究員：藤澤政美、柴田りさ、河原ゆず

### 【はじめに】

尼崎市は、日本の人口と同様に高齢者・後期高齢者が増加傾向にあり、団塊の世代が65歳に達する平成26年(2014年)には、高齢化率が25.6%、平成37年(2025年)においては29.6%という超高齢社会となる<sup>1)</sup>。さらに、単独世帯が多く<sup>2)</sup>、その世帯においては、地域との関わりが希薄になりがちであり、健康の保持や生活に関するサポート等が課題である。また、現在、日本の高齢者においてはサルコペニア(骨格筋減少症)が問題となっている。それにより、身体能力が低下し、日常生活の範囲が縮小される。また、転倒しやすく、骨折すると寝たきりになることが多く、認知症が悪化する可能性もある。そのような状況にならないように、高齢者が現在の身体能力を維持し、疾患や障害をもちながらも健康に過ごすことが重要である。以上のことから誰もが簡単に取り組むことができ、コミュニティのきっかけにもなる運動プログラムを積極的に取り入れる必要がある。同時に、「食」に対する意識の向上も重要である。

本研究の目的は、尼崎市における高齢者のためのオリジナル音楽・運動を考案し、それを普及することにより尼崎市の高齢者の筋力向上とコミュニティの拡大を目指すことにある。また、高齢者の食に対する意識の向上も図る。それら高齢者と当大学学生との交流の機会とし、街の活性化につなげていく。

### 【1. 教育研究計画】

- 1) 対象：尼崎市に住む65歳以上の要介護認定を受けていない高齢者(以下、A市に住む高齢者と称す)
- 2) 平成25年度の計画
  - (1) A市に住む高齢者の音楽に関する調査
- 3) 平成26年度の計画
  - (1) 平成25年度の調査をもとに作詞・作曲、レコーディングを行い、CDを作成する。
  - (2) A市に住む高齢者に適した筋力向上に関する運動を考案する。

- (3) 音楽と運動を7月に完成させ、社会福祉協議会と連携をとりながら、モデル地区において実施する。

- (4) 平成26年度の当大学学園祭、地域のイベント等にて音楽・運動を披露する。

- (5) A市に住む高齢者の体力・身体測定、健康相談を実施する。

- (6) 食に対する意識を明らかにし、その向上プログラムを作成・実践する。

### 4) 平成27年度

- (1) 運動、体力・身体測定、健康相談、食に関するプログラムを実施する。

- (2) 体力・身体測定の数値や高齢者の感想などをもとに音楽、運動について検討する。

- (3) モデル地域を拡大する。

- (4) DVDを作成する。

### 【2. 平成25年度の進捗状況】

- 1) 研究者間での打ち合わせ

- 2) 尼崎市健康福祉局高齢介護課、社団法人社会福祉協議会との打ち合わせ

- 3) 作詞・作曲の打ち合わせ

- 4) A市に住む高齢者の音楽に関する調査の関係書類作成・生命倫理委員会への提出

- 5) 平成25年度に予定していたA市に住む高齢者の音楽に関する調査は、平成26年4月、当大学生命倫理委員会での承認を得た後、社団法人社会福祉協議会の協力を得て実施する。

### 【おわりに】

平成25年度は、研究者間での打ち合わせが主であった。平成26年度は調査・実践が本格始動する。関係機関と協働・連携しながら少しでも尼崎市に貢献していきたいと考える。

### 【引用文献】

- 1) 第5期(平成24年度～平成26年度)高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画、[http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/dbps\\_data/\\_material/\\_localhost/sosiki/044/download/plan-hyousi](http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/dbps_data/_material/_localhost/sosiki/044/download/plan-hyousi).
- 2) 尼崎市企画財政局政策部：尼崎総合計画，85-86，2013.

**「女子野球」**

**Zelkove**

私が軟式野球部ということを知っていた先生からお話をいただいて参加しようと思ったのがきっかけです。

コンソーシアムの課題の1つとして女子野球があり、部員や家族などにも相談して取り組みました。発表直前に緊張が高まりましたが、部員がなだめてくれたりと野球部の仲間の大切さを実感しました。その結果、部門賞をいただくことができました。

賞をいただくことで日本女子プロ野球機構との繋がりを持つことができました。

実際に今年の2月に園田学園女子大学のグラウンドの方にディオーネの選手2名がわざわざ足を運んできてくださいました。その時には私たち野球部は賞の副賞としていただいたディオーネのユニフォームを着て出迎えることができました。全員が同じユニフォームということもありとても楽しかったです。プロの選手に打ってもらうノックはとても緊張しましたが、いつもと違う刺激があり少し成長したかと思います。これからも女子プロ野球選手の方と交流をしていきたいと思っています。

(人間教育学部児童教育学科3年 長谷川綾子)



**「安心・安全・元気！！**

**子どもが自慢できる街～杭瀬～」**

**ポップdeコーン**

4人グループ、ポップ de コーンは数々の活動に参加してきましたが、中でも印象的だった活動は、杭瀬の街歩きボランティアに参加したことで生まれた課題を、学生プロジェクトコンペという大きな場で発表することができたことです。なぜなら、街歩きをしていなかったら杭瀬の街に目を向けることがなかったし、コンペに参加していなかったら杭瀬の街を多くの方々に知ってもらいたいという地域に対する思いも持つことができなかったからです。また、コンペのプレゼン作成資料のために訪れた杭瀬小学校で子どもたちにインタビューをするだけでなく、子どもたちと会話することもできました。

今までの活動を通して教員を目指している私たち4人は地域のことでなく、子どもたちの様子も知ることもできすごく勉強になりました。

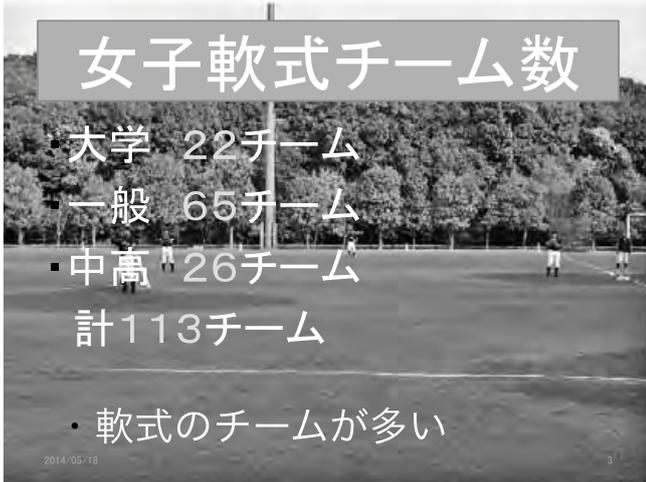
(人間教育学部児童教育学科2年 山崎萌生)





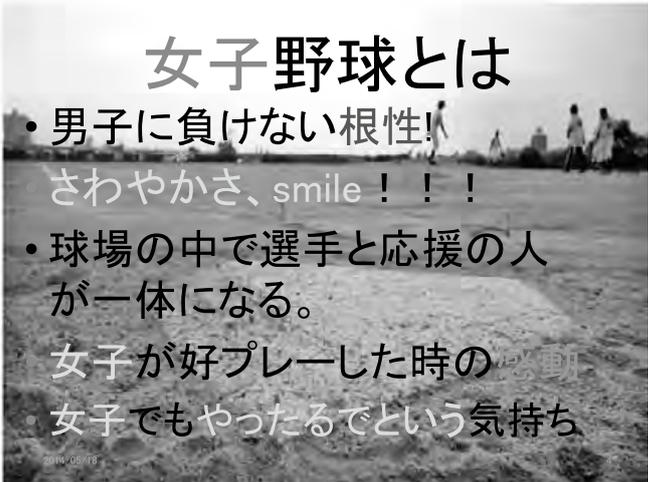
## 女子野球の現状

- 球場に見に来る人は減っている。
- しかし、実際にプレーする人は増えている。
- なので女子野球から離れているわけではない！！



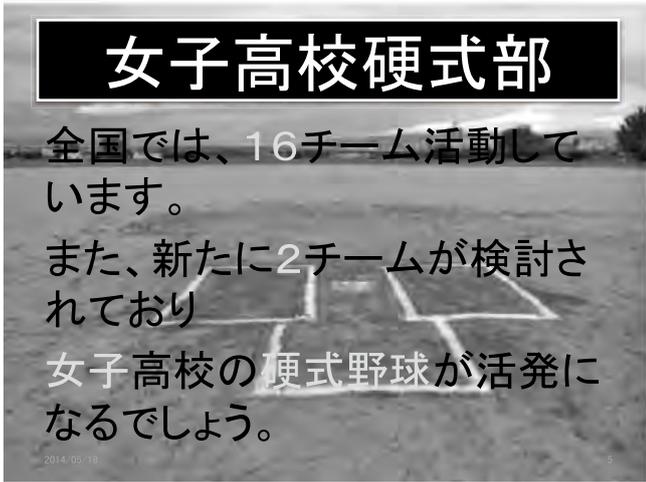
## 女子軟式チーム数

- 大学 22チーム
- 一般 65チーム
- 中高 26チーム
- 計113チーム
- 軟式のチームが多い



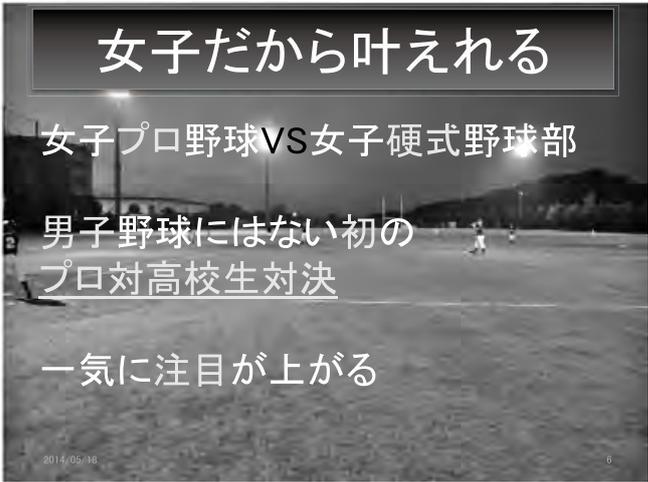
## 女子野球とは

- 男子に負けない根性!
- さわやかさ、smile!!!
- 球場の中で選手と応援の人が一体になる。
- 女子が好プレーした時の感動
- 女子でもやったるぞという気持ち



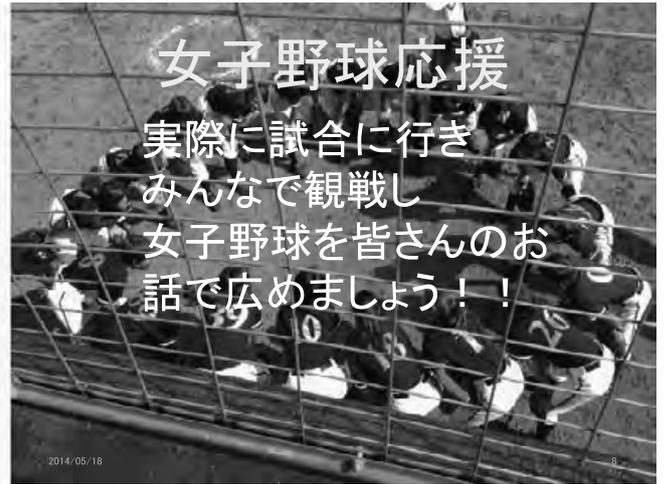
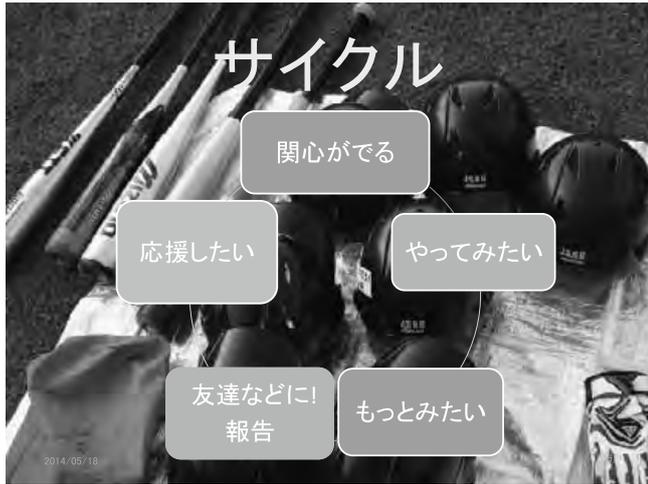
## 女子高校硬式部

全国では、16チーム活動しています。  
 また、新たに2チームが検討されており  
 女子高校の硬式野球が活発になるでしょう。



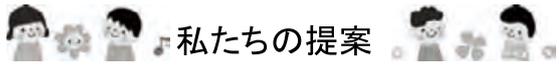
## 女子だから叶えられる

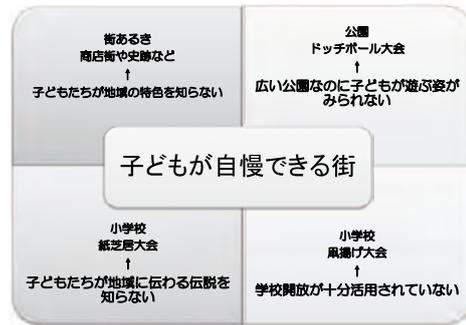
女子プロ野球VS女子硬式野球部  
 男子野球にはない初の  
 プロ対高校生対決  
 一気に注目が上がる



安心・安全・元気！！  
子どもが自慢できる街～杭瀬～

ポップdeコーン   
園田学園女子大学  
人間教育学部 児童教育学科  
松原 礼奈★森 彩香★山崎 萌生★山下 祥子

私たちの提案 



杭瀬の場所

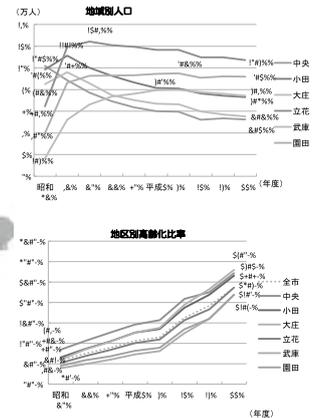


尼崎の課題①

人口は減っている  
しかし、  
高齢化率は年々増加



少子高齢化が進み、  
人口が減少



とある公園の様子

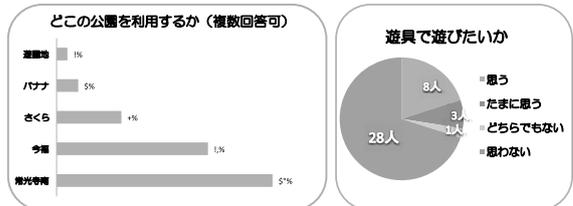
子どもがちらほら



公園の落書き



小学生へのアンケート



資源が活かされていない！

尼崎の課題②

街のイメージが悪化している！



Web版 図説 尼崎の歴史より

- 高度経済成長期の公害被害
- 2005年4月：「JR福知山線脱線事故」
- 工場が閉鎖している
- 2012年：「尼崎連続変死事件＝尼崎事件」
- 下町でガラが悪い

＜解決案＞

- 小学校区内にある公園を活用し、子どもたちが安全に生き生きと遊べる行事を企画する
- PTAや子ども会が中心となり、大学生はボランティアとして企画、参加
- 子どもたちが安心して遊べる場を作るとともに、遊びを通して自慢できる街づくり



\*子どもたちの要望\*

- ジェットコースター
- 大きいブランコ
- てっかいジャングルジム
- ローラー付きの滑り台
- トレーニング
- ブランコ
- どんぐり山に滑り台
- 珍しい遊具
- トランポリン
- 回るやつ
- タイヤのブランコ
- スリルあるやつ
- 宇宙船
- でかい滑り台
- Waterスライダー
- スリルある滑り台
- アスレチック
- てつぼう
- 遊園地公園の止まった遊具動いてほしい

遊びたくなる遊具

新しい遊具づくり



イベントの企画、提案



大学生が地域の資源を調査し、紙芝居や人形劇にして子どもたちに街の自慢を伝える

↓  
子どもたちが生き生きと暮らす街

↓  
子育て世代の人口が増加する街

子どもたちが自慢できる街「杭瀬」へ！





園田学園女子大学 平成 25 年度「地(知)の拠点整備事業」キックオフシンポジウム

〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム



大学COC事業で大学に望むこと

・期待すること

松坂浩史 (文部科学省大学改革推進室前室長)

松坂 皆さま、こんにちは。

ただいま、ご紹介いただきましたとおり文部科学省の大学改革推進室という所に今年の10月までおりました、この事業の企画から第一次の採択まで担当して、今は総務課という所で国会関係の仕事をしていて、なかなか外に出る機会がないので、今日はいいい機会をいただきました。本日はキックオフシンポジウムということで、大変お天気も良く気持ちいい日だと思います。おめでとうございます。

このCOC事業ですけれども、先ほど稲村市長からのお話にあった、地域に出ていってみると、もっと役に立てないか、自分ができなかったことというのを感じてほしいというお話がありましたけど、私も本当にそう思っています。何年か前に大学の社会貢献というのが、学校教育法や教育基本法でも書かれる形で進めていたんですが、どうも大学から地域に出て行って、教えてやる、っていうと変ですけれども、上から目線という感じが結構あったというふうに思います。

私、前に金沢大学に勤務しておったのですが、そのときにも学生を連れて町に出て行って、というのはあったんです。結果的には、商店街の活性化とかに行くんですけど、ほとんど役に立たないアイデアを思いつきで言って、地域の人からも失笑されるっていうことが繰り返されました。大学生、まだ18歳、20歳ぐらい。なかなか経験もないし、社会がよくわからない中で、できることがすごく少ないんだ。だから勉強しなければいけない

だと。地域での課題を拾って、それを大学に持ってきて、先生にぶつけて、なぜ私がこんな非力なんだろう、何で私をもっと役に立つことができないんだろう、ということを大学の中に持ち帰ってもら。そんな機会になったらいいというふうに思っています。

こんな事業を文部省でも始めた理由というか背景なんですけども。もともと、大学というのと地域というのはすごく親しい関係があるはずだ、と私たちは思っています。中世のヨーロッパで大学には特権を街が与えて、その大学の自治的な組合として大学とか知識がある人たちの集団を保護していたと思うんですね。そういうのが互いに積み重なって、その過程の中でやっぱり地域の力が落ちれば大学がなくなる。地域、街の力が強くなれば、大学が集まる。そういうのがあります。古い大学ではボローニャ大学とかパリ大学とかいろいろありますけど、ボローニャ大学も一時、ほとんど学生が1桁という時代もあって、それは街と街の戦いで負けてしまって、ほぼ離散してしまった。ただ、そこからまた続いているということがあります。地域と大学って、本当は近い関係だったと思っています。

日本でも、旧制高校や旧制大学があった時代には、地域と大学は近かったと思います。先ほど申し上げたように私は金沢にいたんですけど、金沢には旧制第四高等学校があって、井上靖は旧制第四高等学校出身なわけですが、その頃の『北の海』という小説には街の中で騒ぎまくった、そういうような思い出を自伝的に書いています。

たいへん迷惑な連中だったと思うんですけども、やっぱり暖かく街も迎えていたし、街もどんどん大学や旧制高校を誘致しようと

していたと思います。神戸大学も、もともとほとんど神戸市という街がお金を出して大学を、高等商業学校を作った。そういうような地域と大学の近しい関係、幸せな関係というのがあったのではないかな、と思います。

だんだん最近になって、最近というか、ずっと時代が経るに従って、学生も地域に埋没していきますし、大学もむしろ外に向かって、地域から離れて。たまたまここにある、あまり関係ないという、そういう意識がどんどん強くなっている。特に研究での競争が激しくなっている時代には、そういう傾向が強くなってきていて、日本にはいっぱい大学がありますので、いろんな大学が全部そういう意識を持ってもらってはまずいんじゃないか。というようなことで、この事業を考えるようになってきました。

今回こちらのCOC事業、文部科学省の事業の中では売れ行きがいいやつと売れ行きがあまり良くないのがあるんですが、今回は全体で350大学近い大学から申請をいただきました。その中で50あまり取ったので、7倍近い倍率を勝ち抜いて採択ということでは、全国から寄せられた中でも、特に充実した取り組みがあるということで評価を受けたのではないかなというふうに思っています。

特に兵庫県の中には、こちらも含めて3カ所の大学が採択されました。1県3カ所というのはかなり多いというふうに、大学の数から見ても多いと思います。いろいろ歴史のある街が、それぞれ地域、大学の連携がずっとされていた結果だというふうに思っています。

とりわけ、こちらの大学の申請書の中で重点的に挙げられておりましたのは、先ほどご紹介がありました経験値教育だろうと思います。学生の方が、地域の中で経験を重ねていくことで、地域の役に立つ人材になっていく。そういうことを目指す。そういうものを単に資格とか、それから能力という点で力を付け

ていくだけではなくて、地域の中にそういうものを挙げられていたというふうに思います。

特に、この医療や福祉、その他、資格を目指す大学だというふうに申請書から読み取っています。数多くの大学が、そういう大学からの申請の中で、こちらの大学にはそういう意味でのリーディングケース、モデルケースになっていただきたいという思いが強くございます。資格の勉強をするとどうしても、資格の中で決まっているので、この勉強をしたい。この勉強をしよう。と思って学校に入ってくるし、教えるほうも資格が取れなかったらどうにもならないので、資格の勉強を第一にする。その他のことはまあ、二の次にしてしまうようなケースもある。それではやっぱり大学としては、私たちとしてはもったいないというふうに思います。

先ほど、このシンポジウムが始まるちょっと前のお話の中で、大学というものの、教養の大事さというお話をお伺いしました。やっぱり、大学に在る間はあまり感じない。資格試験が目の前にあると、ついその資格試験のことで勉強してしまいますけれど、本当は出てからは、教養が展開していく。大学の中で学ぶ資格は、なければいけない。それはいらないとは申し上げるつもりはない。必ずやらなければならないことと、それ以外のこと、これがかけ算するような形で豊かな社会人生活になる、というふうに感じています。そういう機会を大学の先生には提供していただいて、地域の人には、先生方や学生さんから協力が、お求めがあると思いますので、温かく、かつ厳しく、できないときにはできないということをごきちんと言ってもらいたい。お客さんとしてではなくて、未来、3年後、5年後には地域の仲間になる人たちだと思いますので、そういう温かい目で見てもらいたいというふうに思っています。甘いことを言っても、育つ機会が失われちゃいますので、もっと勉強

してほしい。もっといろんなことができるようになってほしいということのをうまく伝えてほしいというふうに思います。

尼崎の街、ちょっと素通りというか、私はじめて降りたんですが、ちょっと見ていると、近松門左衛門に非常にゆかりのある街だというふうに聞いています。私、昨日東京で歌舞伎を見に行ったんですけども、近松門左衛門といえば、東洋のシェイクスピアですし、諸外国からすれば、大文豪です。せつかく尼崎に居ながら、近松門左衛門のお墓参りもせず、それから作品も読まず、歌舞伎も見ずに出ていっちゃうということがないようにしてもらえるといいなと思います。プログラムの中にも、いくつも地域型の学習というのを拝見してるんですけども。私が見る限りでは、芸能の関係は一つしかなかった。一つでも充分かもしれませんが、やっぱりそういうものを学生さんには、持ってもらおうというふうに考えています。

地域との関係ということ言えば、私、いろんな所に行っているんですが、三重県の教育委員会で仕事しておりまして、子どもたちの福祉体験。社会福祉体験、介護体験、そんな仕事をやらせていただきました。その中で、子どもたちが地域に行ってお年寄りの介護を、2、3日ですが、するんです。そのときに、子どもたちに必ず伝えてほしいことというのは、やっぱり人間として、当たり前なんですけど、人間として付き合ってもらいたい。お客さんじゃないんです。地域でずっと育ってきた方たち、自分も地域の人間なので。そこに重なりがきっとあるはずだと。お年寄りの方からは、自分が出た学校と同じ学校の後輩、70年、80年の後輩に出会えて本当に良かったという声を聞きました。子どものほうもすごく良かったし、おばあちゃんおじいちゃんのほうも、いやいやかどうかは知りませんが、取りあえず授業の一環として来たんだらうぐらいな感

じだったんですが。同じ学校だというだけで、気持ちがすごく伝わって、同じ小学校のことだとか、こういう大きな災害があったとか、そういう話を聞くと、ほとんど接点がなかった2人の間に先輩後輩という関係ができて、そういうものは子どもたちにとっても大きな感動になる。そういう話をしている中で、昔のことをよく知る。昔の地域のことを知って、その地域が共通点になって、サービスといえないのかもしれませんが、福祉のサービスのところも厚みが出てくる。そういうことをぜひ、こちらは社会福祉とかにも強い大学と聞いてますので、単なる技術ではなく、技術に加える部分というものを地域から受け取ってもらえるようになったらいいなというふうに思います。

この事業が目指すところは、地域を学ぶということですので、地域で学ぶ機会はいろいろあると思います。歴史もそうですし、文化もそうです。また、それから今申し上げたような実際に働く現場での重なり合いみたいなもの。そういうものを大学のほうでは意図的に、昔は漫然と伝わったかもしれませんが、学生文化があった時代、学内に文化があったときはいいんです。今は学生の学内滞在時間がすごく短くなっていて、授業以外で大学に居る時間がすごく短くなる傾向があります。学生と学生とのふれあいも、教室の中のことに、かなり収斂してくるという傾向がこれはもう全国的にいわれていることです。そういう中で大学が意識的に地域のほうに中に入ってもらって、そういうことを今回の予算で、5年間しかありませんので、皆さん、その間にできるだけ地域の人にも大学に入ってきてもらって、そういう流れを作ってもらいたいというふうに思っております。

今日持ってきている資料は私たちがよく使っているもので、人口が少なくなっていくって、大学の数が増えていますとか。社会貢献とい

うものが法律上明記されて、教育研究だけでは足りないんですよということが書いてあります。これから生産人口が減っていく中で、高齢者の人口が増えていく。将来は生産人口が半分になっちゃいますので、GDP が全体として半分になっちゃう。学生たちには倍稼いでもらわないといけない。これは、今回の事業がどういうことを考えてやっているかということで、ちょっと字が小さいですけど、ご覧いただければと思います。

というふうに教育研究社会貢献を、たてにして考える、地域とか社会貢献で、社会貢献の枠の中で地域を考えていくわけではなくて、研究の中でも、教育の中でも地域のことを考える。そういう大学を目指してもらいたいし、それを支援したいというふうに思っているところでもあります。

これは先ほど申し上げた、342 の申請に対して、56 の採択があったことを示すものです。採択大学一覧があって、こちらの大学が通ったということをご確認いただくというふうに。今年度もまた、やりますけれども。採択を行いますけれども、空白地がなくなるようにやりたいなというふうに思っています。

今回、事業の採択時に、こういうことをお願いしますということを、1 番目の所だけでも見ていただければと思うんですが。やっぱり全員に必修を進めてもらいたい。『つながりプロジェクト』が、やはり、尼崎で勉強したんだから、尼崎でそのあともずっといてもらおう。外から来る人もいるでしょうけど、一回入ったならばもうここから抜けられない。こんなに楽しい所、こんなに生活しやすい所はないというふうに思って、定着してもらって。それが街の強さになると思ってます。大学がある街ってこんなにいいんだということが、文部省としてもぜひそういうふうな気持ちになるべくしてもらいたいと。

私の前居た三重県で、松阪市という近くに

あった三重中京大学というのが実は撤退して解散してしまいました。それまで地域の人は、別になくてもいいと思ってたみたいな節があるんです。いざなくなってみると、1000 人の若者がそこから居なくなる。1000 人が最後には 500 名しか居なかったんですけど、それでも 500 人もの若い人が松阪という街から居なくなったときに、いまさらながら皆さんがビックリしていました。あんなに邪険にすることはなかったんじゃないか。地域で支えればよかったということ言ってました。ここはそういうことはないと思いますけれども、そういう地域の声というのはすごく大事にしたいというふうに思います。

こんなマークも作って普及をしています。大学には知も大事だけれども地も大事ということで作っています。これは京都工芸繊維大学の先生に作ってもらいました。これも地域プロジェクトの中で出しています。

雑駁なお話で恐縮でしたけれども、私たちとしては、大きな大学にも大きくない大学にも、研究水準の高い大学にも、研究というよりは人材育成に力を入れている大学にも、地域とのつながりの形があると思います。50 の大学、次は 20 大学になりますけれども、70、80 ぐらいの大学が皆、地域の中から支えてもらっている大学ということになったらいいというふうに思っております。

本日のシンポジウム、最後まで楽しみにしておりますので、どうぞよろしくお願ひします。ありがとうございました。

## 経験値教育－経験値評価システムについて－

大江篤（本学教授、地域連携推進機構副機構長）

大江 皆さま、どうも本日は、ありがとうございます。本学のCOC事業、経験値教育プログラムにつきまして、お手元のほうに非常に小さな字で資料を付けておりますが、前のスライドを見ながらご説明をさせていただきたいと思います。

まず、本学の取り組みですが、「捨我精進」という建学の精神がございまして、創立以来50年、地域に開かれた、地域とともに歩む大学として尼崎で大学づくりを推進してまいりました。その中で教育のコンセプトが「経験値教育」です。先ほど来出ています「つながりプロジェクト」という科目を新設すると同時に、学生の地域で経験を「経験値」としていかに評価をしていくのか、学生の力を目に見える形にすることを目指していきたいというのが、今回のプログラムの趣旨ということになります。

概略になりますが、多様な尼崎市の地域課題の中で、「健康づくり」「学校教育」「生涯学習」「子ども・子育て支援」という本学の学部構成に合わせた四つのテーマについて、課題解決に取り組んでいきたいと考えております。先ほど、松坂様のお話の中にもございましたように、本学の学部は、人間健康学部、人間教育学部、短期大学部ということで、国家資格養成の教育課程を引いております。将来、女性の専門職を目指した人材育成ということで、非常に実習、実験等の多い学部構成でございます。その中で、全学部横断する経験値教育を考えましたときに、どのようなことができるのかということで、まず大学と短期大学部を横断する形で、地域理解の導入科目としてこれは必修ではないんですけども、「大学社会貢献」という科目を置きました。それか

ら、2年次生に「つながりプロジェクト」という、これは学英全員が12から13クラスに分かれて必修科目で「つながりプロジェクト」という課題解決型の演習科目を置く。1年生、2年生という大学生活の前半期でこういうプログラムを組んでいくというところが養成課程である3年次、4年次、国家試験が目の前に迫る中で、早い時期に専門職以外の多様な社会体験をしていって学んでいくというのが経験値教育プログラムでございます。

まず、教育の面につきまして、少し詳しく見ていきたいと思います。「知識」を「知恵」に変えるというのが経験値教育の中心的な内容でございます。大学で学んだ理論でありますとか、知識というものを社会で実践させていただくことによって、「経験値」を高めていく。その経験値を可視化するためにどのような指標でとらえるのかということで、人と人とのつながりを第一に考えていきたいというのが経験値評価システムということになります。

平成26年度には、「大学の社会貢献」という科目を全学部の共通科目で1年生、導入科目として実行いたします。15回。半期の科目を1学期、2学期、レポートで行うんですが、できるだけたくさんの学生が履修するように指導をしていきたいと思っております。尼崎市の職員の方に全面的にご協力をいただきまして、先ほど申しました四つのテーマについて、それぞれ尼崎の現状を学生に講義していただくと同時に、最後の3回で「訪れたい、住みたい尼崎」という簡単なワークショップをいたしまして、コンペ形式のプレゼンテーションを学生に行わせる予定にしております。

実は尼崎市内から通っている、出身の学生というのがそう多いわけではございませんので、どうしても時間割の関係で土曜日になりますが、これまでお世話になっている猪名寺、杭瀬、塚口、それぞれの地域の方にお世話になって、フィールドワークを行って、街を見

た上でコンペを実施します。これが導入科目の概要です。

これをふまえて、そういった地域の学生の活動をどう評価していくのかというところで、地域の皆さんに学生を評価していただくという経験値評価システムを考えております。これは三つの評価から成り立っております。アセスメント評価というのは、通常、学生の社会人基礎力でありますとか、学習力を評価するアセスメントを半年に1回、積み上げることで学生の成長を見ていきたいと思っております。つぎにプロジェクト評価ですが、これは学部、学科、学生によってまちまちですが、それぞれの研究領域で1年間、地域課題に取り組んだ学生に対して自己評価と教員の評価と地域の方（連携先）にも評価していただいて学生のその1年間の取り組みを考える。もう一つ「つながり評価」を作りました。これは後でデモンストレーションをしますが、スマートフォンのアプリ、パソコンで毎回地域の方にボランティア活動、地域活動を学生が報告すると同時に地域の方から評価をしていただくという積み上げデータベース化できるシステムを構築しております。

活動した学生は、つながりマップというもので、グーグルマップにポイントを置いています。たくさん活動した学生は、たくさん地域の方とつながり、ポイントが見える。この中で、少しゲーム的な要素と申しますか、経験値レベルによって学生に称号を与える。一生懸命頑張った学生には、それだけ見える形で王冠の数が増えていくと見せ方で、学生の活動の活性化にもつなげていきたいというふうに考えております。それから、担当する教員は、マップや統計データで、どの学生がたくさん頑張ったのかが全部見てわかるということになります。以上が経験値評価システムの特徴だということになります。

続きまして、地域の方には非常に簡単です

けれども、星五つでその日の学生の活動を評価していただいて、いいことも悪いことも含めて感想をお書きいただくことを考えています。地域の方の評価の積み重ねが、学生たちの育成にどのような効果があるのかというようなこと。それから、コメントの中でどういうふうに学生を見ていただけるのかということ。これを大学では分析していきたいというふうに考えております。

続きまして、社会貢献ですが、社会貢献の分野につきましては、平成26年4月1日から「まちの相談室」という場所を学内に設けます。現在、看護学科の「まちの保健室」という地域に開かれた活動が行われているんですが、地域でのボランティア活動とか、地域の方からのいろいろなお願いを受け止める場とします。その運営を今日も手伝ってくれています学生地域連携委員という組織を立ち上げまして、学生が中心になって学内に情報発信をして、地域での活動を企画、運営していくような地域への窓口を学内に設けます。

一方、地域での人材育成ということで、「まちの支援員」の養成を行います。本日の封筒の中にも入れさせていただいておりますが、本学の生涯学習は、30年以上にわたって非常に早くから開かれたプログラムを作っております。たくさん地域の方が学内で学んでいただいている大学でもございますので、生涯教育を軸に置きまして、地域のリーダーのブラッシュアップを図っていただける、地域のニーズを受け止めた人材育成の講座を作りたいというふうに思っております。

最後に研究の分野になるんですが、研究につきましては、地域とともに研究をしていく。先ほどの四つの地域課題を解決をしていくというふうなことで行っていきたいと思っております。そのために、研究会「まちづくり解剖学」を開きます。この研究会は、これまで任意で尼崎のまちづくりのリーダーの方はどう

やればこの街が元気になっていくのかという構想を検討する研究会だったんですが、COCの採択を受けまして、定期的に「まちづくり解剖学」というのを開催しています。教職員、学生、自治体職員の方、地域の方々。いろんな方に集まっていただいて、意見交換をする。自由な議論ができる場所というのを設けて、この中から研究のテーマも作っていきたいというふうに思っております。第1回は昨年8月8日から始まりまして、2カ月に1回、第一木曜日の18時15分から研究会を行っています。3月24日には、看護学科の野呂先生の防災。東日本大震災の被災地、気仙沼での調査を踏まえた安心安全に暮らすための生活環境というテーマの研究会を開きます。

先月行われた「まちづくり解剖学」は、きょう司会をしております学生が取り組んだ、杭瀬の街の公園づくりを中心に、安心・安全で住みやすい、学生なりのまちづくりのプランを発表してもらって、課題を深く研究していくというようなスタイルの研究会です。4月以降も地域の方にも参加をしていただいて、さまざまなテーマで取り組んでいきたいと考えております。

現在、地域志向教育研究ということで、平成25年度秋から3月末までで九つの研究プロジェクトが立ち上がっております。この九つのプロジェクト、それぞれが四つのテーマの中で尼崎の関係部署の方、地域の方と一緒にフィールドを決めて研究がスタートしたばかりのところでございます。

平成26年度に、この研究をさらに深めていただいて、今度は地域志向の教育研究ですので、「つながりプロジェクト」の必修の科目のビジョンの中にご自身、どんな形で授業として取り組むことができるのかというご研究もしていただいて、26年、27年で28年度からの「つながりプロジェクト」の授業、地域とスクラムをきちんと組んだ形で、授業科目の

展開というのができるのではないかとというふうに考えております。

ようやく地域志向教育研究が始まり、経験値評価システムも試行的ではありますが、なんとか4月1日から稼働させ、徐々に広げていく形で27年度には2000人の学生全員がスマートフォンを持って地域に出て行って地域で活動し地域の方々に評価していただくという経験値教育プログラムを推進してまいりたいというふうに考えております。私のほうの説明は以上でございます。

非常に駆け足でわかりにくい説明だったかと思いますが、本学COC事業「地域と大学をつなぐ経験値教育プログラム」の概要説明をこれで終えさせていただきたいと思っております。どうもご清聴ありがとうございました。

## 地域連携推進機構キックオフシンポジウム

### 第三部 パネルディスカッション

尼崎市顧問 船木成記  
尼崎商工会議所産業部長 小林史人  
猪名寺自治会会長 内田大造  
杭瀬小学校 PTAOB 会副会長 大槻真佐子  
本学教授 大江篤（司会）

**大江** それでは第3部パネルディスカッションを始めたいと思います。先ほど、隣の221、222の教室で各先生方の地域志向教育研究プロジェクトと、それから経験値評価システムのデモンストレーションを見学していただいて、いかがだったでしょうか。まだまだこれからという部分もあるんですけども。

今日のパネルディスカッションでは、これまで本学が市内の商店街や小学校でお世話になっている方々にご登壇いただきまして、短い時間ではありますが、40分程度ディスカッションをしてまいりたいと思います。

まず、せっかくの機会ですので、それぞれのお立場、園田学園女子大学とのこれまでの関わり等を踏まえて自己紹介の形で、大槻さんのほうからよろしく願います。

**大槻** 願います。私は、もうすぐ24歳になる息子と高校3年生になる娘、主人と4人暮らしの普通の主婦です。下の娘が入学すると同時に私は6年間、杭瀬小学校のPTAの副会長を務めさせていただきました。その間に、大きな周年行事、常光寺小学校、杭瀬小学校との統合。仮設での学校教育。新校舎が完成し、学校どうしの引っ越しなど、普段関わらないことをさせていただきました。落成式にも携わらせていただき、とても充実したPTA活動を送らせていただきました。

子どもが小学校を卒業する時期、ちょうど主任児童員を引き受けさせていただき、今でも学校、児童と関わり、6年目に入ろうとし

ています。

園田学園女子大学のかたがたとは、4年前、小学校区学習センターのメンバーとして、それぞれの立場で提案を出し合い、コーディネートをどうできるのか、月に1度会議をさせていただいております。こちらの学生さんには、学校の中で図書ボランティアのお手伝いをしていただいたり、夏休み中、児童の宿題を見ていただきまして、子どもたちはとても喜んでおりました。先生より若かったので、キャーキャー、キャーキャー男の子が楽しんでおりました。

地域のほうでは、秋祭りや商店街の催しなど参加していただいています。地域と杭瀬小学校の取り組みでお餅つき大会が2月の寒い土曜日にあつたんですけども、学生さんに朝早くから来ていただき、お餅をついたり丸めたり。現場の先生や地域の人、児童と一体となって過ごさせていただきました。

先日、大きな防災訓練が杭瀬小学校であったんですけども、そのときにグラウンドや教室をどう使うべきだろうかということが大きな課題に挙がりました。私そのときに、こちらの学生さんのことを思い出しました。杭瀬小学校の学校内を案内しているときに、こちらの学生さんは自分たちが行った小学校のときの教室と違う。皆さん、そういう感想を述べられていました。現在の杭瀬小学校は統合をきっかけに、構造が他の学校と違っていますので、こちらの学生さんが「すごい、すごい」と連発するぐらいの感動でしたので、こちらの学生さんだったら大人の知恵もありますし、子どもと同様に教室を使うっていうのは一番中で使っている。子どものような大人のような子どもたちですので、こちらの学生さんには何かできないかなということを聞きたいなって、ふと防災訓練のときに思い出しました。たくさんエネルギーを、大学の先生、

大江先生や学生さんにいただいて、私はこれからもどんなことができるのかとても楽しみにしております。

**大江** はい。どうもありがとうございます。杭瀬小学校は尼崎の南のほうの小学校で、私ももお世話になって、行くたびに大槻さんにお世話いただいています。提携大学のカンタベリー大学の教育学部の学生が来たときもお世話をいただいております。

続きまして、今度は一番北側の端、北部の猪名寺の自治会長さんを務めておられる内田さんのほうから自己紹介をお願い致します。

**内田** 皆さん、初めての方もおられると思いますけれども、猪名寺自治会の会長をしております内田と申します。私たち尼崎の北東部にある猪名寺は、「住んでみたい、行ってみたいと憧れる街になる」これを私たちは2016年まで達成するために、ステップ計画という目標を作っていて、日々そのために創造的なまちづくりに挑戦しています。その中で、園田学園女子大学の皆さんにもたびたびボランティアという立場で協力してもらっています。

例えば猪名寺の盆踊り。あるいは餅つき大会。最近、地域ではコミュニティーが崩壊しておるんですね。なかなか昔からの盆踊りも活気が出ない。餅つきも人が集められない。そういう状況の中で、私たちはこのコミュニティーの場を盛り上げようと園田学園女子大学の皆さんには猪名寺の歴史をうちわに登場させて、猪名寺廃寺をうちわでプリントしたり、あるいは『撰津名所図会』をうちわにしたりして皆さんに配布する。お店もやってます。餅つきでは、二十数名の学生の皆さんが参加していただいて、お土産に田能のサトイモを皆さんにあげました。これ、大変おいしかったと思うんですけども、いまだにその感

想が来ない(笑)。ちょっと寂しいですけども、アジアの留学生は感想を寄せていただいて、それを今度、猪名寺便りに配布して、皆さんに大学とボランティアの皆さんの温かいご支援に感謝して、また広げていこうと。

それから猪名寺には万葉の時代からずっと続いている佐璞丘があるんですね。ここを再生しようということで、万葉の森再生事業としているんですけども、そこでフェスティバルを開きました。このときに万葉コンサートと万葉の茶会を開きました。この万葉コンサートの総合をアジア留学生にやっていただきました。片言でしたけど、ものすごく受けました。非常に素晴らしかった。それと茶道部の方に万葉の茶会をしてもらったんですね。着物を着ていただいて、わざわざ。たまたまちょっとその日、オチがつきまして。携帯電話を落とした学生さんがいまして、最後はてんやわんや致しましたけれど。非常に楽しいボランティアをいただきました。

それから、地域健康度アップということで、地域の健康度をアップしようということでアンケート調査をしたり、講演をいただいたり、骨密度調査をしてもらったり、測定してもらったり、あるいは健康運動などをやっていただきました。

このように、今、ようやく猪名寺地区と園田学園と連携の糸ができてはじめてします。今日のCOCの拠点事業。大変私は期待しておって、意欲的に猪名寺にそのモデルとして連携事業を成功させていただきたいし、また、私たちがそのために全力を尽くそうという、そういう覚悟で今日来ておりますので、ひとつよろしくお願い致します。

**大江** ありがとうございます。内田さんには同じように4年ほど前からお世話になって。学生の講義にもゲストスピーカーで来ていただいて、今年度は内田さんが自治会長をされ

ながら培われたボランティア 10 カ条というのを授業していただきました。いつも刺激を与えていただいている、尼崎で一番元気な自治会長さんかなというふうに思っています。

それでは連携先のまず尼崎商工会議所の小林さんのから自己紹介をお願いします。

**小林** 失礼致します。尼崎商工会議所の産業部の小林と申します。よろしく願い致します。園田学園さんとの事業ということで、私が始めに関わったことで、平成 22 年 6 月に先ほどあいさつで誰かもおっしゃられましたけど、連携協定というものを商工会議所と園田学園と結びました。その中から何かできないかということになりまして、その時期に市のプレ 100 周年を迎えるというような大事な時期でもありまして、会議所としては、商業の活性化等に出ていきたいということで会長、副会長が市内商業の創業者を視察するという事業のスタートで。ちょうどまたま塚口の周辺を歩いて、会頭のほうから塚口で全体を示したマップがないというふうな話がありまして、それだったらマップ作りを何かできないかということで、園田学園さんに相談を致しまして、大江先生のゼミの方々と協力しながら、塚口グルメマップということで、塚口の北側のマップを作らせていただきました。会頭からは塚口全体のマップづくりということだったんですけども、いろんな事情もございまして、このときは塚口の北部だけのマップづくりになったんですけども。その後、南塚口のかたがたが自主的にマップづくりをされたり、あと塚口バルというふうな形で仕掛けがいったところもございまして。

続いて杭瀬のマップということで「杭瀬ナビ。」が発案されたり、杭瀬の街歩きという形で、こういったツールがそれぞれ事業として成り立ってっております。

皆さまのお手元に今日配布されている冊子

があります。その中の 5 ページにわれわれの商工会議所の取り組みが詳しく書かれています。園田さんと一緒にしたというものも書かれていますから、ご覧いただけたらと思います。

私のほうは地域の情報発信等の形で、商業、工業が元気になれるような仕掛け作りをやっております。ご存じの方もおられるかと思いますが、今、「あんかけチャンポン」といったような仕掛けも青年部等でやらさせていただいておりますので、またご協力願えればと思っております。本日はよろしく申し上げます。

**大江** ありがとうございます。本学の最寄りの駅は阪急塚口駅なんですが、駅の向こう側なんて行ったことがない学生がほとんどなんです。駅と大学の前の往復だけで、大学のある街も知らないというのが実情です。おっしゃるようなグルメマップづくりで、学生が自分の通っている大学の街を知ることができたというような取り組みで、その続きの杭瀬のマップづくりは杭瀬の小学校のほうとも付き合いができて、また広がっていったところがございます。

では、4 人目に尼崎市の船木顧問から、ご紹介願います。

**船木** はい、ありがとうございます。改めまして、船木でございます。一応、尼崎市の顧問という形で、ちょっと席をいただいているんですけども。それほど街のことを知っているのかなと言われると非常に怪しいところなんです。実は私、1 年前になるんでしょうか。2013 年の 4 月から尼崎市の顧問ということで、こちらにお世話になっております。出身は東京でありまして、本籍地というのもあるんですが、博報堂という広告代理店におりましてシティプロモーションを含め、少しそういう領域というのがほしいということ

で、私が担当させていただきました。

市全般に関しては、本当に日々さまざまな委員会とか、委員会でなくともご相談等々で園田学園の先生方、それから学生の皆さんにいろいろご協力をいただいている各部署からお話をお聞きしておりますが、改めてこの場から御礼申し上げたいと思っております。

私自身は、実はここから歩いて3分ぐらいの所に住んでおまして。雨の日には必ず園田学園の前からバスで通わせていただいている。それが一番の園田学園に関係あること、ご縁が近いなというふうに思っているところなんですけれども。

実は今日この事業に関しましては、非常に感慨深いという言い方も変なんですけど、先ほどの文部科学省の松坂室長のほうが2年前ぐらいですかね。まだ事業がちょうどこれからやるぞ、みたいなディスカッション、ちょうど私も東京で参加をさせていただいたという経験がありまして。それがこちらのほうで採択をされて、このような場で実際に事業が進むというのは非常に感慨深いと思っております。

実は私、高知大学に地域共同教育学部の客員教授をやらせていただいて、地域に学生が関わるということをや地域側からどう考えるのかということと、大学側がどういうふうに学生を地域に送り出すのかという。両方を考える立場にある。ともすると、どちらかが一方的に得をするという形で、受け取った側がすごい疲弊をするとかいう経験をずっと拝見してきました。反省をしたりという経験もあるものですから。そういった観点から、お話を一緒にできるとうれしいと思っております。

僕のまちづくりの基本的な考え方としては、その街を好きな人に会っていると、その街を好きになる。そのような定義が僕の中ではあります。ぜひ学生さんに尼崎生まれじゃないかもしれないけれども、尼崎でいろんな人に出会って人生のスイッチが入ったという瞬間

間もあれば、きっと将来どこで暮らそうがどんな人生を歩もうが、でも確実にある人生のある瞬間に尼崎という街で自分の人生、少し記憶がしっかりあるな、という経験をぜひしてほしい。逆に言えば、そういう場を行政のほうも地域のほうも一緒になって作れるといいなと思いつつながら、このCOC事業が実りあるものになるとうれしいと思って今日はこちらに参加させていただきました。よろしくお願い致します。

**大江** ありがとうございます。自己紹介だけで半分の時間が過ぎております。なかなか短い限られた時間ですが、キックオフということで、今、自己紹介をしていただいた中にもさまざまな課題、大学のほうでも考えていけないといけないことがあるかと思いますが。一つ二つ、話題にしながらか、またご意見をいただきたいなと思っております。

まず、先ほどそれぞれのお話の中でも「学生たちはこういう目線で」というようなお話もあったんですが、今、実際に大槻さん、内田さんの所で子どもさんの見守りだとか、高齢者の問題だとかを抱えておられる中で、この課題が一番、ニーズがあるかなというところがありましたら、簡単に結構ですので言っていただけたらと思っております。

**大槻** そうですね。今は子どもよりもおじいちゃんおばあちゃんのほうが多くて、私は毎日、集団登校の小学校で見守りをしているんですけども。幼稚園の子、小学校の子、中学校の子、高校の子って、毎朝「いってらっしゃい」「おはよう」って言ってるんですけども、おばあちゃんたち、おじいちゃんたちが同じ時間帯に病院に行かれますので。知らない間にボランティア代わりになってしまっていて、おばあちゃんたち、おじいちゃんたちも「いってらっしゃい」って最初言ってくれてたん

ですが、顔がわからないと今の子どもたちで、「おはよう」って言うことができないんですね。不審者だと間違えますので。だんだんわかるようになってきているんですが、間の世代が居ないんです。高校生までは居るんですけども、大学生のお兄ちゃんお姉ちゃんっていうのが居なくて。杭瀬小学校に子どもたち、こちらの学生さんが入ったときには、見たことのないぐらいの喜びようでしたので。課題っていうと難しいんですけども、関わっていただきたい。いろんな世代が関わっていただきたいなっていうのがありますね。

**大江** ありがとうございます。それぞれの年齢層の方々はそのそれぞれのグループがあって、地域の中でなかなか有機的につながっていかない。潤滑油じゃないですけど、学生が入ることによってつながりが生まれてきたというところなのかなというふうに思いました。

では、内田さんのほうから猪名寺の自治体の課題というのが何か一つありましたら。

**内田** 一つではなくて、三つあるんです。

**大江** 三つお願いします。

**内田** 一つはやっぱり猪名寺地域を活性化したいと思います。どう活性化するかですけども、猪名寺を万葉の里、万葉観光都市として再生し、活性化したいというのが私たちの夢の一つでもあります。猪名寺は非常に歴史、文化資源豊かな地域なんです。例えば紫式部さんの娘さんが『有馬山猪名の篠原風吹けば いでそよ人を忘れやはする』歌った、猪名野、その中心的地域なんです。万葉時代から猪名野というのは非常に有名で、万葉集あるいは古歌にたびたび登場する地域であります。私たちは、今、この地域を万葉の里として、あるいは万葉観光都市として活性化し

ていくために万葉の森再生プロジェクトを作っております。日々、万葉の森の整地作業をやっています。それから、猪名寺散策マップを作って、私は街歩きをガイドをして歩く。この期間、何百という人たちが猪名寺を訪れました。これは尼崎と今、共同事業として一緒にやってるんですけども、ぜひここに園田学園の皆さんが入っていただいて、食の万葉の文化。食文化をどう作っていくのか、一緒に尼崎の一角に癒やされる万葉観光都市が生まれるようにやっていきたいというのが一つ。

二つ目が、お年寄りが健康で元気よく長生きすることです。今、尼崎では年に1度、集団検診というのがありますけれども。特定健診。私たちは100人の高齢者が一度に集団検診を受けるんです。それで今、尼崎とタッグを組んで、ずっと健康プロジェクトをやっているんです。猪名寺は尼崎市と比べると、肥満が高い。LDLが、コレステロールが高い。血糖が高い。そういう分析結果が出たんですね。この数値を今、改善するために尼崎と共同して学習会をやっています。いろいろやっています。食の学習会。こういう所に、皆さん尼崎市と猪名寺と大学が組んで、本当に健康、長寿の猪名寺、モデル事業を実現したら私は素晴らしいと思います。ぜひ、皆さんの力添え。あるいは地域貢献として一緒にその問題を解決していただきたい。

もう一つは、地震に強いまちづくりでございます。南海トラフの地震がいつ起こってもおかしくない状況でございますけれども、猪名寺は洪水の心配はないです。震災。伊丹の洪積台地で、唯一、尼崎では一番高い丘なんです。標高10メートルが一番高いです。しかしながら、ここは区画整理事業もやっていないので、古い家もたくさんあります。古い地域ですから。これで倒壊。家屋の倒壊。それから火災が起きると消防車が入れない区域があるんです。じゃあそのときにどうするの

かということになるんですけれども、私たちは自主防災会ということで、自主防災会を裁定して、この2月に防災訓練を行いました。200人が園田北小学校に集まって、耐震の経験をしたり、蘇生を学んだり、いろいろと災害のときの対応と色々な体験を致しました。しかしながら、まだ200人ということで危機意識を持っておりません。やはり地域からお年寄りや障害者をどう避難させるのか。どう自分でまず命を守るのかということを含めて、危険箇所はどこにあるのか、どういう問題があるのかをめぐり出して、これをこれからやらなければならない課題でございます。

うちは消防団。それから警察、自衛隊、この前の防災訓練は子ども会、老人会、婦人会、自主会。全部がこれに企画を立てて頑張っております。地域のコミュニティーは確立しておりますので、ぜひ大学の知恵を知の拠点として担っていただきたい。ちょっと欲張った言い方でお話ししましたけれども、よろしくお話ししたいというふうに思います。

**大江** ありがとうございます。本当に地域資源の問題、それから健康の問題、災害の問題。日頃から取り組んでおられることで、今日、大学の側でもぜひ受け止めて、また地域の教育現場の中でつながりを持っていければというふうに思っております。

では、若干視点を変えて、小林さんのほうから市内の企業でありますとか、事業者のところでは抱えている問題を少しお話しいただいでよろしいでしょうか。

**小林** 失礼します。尼崎市内の産業というのは多岐にわたっておりますので、混在性という問題、課題等、絞り込むのが非常に難しいところです。われわれ商工会議所の活動として「企業と人が息づく街は美しい」というような形で、企業に元気になっていただいて、

そこから活性化。にぎわいづくりをした上での活性化というふうな取り組みを行っております。中でも、特に商業という部分には、大型店の進出であるとか、商店街がシャッター通りになって非常に厳しい状況になっている。あるいは高齢化が進んで若い人がなかなか事業を承継しないということで、非常にあかんという問題意識はございます。

そういった中で、商工会議所の取り組みの中で街歩き支援というふうな形で、例えば産業観光によって、工場のものづくり体験、職場体験、そういうものづくりを見ていかれる経験をさせていただくツアーを組んだりしています。先ほど船木さんも言いましたけれども、街歩きなんかで元気づけようというような取り組みもしております。尼崎市内というのは、それぞれ行政6地区、さまざまな特徴がございますので、その地区の特徴を生かした何かキーワードを作りながら取り組んでいかないとあかんかなというふうな形で今、やったりしております。その中でバルとか、積極的に取り組んだりしております。

それと、あとは尼崎商工会議所の中で今年度、スーパースイーツという形で尼崎のイメージを変えていこうということを目的に、スイーツの街でまちおこしを支援していこうということをキーワードにやってみりました。これにつきましても、園田学園さんの学生さんの力を借りながら、スムーズな運営ができたことを申し上げますけれども、そういった形でにぎわいを作らないと、なかなか市というのは元気にならないというところがありますので、仕掛けづくりをモットーに致しまして取り組んでまいっているという形です。

**大江** ありがとうございます。にぎわいづくりということで、会議所の取り組みに大学のほうもできるだけ連携させていただきたいところなんです、得てして大学から商店街の

活性化とか、そういう所に学生を送るとき、あまりいい言い方ではないですが、人手が足りないので学生に手伝ってもらいたい、こちらは「ボランティアは社会体験になるから」と出すだけ出してしまっ、結局お互い何のために行ったのかというふうなことも多くありました。ただ、会議所のほうともお話をさせていただき、インターシップ等も含めて、やはり学生のほうも目的意識を持って活動に参加させていただき、企画をしたりコミュニケーション能力を高めたりというふうな、今回のCOC事業の中の経験値を高めていくような取り組みになっていけばと思います。

今、この地域に実際にお住まいの方々の課題、それから会議所のほうで事業者さんの持っておられる街の課題。本当にいろんな課題がこの街の中にたくさんあるんですけれども、その中で今、学生が地域に出て、地域で勉強させていただくというあたりで、船木さんに、学生が街で学んでいくために、どんな仕掛けを持っていけば、より学生たちが生き生きとした街になれるのかなというようなところのお考えを聞かせていただければと。

**船木** すみません。最後にどんな質問になるんだろうと思って身構えていたんですけれど。本気で学生に向き合ってくださいと、もうそれしかないですね。今の時代、実は若い人たちが腕磨きをする機会が実はすごく少なくなっています。今、働く人、若い人たちが就業されている方は半分ぐらいなんです。非正規労働という言い方をしているのかもしれませんが。将来、すごい不安な就職になっております。何を言ってるかという、計画して就業キャリアが保たず、将来に不安があるということなんですね。振り返ってわれわれぐらいのときの年代で会社に入ることが目的でありました。就職したら実は10年ぐらい、会社が基本的には言葉は悪いですけど、身の保証

をしてくれていて、その間に経験を積んで気が付いたら10年ぐらいたったら自分の名前で請求書が出せるような仕事ができるようになってきた。逆に言うと10年間遊ばせてくれたというのではないんですが、経験する機会をある種、安定して提供してくれていたと。

実は今、若い世代、その期間がないんですね。能力があれば、ある種成果主義という形で正社員になれるけれども、なれない人は、ちょっとわざと強く極端なことを申し上げますが、非正規という形で分かれていくような状況があるんですね。このままだと大変なことになる。若い人しかできない機会を提供できないと20年後、30年後、日本を運転する人が居ないってことになる。その経験を持たない人が多くなってしまいうことですね。今のうちから、ある種、責任を持ったり、リーダーシップを経験したり、ないしは失敗をしてもいいでしょう。チャレンジをするということを街をあげて提供しなかったら、大変なことになる。昔は企業がそれを提供してくれていたから、われわれが納得する結果ができたんですけれども、これからは企業ももうそういうような状況ではない。

じゃあ誰が次の時代を育てるのかといたら、コミュニティーがそれを提供するしかない。コミュニティーって言っているのは、地域だけではなくて地域を支える産業界を含め、すべてのステークホルダーですね。一緒になって一丸となってその地域で若者を支えていく。経験を提供する。育つ。そういう機会をどれだけ提供できるか。そのためには、実はインターンシップという言葉が非常に誤解もあるかもしれないですが、1週間2週間ちょっと来てもらって「就業体験させてあげる。ボランティアさせてあげるよ」という「させてあげる」という体験ではなくて、本当に働くとは何か、生きることは何か、学ぶことは何かこの三つが接点になるような体験を

ぜひさせてあげてほしいというふうに思います。そういう体験を提供させてあげられれば、確実に地域と街と人につながっていきます。もしかしたらチャレンジして世界に行きたいと思って尼崎から出て行ってしまうかもしれないけど、でも確実に思いはちゃんと残るんじゃないかなというふうに思います。仕掛けは実はあまりなくて、本当に大人が本気で若い人たちに向き合う。もうそれしかないかなというふうに思っています。

**大江** ありがとうございます。今の船木さんの言葉、大学のほうも学生と向き合う時間をたくさんとってやっていく必要があると思います。その一つのシステムに今回、経験値評価システムということで、地域の方に評価していただく。地域の方に丸投げするのではなくて地域の方と一緒に大学で大学の教職員も合わせて学生と向き合っていくながら評価するシステムであるべきだというふうに考えて、構築をしているところでございます。

まだまだお話を聞きたいところなんですけど、今日は、杭瀬、猪名寺、商工会議所、それぞれ私も関わっている所の方々にご登壇いただいています。杭瀬のほうにも、月に1回何もなくても行かせていただいて、いろんな方と色々なお話をしながら課題をいただいて帰って、またご協力させていただいてという形で。学生だけでなく、我々のほうも地域に足を運んで、地域の方の話に耳を傾けながら、これから取り組めていけたらと考えております。

ちょっと時間が超過をしているんですけども、最後に、文部科学省の松坂様のほうから少しコメントをいただければと思います。

**松坂** ありがとうございます。これ以上、蛇足になってしまうとは思いますが、今、皆さんのお話を聞いて、非常に期待していた

だいていることがよくわかりました。期待が大きければ大きいほど、大学は本当に大変になると思います。でも、船木顧問がおっしゃったように、やっぱり大学はここはひとつ、がんばってもらわないと。できることとできないことがいっぱいあると思いますけれども、すべては学生のためにという形でぜひ、煮詰めていただけたらと思います。5年後、非常に楽しみにしております。どうもありがとうございました。

**大江** ありがとうございます。本当に学生数が2000人と非常に小さな女子大学でございます。今回のCOCの採択の大学の中でも女子大学で採択していただいているのは本学のみでございます。この中で、本当に今の皆さんからの話を聞いて、地域に必要とされる大学。それからこの大学を拠点に、尼崎がもっと元気になっていく。学生もそこで育てていただいて、元気な学生たちを育てていきたいというふうに思っております。

では、これで第3部のディスカッションを終えたいと思います。本日はお忙しいなか登壇いただき、お世話になった方々にもう一度拍手をお願いします。ありがとうございました。

園田学園女子大学地域連携推進機構・東アジア恠異学会主催フォーラム

## 芸能と恠異学



### 人形浄瑠璃における恠異

井上勝志

(園田学園女子大学教授、近松研究所所長)

近松門左衛門作の浄瑠璃『賀古教信七墓廻』は、初段で七尺余りの大蜘蛛が登場し、継母・幼い姫を呑み込み、下半身を切られ乍らも若君を守ろうとする忠僕と死闘を繰り広げる。その部分を評して、「惨酷な、恠異な、荒唐無稽な」などと言われていた。

ここでは、本作の上演を『外題年鑑』の言う元禄十五年とした場合、「翌年にはもう「曾根崎心中」が上演されるという年代に、このような惨酷無惨で恠奇極まる幼稚な作品が上演されるとは、とても信じられない」(『正本近松全集』)という記述を取りあげる。

『曾根崎心中』は、醤油屋の手代徳兵衛が銀二貫目のために東奔西走し、挙げ句の果てには男の一分はすたり、「死なねばならぬしな」となる物語、そして、その境地に陥れたのは「男みがく奴」「日ごろ兄弟同然に語りし奴」と信頼しきっていた友達の九平次であった、という内容である。言うまでもなく、上演当時の出来事を題材とした世話物であるが、浄瑠璃は本来歴史を語るもので、所謂時代物が本流である。

浄瑠璃という芸名の名称の由来でもある『浄瑠璃御前物語』では、「五輪碎」の恠異が描かれていた。また、説経でも亡くなった女性の幽霊との間に子をもうけるという設定がなされたり、地獄の有様、地獄からの蘇生が語られたりする。これらの影響も受けた浄瑠璃の一側面として地獄・極楽をめぐる恠異が取り込まれるのは、浄瑠璃が生身の人間なら

ざる人形と結びついたこと、そして、その人形の糸からくりなどを活かせることも相俟って、自然の成り行きと言えよう。これは、宝永期以降においても、歌舞伎の女方の演出を取り入れて、死霊や生霊が登場する作品や、中世来の題材を扱い、鬼や異界が語られる作品もある。これら、この世ならざる世界、人間ならぬ存在という恠異を描く作品は、人形操法や舞台装置の発展・工夫を背景に、人形浄瑠璃という分野における一つの流れとして存在し続けた。

その一方で、『曾根崎心中』が上演された。ここで、当世の物語が持ち込まれると、あるのか、ないのか、いるのか、いないのかといったものに主眼を置くよりも、あるかもしれないそれらに恐れ、あるいは、希望を託す、この世での人に重点が移るのは当然である。地獄の鬼よりこの世の人間、当世の出来事を取りあげる時代、そして、その作品が大当たりとなる時代、それが、元禄の末であった。『曾根崎心中』は、信頼しきっていた友達が裏切るということを描くことによって、そのようなことをしてしまう生身の人、あるいは、そのようなことを考えてしまう人の心、それこそが異なるもの、つまりは「恠異」である、と言っているようにも思える。男をみがいていた筈の九平次がなぜ徳兵衛を陥れたのかという理由について、近松は何も説明していないのである。「我身ながら此心めがじゆうにならぬ」(『梶狩剣本地』第三)のが人間であり、近松作品に登場する、ある種すべての人物はこのような人である。井原西鶴が「人は化け物、世にないものはなし」と『西鶴諸国ばなし』の序で述べたのは、元禄という時代を前にした貞享二年——それは奇しくも義太夫と近松との初めての提携が成った年でもあった。

## 歌舞伎における怪異

横山泰子  
(法政大学教授)

歌舞伎には多様な化物や幽霊が登場する。歌舞伎の演目全般に目をやると、動物が人に化け、植物の精が活躍するなど、人間以外の存在者が主人公級のはたらきをみせるものが多い。歌舞伎において、不思議な現象＝怪異は非常に大きな役割を果たしている。「芸能と怪異学」という観点から見た時、歌舞伎は考察しがいのあるジャンルなのである。

歌舞伎では、仕掛けを駆使しつつ、役者の身体的な技能を用いて怪異現象を「写實的」に表現する。元禄歌舞伎の時代から若女形の芸としての「怨霊事」が人気を集め、文化文政期には見物を怖がらせる「怪談狂言」が流行したが、いずれも仕掛けと役者の身体芸なくしては成り立たないものであった。仕掛けが用いられた背景の一つに、江戸時代の科学技術の発達による。平和な社会のもと、科学が娯楽に用いられるようになったがゆえに、歌舞伎の大道具大仕掛けも発展をみせた。役者の体を天井から吊り下げれば、幽霊の飛行が表現できるし、水槽の中に飛び込んだ役者が別の所から濡れずに出てくる仕掛けによって、妖術使いの活躍を見せることができる。こうした仕掛けを考案し、現実の舞台上で使えるようにすることが、怪異を表現する芸能では重要な意味を持った。

文化文政期に活躍した役者の初代尾上松助と三代目尾上菊五郎は、作者の四代目鶴屋南北と組み、数々の仕掛けを用いて怪談狂言を成功させた。代表的な演目に『天竺徳兵衛韓嘶』『彩入御伽草』『東海道四谷怪談』『独道中五十三駅』などがある。大道具や小道具等に

施された特別の仕掛けは秘密とされ、幽霊や妖怪の演じ方は家の芸として後世に伝えられた。歌舞伎では「家の芸」が大事にするが、怪談狂言も例外ではなかったのである。

仕掛けが秘密にされる一方で、見物は仕掛けの秘密を知りたいと願う。その要求にこたえるため、幕末には仕掛けの解説本も刊行された。『御狂言楽屋本説』を読むと、『東海道四谷怪談』をはじめ、怪談狂言の仕掛けの数々が絵入りで説明されている。このことは、当時の歌舞伎愛好者たちがいかに仕掛けに興味を持っていたかを示すとともに、仕掛けの説明を許可する歌舞伎制作者サイドの心意気をも示している。歌舞伎の新創造の精神、すなわち古い仕掛けが公にされたところで次の仕掛けを考案するので問題なしという姿勢のあらわれと考えられる。一見素朴な仕掛けのようだが、電気や機械に頼りすぎている現代人には、かえって思いつかないような奇抜なものも多い。

また、怪異を表現する芸能として「女形」の役割も重要である。女性の起こす怪異現象を「写實的」に表現する時、女性が演ずる方がより「写實的」になる。歌舞伎では、男性が女性の役をつとめるため、映画や新劇のような「写實的」な描写はできない。だが、女形という不自然な存在はそれ自体が超自然的であり、女性の幽霊のような役柄を演ずる際には有利な面がある。女形それ自体が不思議な存在であるから、かえって不思議な存在者を表現することができるのだ。

## 能と鎮魂

永原順子

(高知工業高等専門学校准教授)

能は、よく「鎮魂の芸能」と言われる。確かに、亡霊や怨霊などが多く登場し、それらが成仏を願ったり、調伏されたりする。

中世において「鎮魂」とは、「フシギなコト」すなわち怪異を、祈祷やまつりあげなどの公的な手段によって解決することである。山田氏によると、国家の鎮魂の意識<sup>(1)</sup>とは、「靈魂の鎮魂は純粹に精神的問題にあるのではなく、政治的問題と密接にからみついていた」とある。

能における鎮魂と、国家的な鎮魂は同じだろうか？

「不思議やな・・・」「不思議の御事かな」など、「不思議」という言葉は能にもよく出てくる。怪異学会で語られる「フシギなコト」に共通する点もあるが、能の場合は公のものではなく、個人の感情やその場に限られた私的なものである。能の話が終わればその「フシギなコト」は一応の解決を見る。

また、能はドラマであるということも忘れてはいけない。人びとが生々しく感じる「フシギなコト」を畏れてまつりあげするというのではなく、物語として成立したものを舞台にあげているのである。もっと言うと、「フシギなコト」の怪異や脅威を受け身的に反応するのと違い、「フシギなコト」を積極的に描いている、という違いとなる。もちろんその姿勢は、能に先行する物語や絵巻などにも共通する。

よって、さきほどの疑問に対する答えは

NO である。能は鎮魂の芸能ではない。鎮魂というよりはむしろ、“魂”のあり方について当時の人々（作者、役者、観客など）が表現したのが能という形式なのであろう。

国家における「怪異」「鎮魂」とは異質なものがそこにはある。その異質なものを組み立てていったのは、当時の人々の「魂」に対する興味である。彼らは当時における知識、思想に裏付けられた当時の“科学”で、非常に理性的に「魂」を料理し、表現したのである。

“科学”？と首をかしげる方もいらっしゃるかもしれないが、考えてみれば、怪異も科学も、「フシギなコト」をなんとか解き明かしたいという人間の欲望が出発点なのである。解き明かす手法や結果は異なるが、どちらも人知の及ばぬ領域に挑戦した人びとの足跡である。ひよっとすると、技術大国ニッポンを支えている柱の一つはそのあたりにあるのかもしれない。

ただし、怪異と科学の共通点は他にもある。何かを解き明かせばさらに未知の領域が広がっていく。闇はつきない。「フシギなコト」に恐れながらも手を伸ばし、挑戦し、そしてまた次の「フシギなコト」が・・・というサイクルは遥か昔から行われ、そしてこれからも続いていく。芸能もその一つである。その豊潤な繰り返しの世界から様々な文化や技術が生まれたことを忘れてはならない。

(1) 山田雄司「源頼朝の怨霊観」『中世仏教の展開とその基盤』2002.7、pp.281~305

## 鉢叩きの七兵衛考 —折口信夫の芸能論・私論—

村上紀夫

(東アジア恠異学会会員)

事務局から与えられた課題は「折口信夫の鎮魂論を芸能史の視点から批判せよ」というものであった。近世を主たるフィールドとする報告者の力量を大きく超えるものであり、今回は自分なりに折口の芸能論・鎮魂論を整理することで責めを塞ぎたいと思う。

聊か奇妙な表題は、柳田と折口が対談したときに「まれびと」に話題が及んだときの柳田の発言のなかで飛び出した言葉である。マレビトの中に祖霊とか祖先神という観念は含まれるかという問いに対して、折口は「常世国なる死の島、常世の国に集まるのが、祖先の霊魂で…男と女と、各一種類の霊魂に帰してしまい、簡単になってしま」い、「個性ある祖先を眺めません」と答えた。これに対して、柳田が投げかけたのが「常世から来たとみるか、または鉢たたきの七兵衛と見るか、受け方だけの事情ではなかつたらうか」という、冷笑ともいえる発言であった。

折口は芸能研究を「何事も発生学風に研究して行く」と宣言した。「発生学」とは生物学の一分野であり、当時影響力を持っていた社会ダーウィニズムが背景にある。折口はヘッケルなどの影響のもと芸能の「発生」について思索を重ねた。ここで折口は、文化の多元的な発生を否定しているわけではない。ただ、方法論として、便宜上は一括して“一民族の原始信仰”として論じるという方法をとった。その結果、「私の研究の立場は、常に発生に傾いてゐる」という折口自身も一元論的な議論をするようになる。

さて、ここでもう一度冒頭で見た折口と柳田との対談を振り返る。折口は「常世の国」にいる個性をもたない「男と女と、各一種類の霊魂」が「単に村の祖先として戻ってくる」のがマレビトであり、後に「分割して考える」ようになるという。一方で、柳田の議論はまったく逆だ。「家々の一族というものが自分の祖先を祀り…優勝劣敗みたいなものがあって…優れた神ならばよその神様でも、客神でも祀っていい、というふうになった」という。家どうしの交渉のなかで「優勝劣敗」、すなわち神の淘汰が行われていくということになるという多元論である。

対談後、折口の死の前年に公刊された「民族史観における他界観念」は、上野誠が指摘するように柳田への回答であろう。柳田の祖霊論をふまえて、「近世神道家の合理論」以下切り捨てて「もつと複雑な霊的存在の、錯雑混淆」を指摘する。そこでは、上野も指摘しているように祖霊も多様な霊魂のひとつとする多元的霊魂論・多元的他界論が展開する。

対談の際の論点を敢えて整理すれば、折口は一元論・柳田が多元論であった。しかるに、ここでは折口は柳田を一元論の枠に押し込めて、多元論によって批判しているのである。折口が対談の時と攻守を代え、多元論の立場から相手の批判しているとすれば、「ぶれ」とみることもできるだろう。だが、実際には折口自身が多元的な発生は認識していた。一回転して、原点にもどつたにすぎない。

パネルディスカッション記録

【第一部コメント 榎村寛之<sup>斎宮歴史博物館学芸普及課長</sup>】

室町時代から確認される古浄瑠璃は芸能の民が語る唱導文学と呼ばれるもので、その内容はごった煮のエンターティメントであった。井上報告でもあったように歴史物語や寺社の靈験譚を中心に、残酷さやエロティシズム、スペクタクル、怪奇趣味を伴うものである。浄瑠璃の中にはその延長線上にある「スペクタクルなフシギ」を扱うものがあったが、元禄時代から「人の心のフシギ」がテーマとして登場してくる。『曾根崎心中』の、なぜ死ななければならないのか、なぜ裏切られるのか、というテーマは一種のサイコホラー、怪談としても理解される。これは一つの作品の中に併存する。例えば『平家女護ヶ嶋』では、俊寛の「凡夫心」という近代にも通じる要素と、俊寛により渡海した千鳥の惨殺という残酷描写がともに語られる。

横山報告が扱った 1800 年代の歌舞伎はスペクタクル要素を継承している。鶴屋南北が描くそれはエンターティメントとしての怪異であり、役者が演じることで幽霊はキャラクター化していく。鎮魂や恐怖とは切り離されるのである。

では元禄時代に成立した後者のテーマはどのようなのか。南北を継承したとされる河竹黙阿弥は怪談を書かない。三遊亭円朝の原作を歌舞伎化した『真景累ヶ淵』はリアリズムの中の怪談話として、この路線を継承したともいえる。

ただ、これは横山報告が論じた江戸歌舞伎に限った話である。上方歌舞伎では、たとえば『怪談乳房榎』という同じく円朝の原作による作品がある。市川右団次など、ケレン味の強い役者の流れは現在の市川猿之助につながる。こちらの流れをどう位置づけるかについては今後の課題となろう。

【第二部コメント 大江篤<sup>園田学園女子大学教授</sup>】

怪異学のスタンスとして、現在の我々の言葉と、歴史的に構成されてきた言葉とは使い方が違っており、その違いを抑えていく必要があるということがある。

「怪異」もその一つで、本来の意味は「フシギなコト」を政治的に説明する上で用いられた言葉であった。「祟り」や「怨霊」も同様で、「怨霊」は政治的な問題の中で語られ、その語りは情報の発信と受信の枠組みのなかで理解されるべきものである。見えないものをどう説明するかは時代ごとに変化していくのであり、「能」もその時代に即したあり方であったのだろう。

折口信夫の語る「鎮魂」も、今日我々が考える「慰霊」のニュアンスとは異なる。折口の発想は古代の「鎮魂祭」であり、魂が弱まると体から遊離するので、それを体の中に落ち着かせる必要があるという理解がもとになっている。このほかに『令集解』の中に、墳墓に仕える「遊部」という、「凶厲魂」を鎮める存在が確認され、彼らが芸能を行うとされている。これらの記事から折口の鎮魂論は組み立てられている。

古代における「慰霊」としての「鎮魂」という理解は、1970年代から、たとえば梅原猛氏『隠された十字架』などによって提示され、一般化していったもので、この議論が出た背景には靖国神社の法制化問題があったと思われる。現在、東日本大震災について、NHK のドキュメンタリーなどで「死者の出現」などの語りを取り上げられ、それと関係して東北の盆踊りなどが取り上げられる。しかし盆踊りは死者を慰めるものか、死者そのものを演じているのかということは議論が残るところである。もう少し丁寧な議論が求められるところであろう。

### 【第三部 討論】

大江篤氏を司会として討論が行われた。

まず、会場からの質問ペーパーへの回答が行われた。そのなかで、登壇者全員への質問として、見えないもの、わからないものの理解について近代科学と近代以前のあり方はどう違うのかと質問があった。

井上氏は、浄瑠璃の『曾根崎心中』について、心中事件に関する速報性では歌舞伎に劣るため、心情への解釈で観客の共感を呼ぶものとした。そして、事実性の積み重ねが科学だとするならばそのアプローチは科学とは異なるものとした。横山氏は、寺田寅彦の随筆「化け物の進化」において、自然界の不思議さを百鬼夜行絵巻、怪談・怪異は科学教育だとされていることから、解釈は異なるがその姿勢はそれほど差はないのではないかと述べた。それに関連して永原氏は、能において、驚きは演出として用いられている。音や地響き、花びらが突然降るといった不思議なことは現れるきっかけとして用いられていることを述べた。村上氏は、柳田國男・折口信夫の研究の原点には神秘体験があり、彼らはそれに論理的解釈を加えようとする中で学問を作り上げていったことを指摘した。

最後に榎村氏は、四氏の発信者の観点とは異なる受信者の視点から考えたい、として、恠異学会が扱うテーマとしての「権力」の問題と関わる「天人相関説」について述べた。それは災害などの現象をどうとらえ対処するかは政治の責任であるという思想であるが、これは権力者が知識を持って現象を説明することで民衆を支配するために用いられ、このような怪異についての権力と民衆との関係は室町時代以降解体し、江戸時代以降は民間の学者が担うようになったというのが恠異学会の現在の成果であるとした。その上で、わからないことについての説明を求める人々は、説明の内容よりも説明する個人への興味を強く持つ、それは説明を権力者に求め

るという姿勢と通底するところだが、近年の科学報道について同様にも見られ、それは王権が本来持っていた情報とメディアが科学者とマスコミに分有されることによるところも大きい。ネガティブな意味でも古代と現代には変わらないところがある、と論じた。

続いて第一部の内容についての討論が行われた。横山氏は井上氏に対し、①『賀古教信七墓廻』はどのように評価されているのか、②またそれを研究対象とした理由について質問があった。井上氏は、①近松研究者でなければ知らない作品であり、研究者の世界でも全集の解説でなければ言及されない作品である。近松の時代は新作を上演していく時代であり、人気があると再演が繰り返され古典化していくが、『賀古教～』に関しては再演がないので人気がなかったのであろう、但し『曾根崎心中』も事件性が中心の作品で、近代になるまで再演がなかったことは注意しておきたい、と述べた。そして『賀古教～』が人気がなかった理由として、残酷さや地蔵菩薩の出現などの描写が評価されなかったからではないかとした。また、②これを研究対象としたのは近松が尼崎を扱っている作品を調べたところ、まず『天神記』、ついでこの作品ぐらいしか尼崎を扱っていないことに気づき、そこから研究を始めたと述べた。

続いて井上氏から横山氏に対し、歌舞伎では役者の得意・不得意にあわせてあて書きを行うことがあるが、尾上松助と鶴屋南北の怪談狂言は二人あつてのものか、それとも同じ時代に似たような存在はいたのかという質問があった。横山氏は、松助は普通の芝居は不得手だったようで、南北もそれまで不遇であったことからすると、二人が出会ったことが重要であったように思うとし、その上で時代的な背景として、香川雅信氏がいう「妖怪革命」、すなわち妖怪は娯楽であるという意識が都市部に広く共有されるという現象がこれ以前に起こっており、それゆ

え、芝居がエンターティメントとしての怪異を取り入れやすかったのであろうとした。更に横山氏は榎村氏のコメントに対して、円朝の作品を歌舞伎化したのがケレンが得意な上方の役者であったことは重要で、江戸歌舞伎は明治以降変質し、仕掛けを用いる芝居を上演しないようになり、『四谷怪談』も古いケレンの演出は上方によく残っている。権力志向というか、中央の流行が影響しやすい江戸歌舞伎に対して、上方歌舞伎をどう扱うかは重要であるとした。

第二部の内容に関する討論では、村上氏から永原氏に対し、複式夢幻能の、どんなテーマでも魂の語りとして扱えるという枠組みの優秀さは世阿弥によるものか、その位置づけについて質問があった。永原氏からは、今後の課題としたいが、ただ夢幻能が枠組みとしてすぐれているかは、そこからの変質として生者のみが登場する作品もあるので一概には言えないと思う。むしろシテとワキという関係の安定性と柔軟性をとらえるべきとの答えがあった。

続いて永原氏から村上氏の報告で課題となった「受け手・観客の問題」に関連して質問があった。その場を支配する空気に従って「信じているふり」をする、その空気の支配はどこからくるのか、社会・経済との関係なのか、芸能に関する「半笑いの余裕」はどこから来るのか。村上氏は、むしろそれこそが芸能の本質ではないか、たとえばホラーをホラーたらしめているのはうそだと知りながらも、あるかも知れないというところにある。万歳師が手ひどく追い出された時に発する呪いの言葉の事例をあげ、「半笑い」の裏返しとして「半分本気」の恐怖があり、そのあたりに演技手と観客の無言の了解を考えるヒントがあるのではないかと答えた。

最後に司会から榎村氏に今回のシンポジウム全体について発言が求められた。

榎村氏は、井上氏が指摘した近松の時代の屋根のない芝居小屋と、現在も地方の芝居に残る

南北の時代の屋根のある芝居小屋との違いから、一定のスポンサーがいることで成立するのが南北の時代の芝居であり、仕掛けのある芝居はそれを前提として成立するのではないかと、情報・メディアの問題にスポンサーを加えて考えるべきだと述べた。

その上で折口が若いころ見た芝居役者に、市川右団次という人物がいたことを紹介した。同じ市川小団次の養子であった左団次が江戸に出てリアリズムを重んじる芝居で評価されたのに対して、ケレンを得意とするが故に評価が低かったこと、また折口は随筆「まちかどの戦死者」で役者の中村魁車の大阪大空襲での死を女形の美しい死と現実の醜い死を二重写しにして描いているが、その魁車は歌舞伎小屋、即ちスポンサーの子から役者になり、初代中村鴈次郎の相手役の一人で、中村梅玉は妻が似合うが魁車は妾が似合うとされており、独特の色気があったことを指摘し、ケレンや色気、微妙なズレを折口は愛したのだとした。そして、この微妙なズレの一つである女形の独特の空気というのは、男性の芸能である能から来た可能性があり、それは足利義満と世阿弥のように男色関係が伴うものであった。折口も同性愛者であり、芸能者もマジョリティの支持を受けるマイノリティであることを考えるならば、芸能と差別という問題にも直面することになるだろう、と述べた。

最後に芸能の多様性に現れる時代性の違いという問題や、芸能を見る観客に共通する「半笑いの余裕」といった視点は、今後、中世後期以降の怪異学を考える上でも重要なポイントになるのではないかと、として議論をしめくくった。

(文責：久禮旦雄

三重大学非常勤講師・東アジア怪異学会会員)

# 彙報

## 地域連携推進機構 統括会議記録

### 【尼崎市】

尼崎市企画財政局政策部：立石孝裕課長

尼崎市企画財政局政策部：高村美帆

### 【尼崎商工会議所】

尼崎商工会議所産業部：小林史人部長  
3名

### 【地域連携推進機構運営委員】

人間健康学部：山本起世子教授

総合健康学科：藤澤政美准教授

食物栄養学科：餅美知子准教授

人間看護学科：野呂千鶴子教授

人間看護学科：竹元恵子准教授

児童教育学科：影浦紀子講師

生活文化学科：永村悦子准教授

幼児教育学科：倉科勇三准教授

児童教育学科：大江 篤教授

### 【地域連携推進機構事務局】

地域連携推進機構：榎本匡晃課長

教学支援部学術研究支援課：西田英一  
11名

### 第1回 統括会議

日時：平成25年6月13日

17:00～18:00

場所：園田学園女子大学特別会議室

出席者：15名

議題：

- (1)地(知)の拠点整備事業申請について
- (2)連携プロジェクトについて

### 第2回 統括会議(第5回 運営委員会)

日時：平成25年7月11日

17:30～18:10

場所：園田学園女子大学特別会議室

出席者：14名

議題：

- (1)地(知)の拠点整備事業1次審査通過について
- (2)その他 ボランティア報告

### 第3回 統括会議

日時：平成25年8月8日

17:00～18:00

場所：園田学園女子大学大会議室

出席者：12名

議題：

- (1)地(知)の拠点整備事業採択の報告
- (2)8月7日文部科学省採択大学対象説明会について報告
- (3)まちの支援員について
- (4)その他 ボランティア報告

### 第4回 統括会議

日時：平成25年9月5日

17:00～18:00

場所：園田学園女子大学大会議室

出席者：11名

議題：

- (1)地(知)の拠点整備事業採択についての対応状況報告  
対応状況回答(資料)
- (2)地域志向教育研究応募  
地域学修科目から  
地域看護  
食育  
健康  
公民館講座  
語学教育(国際交流)
- (3)まちの支援員  
総合生涯学習センターの状況 報告

その他

(1)報告

- ① 中央公民館市民講座
- ② 湯遊サミット
- ③ 大庄公民館 防災計画
- ④ 歴史の旅 in 尼崎
- ⑤ けやき祭学外参加者
- ⑥ 尼いもボランティア
- ⑦ 塚口お見合いイベント
- ⑧ 武庫川コスモス園

### **第5回 統括会議(第8回 運営委員会)**

開催日：平成25年10月10日(木)

17:00～18:00

場所：5号館3階大会議室

出席者：13名

議題：

- (1) 地域志向教育研究申請の現状(報告)  
申請プロジェクト一覧表(10/3資料)
- (2) アセスメント項目について

その他

(1)報告

- ① 中央公民館市民講座
- ② 湯遊サミット
- ③ 大庄公民館 防災計画
- ④ 歴史の旅 in 尼崎
- ⑤ けやき祭学外参加
- ⑥ 尼いもボランティア
- ⑦ 武庫川コスモス園
- ⑧ 市報あまがさき11月号座談会

### **第6回 統括会議**

日時：平成25年11月14日

17:00～18:00

場所：園田学園女子大学特別会議室

出席者：13名

議題：

- (1) 地域志向教育研究申請の現状(報告)  
申請プロジェクト一覧表
- (2) アセスメント項目について
- (3) 外部評価委員会(11/1)実施について報告
- (4) 文部科学省主催シンポジウム(11/8)「地域再生と地(知)の拠点としての大学への期待～大学と地域が連携したひとづくり、まちづくり地域再生への歩み～」報告

その他

- (1)研究結果の帰属
- (2) ボランティア報告

### **第7回 統括会議**

日時：平成25年12月12日

17:00～18:00

場所：園田学園女子大学特別会議室

出席者：13名

議題

- (1) 地域志向教育研究について
- (2) 地域志向教育研究申請の現状(報告)
- (3)平成26年度地域志向教育研究募集について
- (4) 経験値評価システムについて
- (5)広報用パンフレット
- (6) ボランティア報告
- (7) i-Pad利用
- (8)まちの支援員養成講座、年度末シンポジウム

### **第8回 統括会議**

日時：平成26年1月9日

17:00～18:00

場所：園田学園女子大学特別会議室

出席者：13名

議題：

- (1) 地域志向教育研究申請の現状(報告)
- (2)そのだの地域連携VOL.3 について
- (3)経験値評価システム広報用チラシ(報告)
- (4)年度末シンポジウム詳細説明
- (5)ボランティア報告

その他

まちの支援員養成講座(案)=準備講座として  
地(知)の拠点整備事業ロゴシール(案)  
地域福祉推進計画 概要版

### **第9回 統括会議**

日時：平成26年2月13日

17:00～18:00

場所：園田学園女子大学特別会議室

出席者：12名

議題：

- (1)文部科学省 平成26年度COC説明会等(報告)
- (2)大学の社会貢献シラバスについて
- (3)経験値評価システム進捗状況について
- (4)年度末シンポジウムについて

- (5)社会福祉協会との協議について  
地域志向教育研究申請の現状（報告）
- (6)「まちづくり解剖学 尼崎」について
- (7)そのだの地域連携 VOL.3 について  
ホームページについて
- (8) ボランティア報告

（記録：榎本匡晃）

### 地域連携推進機構 運営委員会記録

#### 【地域連携推進機構運営委員】

人間健康学部：山本起世子教授  
 総合健康学科：藤澤政美准教授  
 食物栄養学科：餅美和子准教授  
 人間看護学科：野呂千鶴子准教授  
 人間看護学科：竹元恵子准教授  
 児童教育学科：影浦紀子講師  
 生活文化学科：永村悦子准教授  
 幼児教育学科：倉科勇三准教授  
 児童教育学科：大江篤教授（委員長）

9名

#### 【地域連携推進機構事務局】

教務課：中塚真由美課長  
 学生課：竹腰健吾課長  
 キャリア支援課：上野香寿美課長  
 総合生涯学習センター：榎井かず美課長  
 教務課：雑喉隆宏  
 学術研究支援課：西田英一  
 地域連携推進機構：榎本匡晃課長

7名

計 16名

#### 第1回 運営委員会

開催日：平成 25 年 4 月 25 日（木）

17:00～18:10

場所：1号館2階 第2会議室

出席者：9名

##### 1、大江委員長より説明

- ・ 地（知）の拠点整備事業の概要
- ・ 本学の方向性について
- ・ 本学の組織体制、事業概要イメージ、尼崎市

との連携のあり方

（尼崎市の各地区特性と現在の連携内容、今後考えられる連携例等）

- ・ 尼崎市との現在の連携状況、部局等の説明
- 2、出席者からの意見・質問等
- ・ カリキュラム変更に関する内容
  - ・ 組織に関する内容（学生委員を配置した方がいいのではないかと等）
  - ・ 予算内容について
- 3、次回の部会開催に向けての依頼
- ・ 概要の具体化、可視化と申請書作成に向けて下記内容を委員に依頼
  - ・ カリキュラムツリー（マップ）の作成（どの科目がどの科目とつながっているか等）
  - ・ 尼崎市との具体的な連携イメージについて

#### 第2回 運営委員会

開催日：平成 25 年 5 月 2 日（木）

17:00～18:10

場所：5号館2階 特別会議室

出席者：8名

##### 1、大江委員長より配布資料の説明

- ・ 文部科学省第2期教育振興基本計画（答申）について
- ・ 互助、共助による活力あるコミュニティーの形成
- ・ 課題探求力の修得  
↓  
COC構想について
- ・ 学部・学科を超えた横断的なものに
- ・ 5年後には12プロジェクト
- ・ 経験値教育の可視化  
新しい教育評価システム構築の必要性  
人・地域とのつながりを数値化できないか
- ・ 予算の考え方の説明
- ・ 委員への依頼  
授業名  
カリキュラムツリー  
2年生でのプロジェクト

経験値の指標

- ・ カリキュラムは平成 27 年度以降しばらく変更をしないという前提。

## 2、出席者からの意見・質問等

- ・ 看護学科のカリキュラムツリー、資料の説明、まちの保健室の内規説明（竹元）
- ・ 看護学科での実際に行っている市内各地域との連携（野呂）

園田地区での健康教育

武庫地区復興支援住宅での出前講座

大庄地区でのまちの保健室、等

- ・ 2 年次のプロジェクトは必修ではなく選択科目の方がよいのではないかと（山本）  
時間割の工夫。学部共通科目への追加等の方法もあるのではないかと

↓

1 年間しっかり行う科目と夏休み期間などの 3 日間でやる科目の組合せも考えられる。

- ・ 看護学科の地域実習等を通じて、市内各地区毎の地域特性・課題が見えてきている（野呂）
- ・ データ類については市からもらうなどして客観性の高いものを使う方がいいのではないかと（藤澤委員）
- ・ 授業には 5 年が経過した後も含めて教員が必ず同行して指導しなければならないのか（餅）

## 3、次回の部会開催に向けての依頼

下記内容を委員に依頼

- ・ カリキュラムツリーの作成
- ・ 2 年次生での授業名（案）
- ・ 経験値の指標（案）
- ・ 考えられるプロジェクト（他学科との連携のプロジェクト）

\*看護学科はまちの保健室、地域看護へ至る関連科目名・内容（実習ボランティアなど）及び関連公共機関名

## 第 3 回 運営委員会

開催日：平成 25 年 5 月 9 日（木）

17：00～18：10

場所：5 号館 2 階 特別会議室

出席者：9 名

### 1、大江委員長より配布資料等の説明

- ・ 先週の依頼事項の確認
- ・ 明日以降のスケジュールの確認

### 2、1・2 年次での取り組み内容についての確認

- ・ 竹元委員の資料について説明
- ・ シンプルに「つながりプロジェクト」という名前でもよいのではないかと（山本）
- ・ 指示されないと動くことのできない学生が多いので、自分で考えて工夫させる仕組みづくりが必要
- ・ 最初から 12 プロジェクトでなくてもよいのか → よい
- ・ 学科の専門分野をベースに考えてもよいのか → よい

考えられるプロジェクト案の説明

- 基礎学力定着のための支援
- 子育て支援
- 公民館における市民企画講座（地域現代学講座）への参画
- 杭瀬小学校区連携会議による地域づくり
- 災害時の対処、防災に向けての取り組み
- 障害児・者、健康障害を持つ人が住みやすい街づくりとレスパイトサービス
- まちの保健室での子育て支援

・ 商店街活性化のプロジェクトも学科によっていろいろな視点でできるのではないかと（野呂）

・ 総合健康学科で行っている、庄下川を綺麗にする環境のプロジェクトがあってもいいのではないかと（山本）

↓

総健としてはゼミ単位で行っているため授業ににくい。スポーツ関係はクラブ単位で行っていることもあり課題が多い。実際に関わるには基礎学

力を身につけてからでないと単なる遊びに終わってしまう恐れがある。

環境に関しては総合健康学科の学びと直接的に関係が薄く感じられるので学部・学科のラインナップとある程度リンクさせておいた方がいいのではないか（藤澤）

- ・ ウォーキングマップづくりなどもできるのではないかと
- 様々な学科が関わることができる。

### 3、その他

下記内容を委員に依頼

- ・ 様式の制約上、シラバスの科目の見直しを週明けくらいまでに
- ・ 明日以降のスケジュールの説明

## 第4回 運営委員会

開催日：平成25年5月16日（木）

17:00～18:10

場所：5号館2階 特別会議室

出席者：11名

### 1、大江委員長より今後のスケジュールの説明

- ・ 先週の依頼事項の確認
- ・ 明日以降のスケジュールの確認

### 2、申請資料の説明

（ポイントの説明）

### 3、事業名称の決定

9案の中から選定

- ・ 「まち」という表記は意味合いをどう捉えるかわかってく（山本）
- ・ 事業名称が地（知）というものなので、地域、大学という文言が入っている方がいいのではないか（藤澤）
- ・ キャリア支援のGPの時もわかりやすさがポイントであったよう（大江）

以上のような意見の結果、「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」に決定した。

### 4、各委員からの意見

- ・ 様式1で記載する連携先は尼崎商工会議所だけでよいか
- ・ 様式2で尼崎の危機的な状況をもっと記載した方がいいのではないか
- ・ 児童教育学科や幼児教育学科が現在行っている活動もいくつか書けるのではないかと
- ・ 同じことを記載しているのであれば数値を合わせておく必要がある
- ・ P15の自治体との関わり箇所は山本委員が修正
- ・ P10の教育組織は教育組織の説明になっていない
- ・ 尼崎特有の地名などにはルビを入れるなどした方がよい

### 5、その他

これから申請までのスケジュールについて説明

- ・ 意見等あれば、土曜日中にももらえれば反映したい
- ・ 外部資金が何かあれば教えてほしい
- ・ 今回もし申請に通らなくても、方針は決まっているので科目等は立ち上げていく予定

## 第5回 運営委員会（第2回 統括会議）

開催日：平成25年7月11日（木）

17:00～17:30

場所：5号館3階 特別会議室

出席者：10名

### 1、大江委員長より報告

- ・ 1次審査通過の報告
- ・ 面接審査について連絡
- 日時は7月19日 15時～
- 出席者は学長、大江委員長、榎本課長、尼崎市と尼崎市商工会議所からそれぞれ1名を予定しているが人選については明日までに連絡が来る予定
- 面接審査に向けてのスケジュール確認 7月14日 10時40分からリハーサル

### 2、今後の進め方についての確認

- ・ 平成27年度、28年度に向けての確認事項

- 統括会議とプロジェクト準備勉強会を月1回のペースで開催
- 学生地域連携推進委員の選出について。2学期からスタートさせたい
- 「大学と社会貢献」科目について  
7月17日にカリキュラム委員会と共通教育委員会を開催予定
  - ・ 次年度の概要
- 金曜日4限を予定しており、委員の各先生方には2回から4回程度の回数で尼崎市と連携した授業をコーディネートしていただきたいと考えている

### 3、その他

下記内容を委員に依頼

- ・ 大学コンソーシアムひょうご神戸の学生プロジェクトプランコンペ2013への参画
- ・ ビジネスプランコンペ edge2014 への参画

面接審査に向けての留意事項等

- ・ 過去のGPでは取り組みが全学体制であるかということ、予算終了後の継続性について質問があった
- ・ 面接審査では横のつながりと教学改革を前面にしていくのがよいのではないか

## 第6回 運営委員会

開催日：平成25年8月8日（木）

12:25～12:55

場所：5号館3階 大会議室

出席者：12名

### 1、大江委員長より報告

地（知）の拠点整備事業採択の報告

- 文部科学省から示された13項目について説明（ポイントのみ抜粋）
  - ・ 「大学の社会貢献」科目は必修化すること
  - ・ 履修人数、履修科目数など数値化が求められている
  - ・ 文部科学省からの視察も入る予定
  - ・ ケースワーク、フィールドワーク、課題解決型、アクティブラーニングなどの授業を実施していく必要

### ● 組織構成についての説明

- ・ 別紙の組織図の通り8月12日付で辞令を発令したい
- ・ 組織図記載の部門長についても依頼をしたい
- ・ 事務方については契約職員を1名採用するが、補助終了後も継続して人事配置を行う必要がある
- ・ 地域志向教育研究費審査も担当いただかなければならない

### ● その他

- ・ FDやSDなど何人の人に学長が説明を行ったのかなど数値を報告する必要
- ・ アンケートについては授業評価アンケートとともにWEBにて実施予定
- ・ TA（SA）の予算については上級生が下級生の授業に入る形態は可能

### 2、今後の進め方についての確認

- 「大学社会貢献」の内容は早急に詰めていく必要がある
- 経験値評価システムは児童教育学科で試験的に無料実施するリアセックのジェネリックスキルの指標を取り入れることができないかも合わせて検討していく
- 5年間の中で連携地域を伊丹や西宮などに広げていくことは可能

### 3、その他

- 大学コンソーシアムひょうご神戸の学生プロジェクトプランコンペには吉永先生、軟式野球部、児童教育学科の3組が応募をしてくれる予定

## 第7回 運営委員会

開催日：平成25年9月19日（木）

10:45～11:35

場所：1号館2階 第3会議室

出席者：13名

### 1、地域志向研究費について

- 本年度中に25万円×10件を予定
- 締切は9/27  
提出予定案

- ・ 大江先生 杭瀬小学校区まちづくり活性化プロジェクト
- ・ 堀田先生 小中学校の教員向けの教育総合センターとの情報機器の教育での有効活用
- ・ 人間看護学科から高齢者向け
- ・ 人間看護学科から在宅のものを調整中（なければ、子育て支援竹元先生が申請）
- ・ 保健士の業務の影響力（未定）
- ・ 栄養士の再教育（未定）
- ・ 小学生向け環境教育（未定）

#### 質問

- ・ 研修会の開催というものでいいのか

↓

生涯学習センターとの連携の中で構築していくことが望ましい

明日（9/20）尼崎市立石課長との打ち合わせ時に確認する

#### 2、TAについて

- 3名分の予算をとっている

#### ●推薦の依頼

契約事務職員は、研究員として4月からの公募を考えている。

当面はルーティンワークとして非常勤の雇用とする。

#### 3、経験値評価システムについて

- 半年間でシステムを構築しなければならない

- 客観的なアセスメントが必要でデータベース化を視野にいたしたもの

雑喉氏よりコンペの経緯とプレゼン内容について報告・説明

それぞれの業者の提案を比較・検討した結果ニッセイ・コム株式会社に決定

#### 4、その他

- 外部評価委員決定の進捗状況と人選の考え方について

- ・ 市民では1名公認会計士にお願いしたい
- ・ 9月中に決定したい

#### ●地域連携学生委員会について

まちの相談室との連携を視野に入れて学生会の下に設置し、自主運営とする。

#### ●新しい名刺作成について

### **第8回 運営委員会(第5回 統括会議)**

開催日：平成25年10月10日（木）

16:40～17:00

場所：5号館3階大会議室

出席者：13名

#### 1、地域志向研究申請9プロジェクトについて

- ・ 添付資料の①、③、⑨の学校教育については、尼崎市教育委員会学校教育部長と話し合う機会を持ち、了解を得た。  
但し、これをモデルとして全市の学校に波及効果を望む方向へ進めてほしいとの要請があった。
- ・ 10プロジェクトを採択予定であったが、申請が9プロジェクトしかなかった。全て修正のうえ採択とする。また、連携先はこの後の統括会議上で明らかにし、連携先との協議により研究内容の修正を行う。
- ・ 地域志向教育研究だけのタイトルとし、まちづくりプロジェクトの名称はしばらく付けないでおく。開講していない科目の名称を使うことで誤解を招く。
- ・ それぞれの申請の将来性や広がり、学生との関連性は尼崎市との連携部署と協議のうえ、決定していく。

#### 2、経験値評価システムについて

- ・ アセスメントの決定を先生方にあらかじめ選定をお願いした。  
その結果、知的好奇心、自律性、規範遵守、社会的能動性、多様性理解、共感的態度、情報収集・活用力、問題発見力、論理的思考/判断力、計画・実行力、自己表現力、意見交換力・調整力の社会人基礎力12項目に加え省察力(振り返る力)の13項目とする。これを5項目に表記直しレダーチャートへの表記とする。

- ・ 評価手段として ①設問による評価、②シラバスによる評価、③経験値評価システムによる評価、④例外的評価と考えているが、②のシラバスによる評価をとった①、③、④の手段をとる。

### 3、TA について

## 第9回 運営委員会

開催日：平成26年2月6日（木）

17:30～18:30

場所：1号館2階 第3会議室

出席者：11名

### 1、議題

#### (1)平成26年度 地(知)の拠点整備事業について

(報告) 文部科学省 説明会 (1/17) に出席

- ・ COC 事業 平成26年度 20大学 計70大学 平成27年度は無い。
- ・ 計画通り実施できていない大学は補助金減額の可能性もある。
- ・ 大学教育再生加速プログラム事業 44件の採択。本学も応募を検討。
- ・ 社会人や女性の学び直し教育プログラム ー 36プログラム×3か所 注視していきたい。
- ・ 2月18日(火)の文科省のパネルディスカッションにCOC採択大学として参加。
- ・ 本学が採択された理由として 経験値評価システム。

#### 経験値評価システムの進捗状況

- ・ 未修整の箇所があるが、現状としては概要ができてきた。詳細版参考。
- ・ 使用方法の一般社会人向けチラシなど参考。

#### シンポジウム3月16日実施

- ・ 尼崎市船木顧問、商工会議所小林部長、市民代表猪名寺自治会長内田氏 他
- ・ パンフレット二つ折り→三つ折りのもの作成中。

#### シラバス

- ・ 地域志向科目の数を増やす。  
1年＝大学の社会貢献  
2年＝つながりプロジェクト  
3年・4年に現状ある科目の中で地域志向科目を設定。  
短大においても1年＝女性と社会、2年＝地域志向科目。

#### (2)地(知)の拠点整備事業について(協議)

経験値評価システムの名称

→学生が使用して納得のできる名称に、当面は経験値評価システムをそのまま使用。園田学園女子大学を検索すれば必然的に経験値評価システムとして上位に出てくる。またそのようにしなければならない。

系統だった科目を取得した者に対して本学独自の称号を与える。その名称を今後協議。

#### (3)地(知)の拠点整備事業について(今後)

TAの体制

平成26年度開始に向けて体制が決まりつつある。名簿、勤務等の一覧表を後日整理して提出する。

まちの相談室

予定は1回～2回/週 場所は未定

ハンドブックへの文言を丁寧にわかりやすく。未定では学生が混乱する。

学生向けハンドブックに経験値評価システムを紹介する。2月20日締め切り。

#### (4)その他

地域からの要請

- ・ 尼崎青年会議所 55周年記念行事を開催するにあたって学生の力を企画の段階からお願いしたい。
- ・ (株)北海 インターンシップからスタートした提携を行いたい。
- ・ 兵庫県警 特別な支援を必要とする小学生へのボランティア要請。  
それらを進めていきたい。

生命倫理委員会の回答

- ・ 簡易化は認めない。通常通り分科会を通して本会議にかけることとする。ただし生命倫理委員会の開催回数を月1回から2回に増やして迅速化を図る。

### **第10回 運営委員会**

開催日時：平成26年2月20日

17:30～18:30

場所：園田学園女子大学特別会議室

出席者：14名

1、議題：

(1)地(知)の拠点整備事業アンケートについて（協議）

全学生：卒業対象学生は卒業式（3/13）に実施。

在学生は新年度オリエンテーション時に実施。

（3/27.28）

教職員：4月中旬までに実施。

教員対象は教授会、職員対象はメールボックス利用。

(2)選定取組全国シンポジウムについて（報告）

2/18(火)に実施の件名に参加。

- ・ 次年度は20件程度に減少。

(3) 全国ネットワーク化事業 地(知)の拠点整備事業シンポジウムについて

- ・ 大江委員長、山本、榎本が参加。
- ・

（記録：榎本匡晃）

## **平成25年度大学合同教授会 記録**

### **平成25年6月13日**

報告：平成25年度「地（知）の拠点整備事業」について

報告者：学長（教学支援部長）

出席者：70名

### **平成25年8月8日**

報告：平成25年度「地（知）の拠点整備事業」選定結果について

報告者：教学支援部長

出席者：64名

### **平成25年9月5日**

報告：地（知）の拠点整備事業について

報告者：地域連携推進機構運営委員長

尼崎市企画財政局まちづくり企画・調査担当

出席者：64名

### **平成26年1月16日**

報告：「地域連携推進機構規程」「地域連携推進機構運営委員会規程」

報告者：地域連携推進機構副機構長

出席者：70名

### **平成26年2月13日**

報告：地（知）の拠点整備事業キックオフシンポジウムについて

報告者：地域連携推進機構副機構長

出席者：63名

### **平成26年3月20日**

報告：大学COCキックオフシンポジウム実施について

地（知）の拠点整備事業アンケートについて

報告者：地域連携推進機構副機構長

出席者：58名

## 平成 25 年度 短期大学部教授会

### 平成 25 年 6 月 13 日

報告：平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業」について

報告者：学長（教学支援部長）

出席者：22 名

### 平成 25 年 8 月 8 日

報告：平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業」選定結果について

報告者：教学支援部長

出席者：22 名

### 平成 25 年 9 月 5 日

報告：地（知）の拠点整備事業について

報告者：地域連携推進機構運営委員長

尼崎市企画財政局まちづくり企画・調査担当

出席者：23 名

### 平成 26 年 1 月 16 日

報告：「地域連携推進機構規程」「地域連携推進機構運営委員会規程」

報告者：地域連携推進機構副機構長

出席者：24 名

### 平成 26 年 2 月 13 日

報告：地（知）の拠点整備事業キックオフシンポジウムについて

報告者：地域連携推進機構副機構長

出席者：21 名

### 平成 26 年 3 月 20 日

報告：大学 COC キックオフシンポジウム実施について

地（知）の拠点整備事業アンケートについて

報告者：地域連携推進機構副機構長

出席者：20 名

## 平成 25 年度 評議会

### 平成 25 年 4 月 4 日

報告：平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業」の公募について

報告者：学術研究支援課長

出席者：23 名+同席者 8 名

### 平成 25 年 6 月 6 日

報告：平成 25 年度「地（知）の拠点整備事業」

報告者：地域連合推進機構副機構長

出席者：21 名+同席者 7 名

### 平成 25 年 7 月 4 日

報告：「地（知）の拠点整備事業」の第一次審査通過の報告

報告者：学術研究支援課長

出席者：22 名+同席者 7 名

### 平成 26 年 1 月 9 日

報告：地域連携推進機構規程

地域連携推進機構運営委員会規程

地（知）の拠点整備事業の進捗状況について

報告者：地域連携推進機構課長

出席者：20 名+同席者 7 名

### 平成 26 年 3 月 6 日

報告：地（知）の拠点整備事業〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値評価システムキックオフシンポジウムについて

地（知）の拠点整備事業アンケート実施について

報告者：地域連携推進機構課長

出席者：21 名+同席者 8 名



長家久打久左衛門早朝に來り、お米不届二付一間へ押込置、老母共吟味の為物見長屋に留置し所、女と思ひ油断せし隙に夜にまぎれて親子共欠落したり、其方請人の事なれハ、今明日中に急度尋出すへし、旦那殊外立腹なれば、其元迄如何様な難義に及んも不知し随分出情して尋出されよと言置て立帰ければ、久兵衛肝をつふし、こハ迷惑成事出来せしと大きに動き

「二二三才

是ハ外々の屋敷と違ひ六ヶ敷御家老の事なれば是ハとのやうに云付られんもしれず、よしなき請人に立し事よと悔ながら商売をやめて余多人をやとひ御領内ハいふに不及近郷・近在二日の間尋廻りけれ共、元より右の訳なれハ、逢へきやうなく空敷立帰、三日目に屋敷より催促に逢ぬ、先まつ日延を願はん久兵衛おづくと玄番か屋敷へ行て、門番の権兵衛ハ年久敷馴染なれハ、其事を咄、扱々難義を致也、お米御門を逃出しハ夜中の事にて候やととへハ、権兵衛聞て暮六ツより御門を、御用の外ハ男女共通さす、夫ハ昼の中成へし、我等ハ見付すと答ける久兵衛不審に思ひながら内へ入、家長久右衛門か部やへ行て日延を願ければ、久右衛門申けるハ、御短慮成御主人中々御聞入ハ有まし、此間も申通其元請人の事なれば急度咎めかゝるへし、覚悟せられよとおどせハ、久兵衛迷惑に思ひ、何かな言訳せんと只今御門番権兵衛殿二承候へハ、兩人か出奔致候ハ昼の中成へし、夜ハ御用の外御門の出入難く成かたき由被申候へハ、側に付居られし人々をも御吟味被下へし、弥夜中に出候ひしかといへハ久

「二二四才

右衛門当惑し、夫ハ門番めか言訳ならん、夜中に出奔せしに相違なく、然らハ明日迄日延をゆるすへし、其中に尋出されよと久兵衛を帰し、其由玄番に申ければ玄番聞て、憎き門番め今日中に追出すへし、久兵衛を町内へ預け申付、追て当地追放さすへしと怒りける、存不寄門番権兵衛暇出し故深く恨委細をしりたる事なれハ、此様子を久兵衛にしらせんと思ひ辰巳へ行けるに、久兵衛ハ町預に成難義最中の所へ権兵衛來り、此事を私語けれハ扱ハと驚、久兵衛ハ預けなれハ他出不叶、倅久太郎と女房ふたりつれにて朝比奈藤兵衛か屋敷へ欠込て次第を申、御吟味なし被下候様に歎き訴ければ、藤兵衛此由聞届、詮義致遣すへき由申て親子とも返し、目付役を呼て内々吟味させし所明白に相しれ其趣言上に及ふ、大膳亮殿立腹つよく家來といへ共女の事也、聊の誤りに老母諸共命を取、其上入水を隠し井戸を埋め、出奔と偽領内の町人を預申付難義致させし段家老職に似合さるの振廻言語同断不届至極なれハ、一家中の見せしめ切腹申付へしと仰被出ければ、役人中玄番か屋敷へ立越、仰の趣き述ければ、玄番はいもふしけれ共、申訳立須旧悪遁れなく切腹に及び、一子とてもなけれハ家断絶しける是に仍て蠟燭屋久兵衛誤りなしといへ共、玄番の家断絶せし事なれば、御領内住居之義ハ遠慮致すへき旨申被渡ければ、家内を仕廻しるへの方有ハ大坂表へ出行けり

「二二四ウ

「二二三ウ  
「二二二ウ  
「二二一ウ  
「二二〇ウ  
「二一九ウ  
「二一八ウ  
「二一七ウ  
「二一六ウ  
「二一五ウ  
「二一四ウ  
「二一三ウ  
「二一二ウ  
「二一一ウ  
「二一〇ウ  
「二〇九ウ  
「二〇八ウ  
「二〇七ウ  
「二〇六ウ  
「二〇五ウ  
「二〇四ウ  
「二〇三ウ  
「二〇二ウ  
「二〇一ウ  
「二〇〇ウ  
「一九九ウ  
「一九八ウ  
「一九七ウ  
「一九六ウ  
「一九五ウ  
「一九四ウ  
「一九三ウ  
「一九二ウ  
「一九一ウ  
「一九〇ウ  
「一八九ウ  
「一八八ウ  
「一八七ウ  
「一八六ウ  
「一八五ウ  
「一八四ウ  
「一八三ウ  
「一八二ウ  
「一八一ウ  
「一八〇ウ  
「一七九ウ  
「一七八ウ  
「一七七ウ  
「一七六ウ  
「一七五ウ  
「一七四ウ  
「一七三ウ  
「一七二ウ  
「一七一ウ  
「一七〇ウ  
「一六九ウ  
「一六八ウ  
「一六七ウ  
「一六六ウ  
「一六五ウ  
「一六四ウ  
「一六三ウ  
「一六二ウ  
「一六一ウ  
「一六〇ウ  
「一五九ウ  
「一五八ウ  
「一五七ウ  
「一五六ウ  
「一五五ウ  
「一五四ウ  
「一五三ウ  
「一五二ウ  
「一五一ウ  
「一五〇ウ  
「一四九ウ  
「一四八ウ  
「一四七ウ  
「一四六ウ  
「一四五ウ  
「一四四ウ  
「一四三ウ  
「一四二ウ  
「一四一ウ  
「一四〇ウ  
「一三九ウ  
「一三八ウ  
「一三七ウ  
「一三六ウ  
「一三五ウ  
「一三四ウ  
「一三三ウ  
「一三二ウ  
「一三一ウ  
「一三〇ウ  
「一二九ウ  
「一二八ウ  
「一二七ウ  
「一二六ウ  
「一二五ウ  
「一二四ウ  
「一二三ウ  
「一二二ウ  
「一二一ウ  
「一二〇ウ  
「一一九ウ  
「一一八ウ  
「一一七ウ  
「一一六ウ  
「一一五ウ  
「一一四ウ  
「一一三ウ  
「一一二ウ  
「一一一ウ  
「一一〇ウ  
「一〇九ウ  
「一〇八ウ  
「一〇七ウ  
「一〇六ウ  
「一〇五ウ  
「一〇四ウ  
「一〇三ウ  
「一〇二ウ  
「一〇一ウ  
「一〇〇ウ  
「九十九ウ  
「九十八ウ  
「九十七ウ  
「九十六ウ  
「九十五ウ  
「九十四ウ  
「九十三ウ  
「九十二ウ  
「九十一ウ  
「九〇ウ  
「八十九ウ  
「八十八ウ  
「八十七ウ  
「八十六ウ  
「八十五ウ  
「八十四ウ  
「八十三ウ  
「八十二ウ  
「八十一ウ  
「八〇ウ  
「七十九ウ  
「七十八ウ  
「七十七ウ  
「七十六ウ  
「七十五ウ  
「七十四ウ  
「七十三ウ  
「七十二ウ  
「七十一ウ  
「七〇ウ  
「六十九ウ  
「六十八ウ  
「六十七ウ  
「六十六ウ  
「六十五ウ  
「六十四ウ  
「六十三ウ  
「六十二ウ  
「六十一ウ  
「六〇ウ  
「五十九ウ  
「五十八ウ  
「五十七ウ  
「五十六ウ  
「五十五ウ  
「五十四ウ  
「五十三ウ  
「五十二ウ  
「五十一ウ  
「五〇ウ  
「四十九ウ  
「四十八ウ  
「四十七ウ  
「四十六ウ  
「四十五ウ  
「四十四ウ  
「四十三ウ  
「四十二ウ  
「四十一ウ  
「四〇ウ  
「三十九ウ  
「三十八ウ  
「三十七ウ  
「三六ウ  
「三五ウ  
「三四ウ  
「三三ウ  
「三二ウ  
「三一ウ  
「三〇ウ  
「二九ウ  
「二八ウ  
「二七ウ  
「二六ウ  
「二五ウ  
「二四ウ  
「二三ウ  
「二二ウ  
「二一ウ  
「二〇ウ  
「一九ウ  
「一八ウ  
「一七ウ  
「一六ウ  
「一五ウ  
「一四ウ  
「一三ウ  
「一二ウ  
「一一ウ  
「一〇ウ  
「九ウ  
「八ウ  
「七ウ  
「六ウ  
「五ウ  
「四ウ  
「三ウ  
「二ウ  
「一ウ

「二二五ウ

にてもいたわり又詫言なきは、手討にすへしと怒りければ

家来共恐をなし、お米か手足を繩にてからけ、庭の

古井へ逆に釣けるハ目も当られぬ事共也、玄番ハ久右衛門に

向ひ請人にハ女か白状次第計らふ旨有ハ、今日ハ先帰るへし

母ハ庭へ呼て娘の体を見せ白状さすへし、詫言ハいかやうに

申共取上る事無用也とあらゝかに言付奥へ入れハ、家内ハ

手に汗握り恐れをなし、久右衛門ハ勝手へ出、旦那立腹つよけれ

は某か為に不及、請人久兵衛今日ハ用事なければ先帰るへし

追て沙汰すへしと追帰し、母を奥庭へ廻しければ、此体を

一目見るよりはつといふて井戸の側へ走りより、乱心の如く身を

もめバ、娘ハ苦しみに絶すおめき叫ぶ母ハ声を上げて情なき

事を仕出し斯る責苦を受るとハいか成前世のむくひ

そと井戸の側へ立寄、声も出します泣居たり、お米ハ下より

苦しける声にて、母様助て被下とさも哀成泣声、母

ハ是非なく助んと掬側へ手を付て何程御全義被成

ても工ミなき事なれば、外に申訳とてハなし、何卒御慈

悲に命御助被下ませと手を合泣詫るを、玄番掬か

わへ立出にくき老ほれめ、某に毒害をせし女いかやう

詫る共助るいわれなし、押付あの繩を切落し井の底へ

しつめ、思ひしらせんと奥へ入んとする、母ハ手を述し玄番

か裾に取付を、面動也と踵にて顔を上げ振切て奥へ入、病

後の母親眉間をしたゝかに蹴られ目呉心も消てよろゝ

と庭へ倒れけるに、飛石にてあたまをつよく打、其儘

氣絶しけるか、暫くして起上り我をさへ斯むこき仕

方なれば何程いふ共娘ハ助まじ、いかにお主なれば逆纒の

「二一九ウ

「二〇オ

「二〇ウ

事をあのやうに情なき浮めを見せ、其上命を取んとハ

余り成非義不道の恨ハなき物かとうよくな被成やう是

非に娘をすくわんと立上り身をあせりしか、又井戸側

に取付娘ハいかにと見れば、半日余りも逆に釣置し

事なれハ、惣身の血あたまへ下り腫上り、目口より血流れ

けれハ、母親二目共見もやらす娘を引上助んと、かよわき老

の力にて繩に手を掛引上んとすれ共少もこうかす、井戸側へ足

を踏かけ繩をたくらんとむりに力を入れるに、古井の事なれば

井筒の土きわ朽居ける故、井戸かわくつれ其身も落る

故、是ハと繩へ取付けるに、四方よりかわも土も崩れ込二人か重り

に繩も切、母親・娘諸共に水底へ落入ける、其ひゝき

すさま敷聞へし故、玄番始久右衛門何事そと駆付見れ

は、井戸かわ崩れ繩も切お米も母も見へす、扱ハ親子共

井戸へ落しよと驚さわき、早く引上よと下知すれば階子

よ繩よとひしめく中がわの崩れし故にや、あたりの土井戸へ

なだれ込み、急に上へきやうなかりしに、玄番此体を見て

詮方なくや思るけん、最早死骸を上るに不及次第に此

井戸埋めて仕廻と大勢人を懸て暫時に埋つふし、家

内の男女此沙汰難く申す間敷と嚴敷口を留、夜に

入ければ、玄番邪替を廻らし久右衛門を呼てケ様へにせよ

と私語ければ、久右衛門かしこまり、夜の明るをそ待居たり

### 喜多玄番切腹之事

#### 附蠟燭屋久兵衛大坂へ出る事

斯とハ不知蠟燭屋久兵衛ハ従弟お米か難義と伯母も

帰らされは猶も屋敷へ詫言せんと身こしらへする所へ玄番か

「二二オ

「二二ウ

「二二オ

「二二ウ

然るに喜多玄番ハ大膳亮殿御心に叶ひ出頭第一に  
て家中をなひけし故其心自然とおごり我意の振  
舞多かりしに、此度若君を養君となし 弥 威を  
振ハんと思ひ言上に及ひし所、朝比奈是を察し

其詞をもときし故、大殿御心付しにや、藤兵衛か進

めに随かわせ給ひて若君の御名も定り、夫より玄番ハ

不首尾と成し故、我身の誤りを返り見すして、藤兵へを

妬恨、何卒して仇をなさんと心懸けれ共、忠誠智勇の

朝比奈なれハ、なすへき謀もなく只心の中にもたへ苦しみ

とかもなき家来共を敵敷叱ちらしければ、家内の男

女も恐れ恨ける、折節六軒やより奉公に來りしおよね

といへる針妙廿余りにて美麗成生れ付成しかハ玄番

心を懸、是を口説けれ共おとなしき者故聞不入打過しに、此

程母の病氣とて暇を貰ひ、二・三日も宿へ下り居

けるに、快気仕りし辻玄番屋敷へ戻り、翌日の

朝給仕に出ける所、宵に縫物せし絹針を髪のまま

けめに差置けるか、いかゝして落けるや、汁を替ける

時腕の中へ落入しを不知居けるに、玄番ハ汁を

吸て此針を見付大きに怒り、茶の間・台所の下

女迄ことくく呼付、汁の中へ針を入我に吞せんと

謀 しハといつか仕業成そ、真直に申へしと云ハ皆々 驚

曾て左様の覺なしと云訳すれば、お米夫に心付髪

をみれハ差置たる針見へす、扱ハ落けるよと正直成

者なれば、其針ハ私夕へ縫物を致髪に差忘れ候ひしか

御給仕の節落しと存る也、不調法の段御ゆるし被下

「一七才

へしと顔を赤め差うつむきて詫ければ、外の女共胸を

たいて勝手二入、玄番眼をいからし扱ハ己か仕業よな

主人へ毒害する女一寸もうこくなと、急に家長久打

久右衛門を呼付け、此女ハ我に毒害をなす曲者也、繩掛て

押込置へし、彼か宿・親類共呼寄置へし、我ハ登城

すれば帰宅の節吟味すへしと申渡、其身ハ登城しける

久右衛門ハ主命なれハお米に繩を懸一間に押込様子を尋れば

お米涙に呉て、右の次第を物語、匱相にて針を落せし

計にて、外の心にてハ曾なしと詫ければ、久右衛門尤と思ふなり

烈しき、主人なれば私にゆるさん事もならず、請人・親を呼に

遣しければ、受人蠟燭屋久兵衛・お米か母何事やらんと來

ければ、久右衛門立合て様子を咄御短慮成主人なれハいかやうに

仰付られんも計難しと云聞せければ、共々に詫言せんと

待居たる所へ玄番帰宅仕けれハ、久右衛門待受御留守の中

詮義仕候所へお米義會て別心なく、全く匱相の事なれ

は、何卒御宥免被下候様に請人・親共相願候と取なしけれハ

玄番少しも承引せず、常々しふとき女なれば中々一通

の事にてハ白状せまし、彼めか宿へ歸し中に何者にそ頼

れ、我を殺害せんと計しに相違なし、此上ハ自身に吟味

せんと下部共に云付、奥庭へ引出させ、其身ハ掬側へ立出

己平日主命に随わす、あまつさへ毒害をなさんと 謀

事言語同断也、其分にてハ白状せまし、あれ成古井へ

逆さまにつり置へしと下知しければ、お米声を上只

御ゆるしとのミ泣さけふ、久右衛門も余り気の毒に思ふ、猶も

諫んとするに、玄番大声にて早く逆様につるへし、少し

「一七ウ

「一九才

「一八ウ

いひける者の召使庄吉といふ者、小便たこに草花を懸かけて小籠こかこに買物を入、誠に見苦しき体にて件の人々の休居たるあたりへ彼荷かのにをおろし、たはこを吞居けるをは藤兵衛つくく〜と見て、玄番に向ひ今朝より見廻りし

中に是程見苦敷者みるるしきいまた見当らず、是こそ至極しごくの烏帽子親ならんといへは、玄番もいかに申さるゝ通り今朝より彼程見苦敷ものいまた見当たらすと同敷側そばへ行て、其方ハ当御下にて何れの村、何と申者成そと尋

けれハ、彼見苦敷もの答へて私事ハ三段田村の百性ひやくしやう(ママ)孫左衛門と申者の丁稚庄吉と申者也といへハ、然らハ其方を我々見込て頼たき子細しさい之間苦しうなし

先こなたへ来るへしとて、床机しやうきの前に伴ひけり何心もなく人々の休居給ふ床机の前へ来、不思議ふしぎそふに見廻しうつくまり居ける

### 三段田村庄吉烏帽子親に成事

#### 附御扶持を下さるゝ事

扱藤兵衛庄吉へ申けるハ其方を呼し事外の義にてもなし、爰こゝにおはします御子へ名を付て貰ひたし大義なから烏帽子親を勤呉よといへは、庄吉ハ至極愚しごくぐなる生れ付故、大きに驚返答にも不及、立て行を玄番待と声をかけ其方何と聞や、藤兵衛殿申さるゝ通あの御子に名を付申なは、御ほうひを下さるへし其方ハ大き成仕合者也、早く御名を工夫仕るへしといへハ庄吉曾て聞不入能かけんになふり給へ、名を付させて跡にて脇指にて切ふと言積りやとたごを荷ひ逃にげ

「一三ウ

「一四オ

「一四ウ

出さんとするを、藤兵衛引とゝめ笑ひをふくミ、不審尤もなり心を静めて某か詞を得と聞へし、あの和子ハ当年つちの御生れなれば、百性に名を付させんと思ひ待居たる所へ其方か来懸りし故、幸ひと頼し也、全く余の事に非

す、我は御家中朝比奈藤兵衛也、空言をいふへきかとも丹に?うわに得心させければ、漸々吞込てそふ言訳わけならハ得といひ給ハて我ハ大きに驚たりと、たごをおろし恐れ

けもなく若君の御側へ寄て、扱々うつくしき御子よな左あらハしかり給ふな、こちの親方の子か市蔵なれば、そんなら仁蔵よと御名を付ける、矢立取出し其通認したたメ

追てほうひすへしといへは、忝しと悦ひたこをかたけ立帰ぬ、夫より若君ハ御乗物にて御帰館有、藤兵衛・玄番両士一々右之次第言上に及ひければ、大殿殊外御機嫌きげんにて大蔵か子二ツの蔵至極宜敷名なり、子孫繁昌

の印吉事成と御悦ひ有て、藤兵衛には別して太義なりと厚き御意を蒙り夫より御嫡孫様今日より仁蔵様と号給るへしと御領内へ御触有一両日過て朝比奈か屋敷へ三段田村庄吉を呼寄、此程若君様へ御名を付奉りし御ほうひと有て庄吉一代式人扶持御前より下し置るゝ旨自身申被渡ける庄吉有難しと御礼を申上帰りぬ、此若君御成長の後大蔵太輔殿御家督を継せられ青山播磨守殿と申せしハ此仁蔵とのゝ御事なり

### 喜多玄番非道を行ふ事

#### 附針妙およね同母入水之事

「一五オ

「一五ウ

「一六オ

不幸にして失ひぬ、されは世話に子育ちのなき者は

他人の名をもらひ又賤敷育杯すると聞及ふ、ケ様

のたとへ取にたらずといへ共、子孫の繁盛を思ふゆへ

至極賤しき者を親と名付育なへ成人もすへきかと、夫

故名をも付す差置たり、兩人存寄あらへ申へしと宣へハ

喜多玄番申けるハ御尤の思召に付、しかし一城の若君賤

しき者を親と名付育られん事勿体なき御事なれば

近頃恐れながら御誕生の若君私方へ引取奉り俵と

名付手軽く育奉りなへ御成長うたかひなし、尤昼夜

付添申事なれハ疎略仕へきやう是なし憚ながら御免

の蒙り、私親分に相成申へしと言上しけり、朝比奈

藤兵衛は殿の仰、又玄番か詞をつくく〜と聞て暫く思

案し、玄番向ひ其元の言上一理有といへ共、某所

存に落す、賤敷育られんと有に、其元養君にいた

さるゝ時ハ、賤しきと申者に不非、君臣とハへたつれば

大録を給り執権の数に列す、いはんや侍ハ陪臣といへ

とも八位の位に当るへし、其上に若君を引取養育

あらハ家中の面々ふしんをなし、心得違の事もあらハ

後々に至て貴殿あやまり成へし、君臣和合の道に

あらず此義甚た然るへからず、拙者存するハ大切の若君

なれハ賤敷育申さん事は又宜しからず、されは烏

帽子親と申て名を付る事至て重き事なれば、吉日を

えらみ若君の御供申御領内を廻り、下賤の者を見

立彼に御名を付させ、えほし親と頼なハは御望の通

賤しきを以する古例成へしと詞を正敷申けれハ、大殿

「一〇ウ

聞し召れ藤兵衛か仕方至極面白し、其義宜し

かるへし、玄番か了簡我も不承知也、急き吉日を撰

近々其通計らふへし、兩人孫を伴ひ領分を廻り宜敷

致へしと仰被付けければ、兩人かしこまり奉御前を退

出し、其用意をなしける、さしも出頭第一の喜多なれ

とも此時藤兵衛か忠言にくしかれ、不首尾の体偏に

藤兵へかわさなりと憤り思ひけれ共、仰を請し事

なれハともに支度をなし夫より吉日を撰み延宝六年

己午十月十八日乳母を始女中余多態と軽く出立

藤兵衛・玄番も袴・羽織に例(列力)に付添はるか跡より乗

物二・三丁奥付の者共御供にて忍ひの御心なれハ、町在

ともに触もなく尼が崎中を御廻り有て、辰巳へ出西町へ

懸り、出屋敷へ入らせ給し、暫く御休足有へしと乳母

若君をいたきて茶やの床机に腰を掛けければ、兩人も休

居ける、玄番申けるハ是迄参道すからも賤者も余多

相見へしに其沙汰に不及、御幼君の御供申てかやうに

うか〜と歩行廻る事其意得ず、能かけん人に見立

烏帽子親とせらるへしと遠慮もなくいへハ、藤兵へにつ

こと笑ひ、仰の通是迄貧賤の者余多見当ると

いへ共多く町家の者也、商人ハ有徳といへ共商売に

掛てハ穢をいとわす、然ハ夫を以烏帽子親にハ成難し

又百性ハ貧敷といへ共、国の百性と呼れ国家の根元

といひ、殊に若君つちのへの土の御誕生なれば旁々

以て百性の賤敷者を見立御名を付させんと見合

せしと咄居ける半へ向ふの道より、三段田村百性孫右衛門と

「一二才

「一二ウ

「一三才

細いかやうの筋にて候やと宣けれハ藤兵衛答てされは其故ハ鎌倉源二位頼朝公六十余州の武將にそなはり給ひてより以来北条・足利・織田・豊臣に至る迄凡三十

「七才

余代をしろし召といへ共、諸国の動乱やむ時なく所々に叛逆の心さしを発せし者数を不知、是天理のなす所とハいひながら国政行届さる故也、然るに玄慮法印建武の乱書以て太平記と名付る事、本朝の書に於て治乱を弁へさるあやまり也、撰戦以来の書籍太平記とも号すへき所也。仁君の神武英文を以四海をしつめ

「七ウ

怠徳院の徳明英智にて、日本国中の大小名外様御普代に限らず国主より領主迄江戸に於て屋敷を被下不残其屋敷へ在府をさせて、御公役勤務無之節も式日の出仕仰出され、又領国へ入部の砌ハ奥方若殿姫君等を江戸屋敷に残し置、在国休足の御暇御拝領有事は怠徳公の速をおもん計給ひ先代の武將にハ諸国の大名随うふといへ共、妻子眷そくを領分国々に残し置其身計京鎌倉へ出仕をなし、本国にて我俣二隣国と争論し終にハ謀反の企る輩も有之し故、御当代に至つて妻子江戸に留て人質となし給ふ故元和年中より以来国中の大小名隠謀をおこす事あたわす、誠に古今の治世天下泰平国土民安楽かなるとハ當時の事成るへし、去ハ大殿在国なれハ若殿ハ江戸に詰父子交代をなし給ふ事、御当家の御格式なれば嫡孫無之に於てハ国隠居成難し去ハ入部の節父子御同国ましますといへ共江戸屋敷に奥方孫御を人質に差置事故、国隠居

「八才

叶ふ也、然ハ御前にハ未嫡孫ましまさねハ恐ながら此願調ひかたかるへしと弁舌水の流るゝ如くに延ければ、一座の面々は是を聞、実も流石ハ忠成の執権程有と感心浅からず、大膳亮殿委細を聞届られ一々理に当りたる諫言至極なり、我も孫二人迄持しか共、いか成事にや育難く当才にて相果国隠居の望も不叶、近頃残念成事共と御涙くミ給ふ出頭の家老喜多玄番席を進申上けるハ、其義ハ御愁歎に及ふへからず、若殿大蔵太輔様京都より召抱られ候お益殿と申御妾懐妊致され臨月に程近し、めて度御男子御誕生御座有へし、其上にてハ御望の通り国御隠居被遊然るへしと言上しけれハ、大膳亮殿殊のふ御喜悦有て仰けるは、もし男子出生せハ我存寄の旨有と宣ひ奥御殿へ入給ひけれハ、諸役人各々式礼して退出しける

#### 青山家若殿御誕生之事

#### 附朝比奈喜多仰を請る事

然るに若殿大蔵太輔殿当時江戸参勤也 御国妾おます殿懐妊月満て御男子出生有ければ、早速江戸表へ注進是有、大殿大膳亮殿を始一家中の悦ひなゝめならず、七夜の御祝義相濟、誕生の若君御名の義大殿様より御付進せらるへき旨を役人中言上に及ひける所に大膳亮殿仰被出けるハ、先比存寄といひしハ其事也、名ハ追て付へしとて打捨おかれ、御宮参り等も相済日数を経て、藤兵衛・玄番兩人を召れ大殿仰けるハ其方共存の通先達て孫をもふけしか共

「八ウ

「九才

「九ウ

「一〇才

附り佐野へ新八帰る事

一、新八江戸において再訴之事

附り願書御返へし之事

一、新八訴状を書直す事

附り別家源兵衛江戸へ下る事

一、八人の手代江戸下る事

附り木津屋吉兵衛江戸へ御召之事

一、吉兵衛江戸表不首尾之事

附り嶋田作太夫賄賂を取事

一、嶋田作太夫偽て御目見え之事

附り深川智眼和尚頼まるゝ事

一、長順勘兵衛蜜(ママ)計之事

附り手代兩人役人え立入事

一、吉兵衛女房お里放埒の事

附り手代治吉お里より金貰ふ事

一、吉兵衛役人え付届之御吟味之事

附り馬場兩人召捕るゝ事

一、吉兵衛三ヶ津御払に那る事

附り新八大切四方に発する事

一、堺屋後家妙栄の事

附り文字割御捌之事

一、千切屋忠五郎屋根より落る事

附り解死人を頼ふ事

一、糺町榎屋へ浪人來る事

附り金子かたらるゝ事

一、駕籠昇左兵衛金子拾ふ事

附り河内守様御捌之事

銀之筭

青山大膳亮殿在城之事

附朝比奈藤兵衛明言之事

抑撰州尼崎の城主青山大膳亮幸成と申は

播磨守豊原忠成の二男大蔵大夫幸成御老

にて寛永十二年より青山家はを領す、祿四万八千石

なり、大膳亮殿御在国の砌国家老小出弥左衛門朝比

奈藤兵衛・喜多玄番頭・鈴木新右衛門・佐藤将監

其外年寄諸役人を召れ、大膳亮殿仰出され

けるハ予も年平頭にあまれハ参勤交代も六ヶ敷

其上嫡子大蔵太捕御目見へ任官等も仰付られ

し事なれハ我おもん見るに行年の程も計難け

れハ當時在国なれば病気を申立隠居すべしと

思ふ也、其旨何れ相心得江戸表へ申遣し願奉るへし

との給へハ、家老朝比奈藤兵衛進ミ出申けるハ御尤の

御上意承知仕候得共、御隠居之義ハ兩殿様御同所

の節江戸に於て御月番御老中様へ願書差上られ

御父子様御召の上仰出さるゝ大切の義なれば中々御

国本より御病氣と申上、直に隠居の願と申事決して

相叶かたき義也、御参勤の砌御一門様方御相談の上御願

然るへし、扱又御国隠居と申事至て六ヶ敷訳是有登し

いへは鈴木新右衛門御中言ながら御国隠居六ヶ敷と申子

一五ウ

一六オ

一四ウ

一五オ

一六ウ

早稲田大学図書館所蔵『きむの筭』

釈文作成 尼崎郷土史研究会 古文書解説クラス

『きむの筭』

銀の筭序

元文の始より寛保・延享の終まで予

武林高屋に遊んで正しく見聞して珍

事秘説を具に実記す、尤雑談世上に

あまねしといえとも鳥類の手に握らざるが

如し、包隠して有之故、銀の筭とあらたに

題号し、初中後篇三十巻好人の耳を

あらわんと書写しむる也

烏帽子親

寛延末年菊月

撰者 正木残光

[Redacted]

[Redacted]

青山大膳亮様

銀の筭目録

一、青山大膳亮殿在城の事

附り朝比奈藤兵衛明言の事

一、青山家若殿御誕生の事

附り朝比奈喜多仰を請る事

一、三段田村庄吉烏帽子親に成る事

附り御扶持下さるゝ事

一、喜多玄番非道を行事

附り針妙およね・同母入水の事

一、喜多玄番切腹の事

附り蠟燭屋久兵衛大坂え出る事

一、辰巳屋久左衛門発端の事

附り四ツ宝銀にて高利を得る事

一、久左衛門新町え通ふ事

附り隠居久鉄異見之事

一、太夫大蔵同道にて上京の事

附り森田娘離縁の事

一、木津屋吉兵衛難病の事 つぐ

附り兄茂兵衛木津屋の家を継事

一、木津屋吉兵衛高慢之事

附り妾お里生立の事

一、新難波町小学堂を建る事

附り御咎に逢ふ事

一、木津屋吉兵衛上京の事

附り鳥居図書と名を下さる事

一、吉兵衛御装束拝領の事

附り正月堂上の学初をする事

一、吉兵衛我意を振廻事

附り辰巳屋新八出訴の事

一、吉兵衛新八に言込らるゝ事

附り辰巳屋木津屋手代相続の事

一、上田三郎右衛門挨拶の事

[Redacted]

[Redacted]

いう。なお、『石楠堂随筆』では虫が発生した場所を「源正院」とするが、これは青山氏のあと尼崎藩主となった桜井松平氏の菩提寺「深正院」が正しいと思われる。

『尼崎志』では「深正院」の項目に血屋敷伝承を紹介し、「尼崎に傳はる血屋敷の怪は、小説「銀のこうがい」より流布したものかと思ふ」とする。しかし「右侍女お米の引受人関係より一半の責任を生じて、大阪に遁走し、後更に家を大阪に興すことより、その家が大阪加島屋の成り立ちに涉つて行く」とする記述は不審である。加島屋は尼崎出身として知られる豪商だが、辰巳屋との関わりは管見のかぎり未詳である。

しかし『尼崎志』には「脚色されたる取材の底に一片の事実を含む」とも指摘される。実は尼崎青山氏には「貴田玄蕃」「朝比奈藤兵衛」という二家老が仕えていた。初代貴田玄蕃は肥後の加藤清正家が改易されたのち、青山氏に仕え重きをなした。しかし玄蕃の長男兵助の家は元禄二年（一六八九）に改易され、次男采女が跡を継いでいる。これが伝承の背景にあるかと思われるが、貴田氏自体はその後青山氏の転封に従い、幕末、明治維新まで家老職として続く。

実録怪談で「亡んだ」とされる家が実は存続していたということは珍しくはないが、なぜ「きだ玄蕃」と「お菊虫」を結ぶ伝承が地元になく伝承されたのかは不明である。また、『銀の筭』が辰巳屋の出自を尼崎と結びつけた経緯もわかっていない。

今後、考察すべき課題は多いが、これまでは『銀の筭』本文も普及していなかったため、安易に『尼崎志』の記述を踏襲したり、誤読したかたちで要約したりするものが散見された。

以上のような問題意識のもと、尼崎市郷土史研究会の方々が作成され

た翻刻の成果に、解題を付して公開させていただくことになった。今回の掲載は、青山幸督の誕生から、お米の死、喜多玄蕃切腹までの五章ぶんである。全文の公開は他日を期したいが、尼崎の伝承研究の基礎文献として、地元の伝承に関心を持つ方々にひろく資する内容と思う。

久留島元（同志社大学非常勤講師）

①内山美樹子「辰巳屋一件の虚像と実像―大岡越前守忠相日記・銀の筭・女舞剣紅楓をめぐって―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』二九（一九八四年三月）、②同『銀の筭』と『棹歌木津川八景』―付・浄瑠璃における「大岡政談」ないし政談ものについて―『近世文芸 研究と評論』二六（一九八四年六月）

③『大阪市史』第一巻「幕吏の汚行」六〇五頁（大阪市役所、一九一三年初版。一九七八年復刻）

④『宮武外骨著作集』第四卷（河出書房新社、一九八五年）四六頁。

⑤前掲、内山美樹子②のほか、菊地庸介『近世実録の研究―成長と展開―』（汲古書院、二〇〇八年）に言及がある。

⑥『国書人名辞典 第四卷』（岩波書店、一九九八年）三六八頁。

⑦宮本又次『大坂町人』（弘文館、一九五七年）、のち『宮本又次著作集 七 豪商と大阪』（講談社、一九七八年）

⑧『石楠堂随筆』『太田南畝全集第十卷』（岩波書店、一九八六年）

⑨「お菊虫」伝承については①今井秀和「お菊虫について」『日本文学論集』二九（二〇〇五年三月）、②同「お菊虫伝承の成立と伝播」『日本文学論集』三一（二〇〇七年三月）を参照。

⑩永尾利三郎『尼崎志 第一篇』（尼崎市、一九三〇年、のち一九七四年復刻）三五二頁。

⑪境眞旗男「尼崎と熊本を結ぶ貴田玄蕃」『地域史研究』三九・一（二〇〇九年九月）

⑫柏原夫佐子「おばあさんから聞いた話―兵庫県尼崎の民俗―」『近畿民俗』五五（一九七二年二月）など。

早稲田大学所蔵『銀の筭』翻刻・解題

本稿は早稲田大学所蔵、水谷不倒旧蔵『銀の筭』翻刻の解題である。本書の書誌について、早稲田大学の調査によれば、縦二十四センチ。巻頭書名「銀の筭」、巻末書名「銀のかんさし」、題簽書名「きむの筭」とある。寛延四年（一七五一）の序があり、また巻末奥書により安永八年（一七七九）徳田氏による写とされる。

内容は尼崎藩・青山氏に若殿（幸督、一六六五〜一七一〇）の誕生に始まる。若殿の成長を祈るまじないとして一度道に捨て、拾った百姓を烏帽子親とする。家老、喜多玄蕃は自ら後見となる計画が崩されて不機嫌になり、仕えていた下女お米が針を飯椀に落としたことを責め、井戸に投げ込んで殺してしまう。しかしお米の叔父、辰巳屋久兵衛が、別の家老、朝比奈藤兵衛に訴えたため取り調べが入り、玄蕃は切腹、喜多家は断絶となる。騒動をはばかった辰巳屋は大坂へ出て炭問屋、辰巳屋久左衛門となり、のちに両替商を営んで成功をおさめる。

このあと物語は大坂の辰巳屋にうつる。初代久左衛門のひ孫で養子に行った木津屋吉兵衛は秀才を鼻にかけ気ままにふるまうようになる。また実家の辰巳屋にも口を出し始めたため手代が行状を江戸に訴え、ついに大岡越前守の裁許をうけることになってしまう。

本書の後半は「辰巳屋騒動」と呼ばれ、のちに大岡政談に展開する事件である。これについては内山美樹子氏の論考があり、周辺資料の丁寧な整理、分析がなされている<sup>1)</sup>。

辰巳屋騒動の年代は元文五年（一七四〇）。木津屋吉兵衛が実家の相

続に口を出した単純な事件だったが、辰巳屋は大坂で鴻池、加島にならば両替商であり、吉兵衛と役人が通じていたため騒ぎが大きくなった<sup>2)</sup>。これは大岡越前守忠相の『日記』ほか、『町人考見録追加』などの史料で確認できる。内山氏に拠れば、『銀の筭』は事件後ほどなく成立しており、潤色も多いがおおむね史料との整合性が高く、実録性が高いと評価される。

作者、正木残光は、宮武外骨『改訂増補筆禍史』に、「片山深淵子の高弟たりし江戸の講談師正木残光」と紹介がある<sup>3)</sup>。天草・島原の合戦に取材した『金花傾嵐抄』、石川五右衛門の一代記『賊禁秘談』など、多くの実録小説に作者として署名があり、「東武残光」とも称した<sup>4)</sup>。『国書人名辞典』には「肥前熊本の人」とあるが履歴は不明の点が多い<sup>5)</sup>。

内山氏は前半のお米にまつわる因縁を「近世の怪談前半部の類型に依った筋立ては、「実記」とは程遠い」と評する。この部分は尼崎に伝わっていた「お菊虫」伝承を取り込んだものらしい。しかし、辰巳屋の出自を尼崎とする説は他書に類がない。『浪華百事談』などに載る逸話では、辰巳屋はもと難波の渡し守であり、客の落とした三百両の金子を手もつけず返したことから感謝され、客のすすめで炭問屋を始めることになったという<sup>6)</sup>。

尼崎の「お菊虫」伝承は、太田南畝『石楠堂隨筆』などに見える。元禄のころ、青山氏の家老木田玄蕃に仕える下女・お菊が殺されて井戸に捨てられたのち、寛政七年（一七四六）夏、「女の裸体にて縛られたる様の小虫」が大量発生したという<sup>7)</sup>。

尼崎の伝承は怪談皿屋敷の類話として、近世知識人には比較的知られた話だったらしく、根岸鎮衛『耳袋』では、著者自身も虫を実見したと

## 地域連携推進機構年報 第1号

2014年3月発行

園田学園女子大学・園田学園女子大学短期大学部  
<http://www.sonoda-u.ac.jp/chiki/index.html>

〒661-8520 兵庫県尼崎市南塚口町7丁目29-1

Tel 06-6429-9921

Fax 06-6429-2307

M L [chiikirenkei@sonoda-u.ac.jp](mailto:chiikirenkei@sonoda-u.ac.jp)

